

自立した女と男を 人間らしい生活を 差別のない社会を  
育み 創り出す

新しい家庭科

# We

ウイ



8.9

1991

特集 ひとと生殖



葡 萄

ひぐらしの  
一途をよしと  
無人寺

● 出生率低下、これからのヴィジョン

ヤンソン 柳沢由美子

2

● 生殖技術は、女に何をもたらすか？

長沖暁子

8

● つぶやきから叫びへ変わった

「産みたくない」女の声 吉廣紀代子

12

● 男にとって「産む」とは

ひこ・田中

17

避妊再考

芦野由利子

21

「産む」手助けをしてきて

高橋富士子

24

男・子産み・子育て

星 建男

26

不妊と向き合う

山田貴子

28

● 「近ごろの女の子の言い分

「えっ、言わせてもらっていいんですか」

土田尚美

30

〈情報〉

厚生省「人口動態統計」から

34

### 新しい家庭科を創るために

● 小学校

「ヒトと生殖」を授業で

鈴木まき子

38

● 中学校

生命の尊さと自立への道をめざして

田村 芳

43

● 高等学校

「産まない」ことからみえてくること

分校 淑子

48

荒野のバラ 愛のコンサート

田中裕一

58

家族と家庭科

小学校「家庭」にみる科学と道徳の間 酒井はるみ

64

男性学への契機／魔男の宅急便

さらば息子は愚連隊

諸橋泰樹

66

精円の夢 核家族の未来

武田秀夫

68

あかきたな 先生、ヒゲが生えてる

福田 緑・加藤由美子

70

買うて来て使う 花の種

山本謙吉

73

波 二十世紀末

半田たつ子

74

○ひと 藤田 進さん 23

・ Weの会つとい報告 53 ・ 今月の読書から 62

・ イキイキぐるうぶ 72 ・ We夏季フォーラム案内 76

・ Weになんでも言おう なんでも聞こう 78

・ わたくしからあなたに 80 ・ 泉 82 ・ 十字路 84

・ アンテナ 86 ・ 編集室からあなたに 16 ・ 編集後記 88

表紙／長野ヒデ子 季節のうた／仙田敬子  
特集イラスト／降矢奈々

## ひ と と 生 殖

### 出生率低下、

### これからのヴィジョン

ヤンソン 柳沢由実子



◆「一・五七ショック」はショックじゃない

一九九〇年の六月、厚生省が前年の人口動態統計を発表した。その中で、合計特殊出生率（一人の女性が生涯で産む子どもの数）が、統計史上最低の一・五七人とわかった。国、地方自治体、企業がスワップ一大事と騒ぎ出した。若者人口が減ると、将来の社会福祉が支えきれなくなると国は言い、地方自治体と企業はこぞって労働力不足、経済の衰退をなげく。あげくの果ては、この割合で減っていくと早晩日本民族は滅亡すると、危機感をあおる説も新聞の論説記事などに出てくる始末だった。人口学者は、今年六月に発表される予定の昨年度の出生率は、おそらくもっと下がり、一・五四台になるかもしれないと予測している（編集部註・六月六日厚生省発表によると昨年の合計特殊出生率は「一・五三」） 34頁参

照）。

マスコミが大変だと騒ぎ立てれば立てるほど、誰にとっても大変なのよ、という白けた気持ちになったのは、私だけではないようだ。最初、一方的に国や企業のあわてぶりが報道されていたが、次第に女性たちの意見も聞こえてきた。シンポジウムや新聞特集など公に発表されたものや、講演会や勉強会で私が個人的に聞いたものなどをまとめると、女たちはちょっともあわてていないことが見えてくる。

「子どもの数が増えないことにいまさら気がつくなんて人は、仕事人間ばかりやってきた男たちに決まっている。第一、経済人よ、政治家よ、そしてマスコミの男たちよ、あなたたちが家に帰らないで、どうやって子どもができるのよ、子どもは女一人じゃできないんだから」という苛立ち、これは大

方の女の意見だ。それと、一人一人が生きるのに大変な日本、とても子どもまで手が回らないという気持。さらに今現在、パートナーがいる人もいない人も、子どもと一緒に生きる将来の見通しがとても暗くて、産めない、産みたくない、という気持。これらが複合的に絡み合って数字に現れたのだ。

言ってみれば、子どもが減ることは女にとっては周知の事実、一人一人がそれぞれの人生で選択したことなのだ。選択せざるを得なかったという人もいるだろう。つまり積極的に産まないという決心をしている人も出てきた一方、産みたくとも産めないという状況があるのだ。その結果が、一・五七。ううん、やっぱりね、そこまでできたか、というのが女の本音。ちっともショックではないのだ。

#### ◆子どもと両立できない労働形態

とんでもない労働時間の長さ、単身赴任、週末出張などの勤務形態の異常さ、そしてコンピュータを駆使しての仕事内容の激化、厳しい管理体制など、主に男性にそしていまや男性と平等に働こうとする女性に現実となっているこのような非人間的な労働体制を問題にしないで、女が子を産まなくなったのは、高学歴のせいだとか、女性の職場進出のせいだとかの批判はまったく的はずれである。

男性にも女性にも、今の労働形態が家庭と両立できないも

のになってしまっている。男性は従来以上に仕事に全私生活を吸い取られている。そして均等法以来、男女に負担も平等に、ということ、女性にも男なみの異常な労働体制が敷かれている。それに堪えられない女は、自立した経済力を持つことを諦め、「家庭に入り夫を支える」方に回される。キャリア組と専業主婦、いわゆる二極分解が進んでいるのだ。

均等法が作られるとき、これを施行するのなら、男の働き方を変えることを条件にしなければ、家庭丸かかえのまま、女は男なみに働かされる、との危惧を持った女たちの主張は正しかった。一方、機会均等を得たと喜んでた労働市場未経験の若い女性たちも、労働現場の男たちでたらめといていいほどの働き振りに、これと互角に組んでやっていくには、家庭・子どもを、皮肉なことに男のように切らざるをえない、と気がつきはじめた。結婚しない女たちが増え始めているのがその証拠である。結婚しても子どもを持つことをとりあえずお預けしている人たちも増えている。これは当然の結果だ。国も企業も、男女平等、機会均等と掛け声ばかりで、現実の労働体制を女にも働き続けられるものに変えないでやってきたことのツケが回ってきたのである。

#### ◆家庭のイメージ：男と女のずれ

仕事の熾烈さを女も男なみに負担すること。能力的にいっ

て、できないことではない。問題は、そんな無理な働き方では、男だけでなく、女も駄目になってしまうことだ。だれもそんな非人間的な生活を望んでいない。いま男たちの生き方を見れば、個人生活での寛ぎ、子どもを育てる楽しさ、老人と、友達と、生きていることを共感し合う時間もなにもありはしない。

男たちもおかしさには気付いていて、女にまでこんな辛い思いはさせたくないという人もいる。しかし、それは間違った思いやりというものだ。そのような働き方がおかしいと、非人間的な仕事生活を改めることにこそ、力を注いでほしい。男だから仕事ができる、ではなくて、男にも女にも仕事ができる社会作りになつてほしいものだ。

自分が疲れて帰ってきたとき、寛げる家庭がほしい、と男たちがいうとき、彼らは、その寛げる家庭は妻が一人で用意してくれて、自分はそこでお客さんをするつもりだ。ところが妻はもう、夫にお客さんしてほしくないのだ。いっしょに家庭を作つてほしい。子どもと一緒に育てたいのだ。

女たちが「男も女も仕事に家庭に」と、手探りでもとにかく働き出したとき、男たちは相も変わらず「男は仕事、女は家庭」という価値観にどっぷりとつかっている。問題はこれずれである。女たちのフライングではない。男たちの腰が重すぎるのだ。

夫の協力がなければ、社会の制度も依然として女が家にいることを前提として作られている現実の中で、女たちの孤軍奮闘は、ますます深刻なものになる。子どもが産まれた後の生活、家族に病人が出たとき、老親が動けなくなつたとき、私たちは目の前にはっきり「男は仕事、女は家庭」という社会の価値観を突き付けられる。日本の福祉制度が、各戸に女（主婦）がいることを前提に作られているのだ。ここまでくると、なぜ女が子を産むというところで自粛せざるを得ないかがよくわかる。男と同じように労働生活を持ち、そのうえ日本の社会福祉の欠如の埋め合わせまでさせられて、働き続けるには、どこかでエネルギーをコントロールするしかないのだ。

健康を蝕むほどの労働時間・労働内容は、いま過労死という極端な形で女にも現れ始めている。男性とちがつて生理があることが、女性の健康のパロメーターになっているのだ。それが生理不順、生理停止という症状を訴え、危険信号を送り始めている。リプロダクティブ・ヘルス（性と生殖に関する健康）の破壊は、労働の激化と平行することはいま産業社会で働く女性の多くが、多かれ少なかれ経験している。自分のからだの健康不調と、子どもを産むことの不安、これはいうまでもなく表裏一体である。こんな中で、女たちは産むことにノーをいい始めた。いつてみれば、産まないことは



女ができる唯一の自己防衛なのだ。

### ◆子を産む、産まないは個人の選択

この一年間で、政府は児童手当を第一子から支給する、育児休業制度を一年間男女に（但し無給）と、子どもをもつて働く親に対する援助をおくればせながら法制化し始めた。女に子どもを産んでもらうための苦肉の策である。自民党内部では、子どもの数で、年金を多く支給するという案も出たという。しかし金で援助という政策はなんとなくさん臭い。このような策が効果をもたらさなかったら、引っ込めるということになりかねないではないか。女たちは、援助を受けるからには子を産みますなど、ゆめゆめ約束してはならない。子どもを産むか産まないかは、あくまで個人がそれぞれの人生の中で決める問題だからである。

出生率低下に関連して、これまで低かったのに最近出生率が上がり始めた国の例として、スウェーデンがよく引き合いに出される。八十六年ごろまでは一・六ぐらいだった出生率が、一昨年は二・〇一、昨年のはおそらく二・一を越えるのではないかという予測である。そしてその原因に、女性の社会進出を援助する制度がかならず挙げられる。男女ともに取れる四百五十日の有給の出産育児制度を初めとする、一連の親援助政策のことである。（ただし、それが日本で引き合い

に出されるときは、親援助政策とはいわれず、女性援助政策となってしまうところに大きな問題がある）。

### ◆福祉社会の全体図を

スウェーデンの例に習って、遅ればせながらも日本政府が女性援助政策を立てること自体に異論を唱えるつもりはない。ただここで幾つか、国や企業、そして、私たち個人がはっきり認識しておかなければならないことがある。

まず第一に、子どもを産ませるための女性援助政策であってはならないことである。男女の賃金格差をなくし、生涯的に働ける環境を作ることである。スウェーデンを初め、女性の社会進出を援助する国の理念は、男も女も経済的自立をすること。スウェーデンの女性たちに、なぜ子どもの数が増えはじめたのかと聞くと、決まって「女一人の収入でも、子どもを育てられるようになったから」という答えが返ってくる。

第二に、女性援助の背景に、男でも女でも、子どもがいてもいなくても、結婚していてもしていなくても、老人でも若者でも、障害者でも健常者でも、「大人であれば経済的に自立するのは当然とする理念」がほしい。このような労働の基本原理念さえしっかりしていれば、なぜ女はそんなに苦しんでまで外に出て働くこうとするのか、夫の収入で我慢すればいいのに、とか、なぜ女のくせに働き続けるのか、オールドミス

になるだけさというセクシャルハラスメントに論駁できる。

経済的な自立ができない人に、その障害を取り払い、援助（経済、職業訓練・斡旋、住宅などあらゆる形の）を与えるのが社会福祉である。日本なりの福祉の青写真、これがまず必要なのだ。女性援助は、その大事な一要素でなければならぬ。福祉の対象になるのは、小さい子どもをもって働きに出ようとする女性たちばかりではない。定年退職者、主婦で無収入のまま高齢になった女たち、障害者、病人、失業者、自立できないほどの収入しかないパート労働者など、たくさんいる。いわば、今の日本社会の基準となっている「健康で壮年の男子」以外の人すべてであるといってもいい。

第三に、「男は仕事、女は家庭」という性別固定役割分担の価値観を根底から覆すことだ。そのための制度作りだけでなく、情報活動を政府も企業も率先して行うことである。例えば、会社の社長、大臣のような、男たちが一目置くポストにいる男に、出産育児休暇を取らせ、老親介護のために休職させるのだ。男が十五時間働かなければならない職場には、女を一人雇用して、男も女も五時に帰らせるのだ。そしてこれらを鳴り物入りでどんどん知らせるのだ。

これらの三つのことが実現されれば、子どもが増えるといっているのではないが、少なくともいまよりは生きやすくなるだろうと思う。

#### ◆今のままの日本、だれが誇れる？

生きにくい日本、将来の日本を、人口減少の面から心配する人たちは、今の生きにくい日本をどう考えているのだろうか。今の日本の繁栄は人口に基づくもの、国力は人口なりとする考えを、私は警戒する。競争、闇雲な働き方、男支配の世の中、人の心より金の力を信じろと行動をもって教える代議士、企業家、官僚がのさばっているのが、経済大国と自称する日本の中身だ。強い者、あえていえば強い男だけが不自由を感じない日本だ。

国の政治に携わる人に、理念をもってほしいものである。個人の尊厳は、性別、年齢、健康状態、貧富の差、出身、国籍に関係なく守られなければならないとの理念を。現在の日本の社会システムは、健康で、壮年で、経済力のある日本男子の価値観で作られている。労働界、経済界、政界、マスコミを形成しているのが男であることと、日本の福祉がこれ程遅れていることは、むしろ、無関係ではない。今のままで不自由を感じないものが、変革を唱えるはずがないのだから。

そして、その今のままで不自由な感じない人たちが、出生率の低下を騒いでいることに、私は危険を感じるのである。今の日本の繁栄を誇り、永遠にと願うことと、日本人の人口減少を憂えることは一体で、そこに、今のままの日本でよしとする価値観を感じるからだ。



二年間、フィリピンに住んで、私は日本人の、金儲けのために木を山を、水を海を、空気をオゾン層を破壊しても、全部が破壊され尽くすまで儲けたものが勝ち、といわんばかりの強欲さを目の当たりにした、しかもおのれの今の繁栄のために、外国までも乗り出していき、相手国によっては環境保全より経済支援を望まざるを得ない逼迫した国情があるのを知りながら、資源を貪り、我がもの顔に振る舞っている。経済力に物を言わせた傍若無人なやり方で、第三世界を得意げに席捲する今の日本を、そのままわが日本、わが繁栄とだれが誇れるだろう。

#### ◆地球の中の一國として

いま、日本では人口が減ることが心配されている。しかし、世界規模で人口を見ると、人口の爆発的增加こそ深刻な問題、と世界人口白書は警告しているのだ。目を世界に向けてみると、今地球の人口は五十三億人。毎秒三人、一日二十五万人の割合で増加している。西暦二千年には約十億人が増えているだろうとの予測。さらにそのまま増え続けければ、その百年後の二十一世紀末には、最悪のシナリオは百四十億人、つまり現在の三倍近くに増えているというのだ。人口の抑制と環境保全、さらに貧困の解消は、地球上のどの国にも最優先の政治課題だと国連人口基金は呼び掛けている。

地球規模の人口抑制という視点から見ると、日本は優秀と

いうことになる。子どもを少なく産むことは、個人の選択であることを思えば、個人の利益と地球規模の利益は合致することになる。利益が合致しないのは、国という単位だ。それと自国の人口こそ国力、経済力と信じている人々である。

だが、ここで考えたい。個人の利益と国と地球の利益を合致させることはできないだろうか。日本は本来、国土の割に人口の多い国である。いまでも人口密度は世界第七位。先進工業国の中では、最も多いのだ。そのうえ、国土の七十五％は山で、人が住めない。その狭い土地に、一億二千万人もが住んでいることが、そもそも多すぎるのではないか。発想を転換して、もっと国土に見合った人口というものがあるのではないか。人口学者、経済学者には、そのようなことをこそ計算してもらいたい。国土に見合った人口は、暮らしの快適さ、生きやすさを基準に考えたい。人と人とが気持ちよく付き合える余裕がある生活がおくれるには、どのくらいの経済力があつたらいいのか。国際的にも共有財産である自然を破壊せず、経済力のない国を搾取せず、大国に追従せずにやっていくには、どの位の力があればいいのか。

もう一度、小さな島国日本の地理的な条件を考えて、人口、経済力、そしてなにより、私たちの生活のあるべき姿を考えてみるきっかけとして、出生率の問題をとらえたい。

(ヤンソンやなぎさわ ゆみこ・フリーライター)

## ひとと生殖

### 生殖技術は

### 女に何をもたらすのか？

長 沖 暁 子



今年四月、「平成二年度 生殖医学の登録に関する委員会

報告」(日本産科婦人科学会誌四三巻四号)が発表され、体外受精によって国内で生まれた子どもの数が初めて公表された(昨年初の報告があったが、それには出生児数はない)。

それによれば、一九八九年一年間での出生児数は四四六人、それ以前は二二一人。すでに六六七人の体外受精児が生まれたことになる。体外受精の意義、倫理的問題、そして女のからだへの副作用など議論のないまま、体外受精は不妊治療の中に組み込まれ、大きな位置を占めてしまった。

一九八三年初めての体外受精児が生まれてからすでに八年近くになる。そしてやっと報告がでる。これが生殖医療の現状を端的に示している。きちんとした情報の提供なしに、技術のもたらす夢だけがばらまかれ、技術が軌道に乗ったとこ

ろで公開されるのだ。

これだけ有名になった体外受精ですら具体的に何が行なわれているのかほとんど知られていない。この体外受精が不妊治療のほんの氷山の一角だということも。まして不妊治療の過程で女たちに何が行なわれ、彼女たちが何を感じているのかはまったく伝えられていない。これが生殖医療の独走を許す一因になっているのではないだろうか。

とりあえず体外受精を例にあげ、簡単にその過程を追ってみよう。体外受精ではまず卵巣刺激が行われ、排卵誘発剤の注射が数日〜十日間うたれる。妊娠率をあげるには数個の卵を必要とするためだ。注射によってお尻が腫れてうつぶせにしか寝れない、吐き気、めまい、ほてりなどの症状をほと

などの女たちが感じている。それに加え、卵巢肥大、腹水、胸水などの卵巢過剰刺激（海外では死に至った例も報告されている）や、卵巢嚢腫や卵巢ガンの誘発。排卵誘発剤の短期、長期両方の副作用が考えられ、子どもへの影響も疑問視されている。また排卵誘発剤を何度も使うことによって、本来のホルモン生産がうまくいけなくなり、排卵誘発剤を使わないと排卵しなくなってしまうたり、卵巢内の卵がなくなってしまう以上排卵できなくなってしまうといったこともおこっている。ところがその副作用はまったく無視されている。

排卵誘発剤は体外受精だけでなく一般的な不妊治療にもほとんど使われている。原因不明、または男性側に原因がある不妊のような場合でもまず女に対して使われるので、その影響は大きい。新しい排卵誘発法が開発されるたびに、副作用が少ないことが必ずメリットとしてあげられているにもかかわらず、医者は重篤な副作用は見つかっていないという。子どもを得るといふことの前には少々の犠牲には目をつぶれということか。

卵巢刺激のあとは、体内にある卵を体外に採りださなければならぬわけだが、これには手術が必要になる。当初は全身麻酔でお腹に三つの穴をあけ腹腔鏡を使って行なわれていたが、現在は部分麻酔ですむ超音波を使った方法が主流になってきている。そしてやっと体外で受精が行なわれ、次にそ

の受精卵を子宮に戻す胚移植が行なわれる。通常三〜四個ぐらいの胚―受精後分裂した卵をこう呼ぶ―が膈から細い管で子宮に戻される。これが一サイクルだが、一回で成功するのはまれなこと。繰り返し受けることになる。もちろん体外受精を受けるまでに数えきれない検査や治療を受けた後のことだ。そして胚移植後もホルモン剤の投与が続く。

検査、手術の過程での出血、感染、麻酔による副作用なども考えられる。現に、東邦大学で不妊治療を受けていた女の人が腹腔鏡を使った検査の最中に死んでいる。しかしその原因も明らかになってはいない。

成功率一〇％、これがごく初期から言われていた数字だ。

しかし、この数字は体外受精の最後にあたる胚移植当たりの妊娠率であり、卵巢刺激をしたものの卵が採れなかったり、卵は採れたが受精しなかったケースは無視され、一方で四五割にものぼる流産や子宮外妊娠（八九年では四〇％）も妊娠に入っているという都合のよい計算だ。一般に私たちが成功と考えるのは治療を受け、子どもを得ることができるといふことだろう。この意味の成功率は八八年までは約四％、八九年で飛躍的にのびたがそれでも八％ぐらいのものだ。

たとえ出産までこぎつけても問題はまだ残る。多胎が多く（約四分の一）、また多胎の当然の結果として未熟児も多く、

帝王切開率も約半数と高い。これだけでも肉体的、精神的負担はかなり大きい。そして、こうやって不妊治療を受けて子どもを得ても不妊そのものが治るわけではない。それに加えて本当にこのような技術が有効なのかという疑問もある。体外受精を受けようとして待機中の人の妊娠率（つまり治療によらない妊娠）も体外受精と同じように七〜二八％あるというデータすらあるのだ。

他の分野でも同じように、新しい技術は失敗を重ねて初めて一人前の技術として成長する。しかし生殖技術の場合、対象になるのは人間、それも生身の女だ。日本では八九年に体外受精を行った病院は七四もあるが、その約六割しか子どもが生まれていない。どこの病院も遅れまいと手を出し、技術の向上のための失敗を重ねている。

一方、大学病院などでは研究業績をあげることがまず第一になり、論文を書くためには新しい技術に次々に手をつけねばならない。例えば簡易体外受精としてすでに定着したギフトは、卵と精子をまぜ受精を確認する前に（全身麻酔で行なわれる手術で）卵管に戻すものだが、戻すまでの時間をどうするかなど研究はまだ重ねられている。受精途中の卵を卵管に戻すプロスト、男性不妊を対象に卵に精子を直接注入しようという顕微受精、そして八九年のクリスマスに初めて子どもが誕生した凍結胚を使った体外受精など新しい技術をあげ

ればきりが無い。このような技術の開発の影で多くの技術改良のための実験台が作られていく。正確な情報が公開されないのは新しい対象者を供給するためと考えるのは穿ち過ぎとも言えないだろう。

生殖技術はこのような「産ませる」技術だけではない。「産ませない」ために使われる生殖技術も次々に現われる。

たとえば開発援助とセットになり第三世界に持ち込まれ、半強制的に使われている避妊薬の数々。ピルがブルトリコの人たちを実験台にして開発されたことは有名だが、三ヶ月間有効な注射避妊薬・デポプロベラ、五年間有効な埋め込み式避妊薬・ノアプラントもアジア諸国をはじめとする第三世界の女たちが実験台になった。その後先進国で認可という構造は変わっていない。

また、胎児診断や胎児治療など胎児に対する技術や、胚生検（希望の胚だけを子宮に戻すために胚の一部を取り出し、染色体などを調べる技術で、イギリスではすでに実用された）など胚の段階での技術の開発も進んでいる。胎児診断は胎児を治療するために病気をみつける目的で開発されたと医者はいふ。しかしその結果によって、障害児の中絶が行なわれているのが現状だし、インドなどでは女児を中絶するためにも使われている。

ここでも技術の対象になるのは女のからだだ。「産ませる」技術の対象となる女と「産ませない」技術の対象となる女ははっきり分けられていく。それはできてくる子どもの製品としての価値であり、女のからだを通して製品の品質が管理されているのだ。生命がモノとして扱われている世界だ。両方を通じて、女のからだを器として扱い、子どもの量と質をコントロールしようという人口管理政策と、その背景に見え隠れする優生思想を技術が支えていることが見えてくる。

このような新しい技術があたかも簡単に、そして害もなくできるかのように報道され、一般の人々は体外受精でほとんどの人に子どもが生まれ、胎児診断によってあらゆる障害がわかるかのように思いこまされてしまう。不妊の人たちや障害児の親への「体外受精があるじゃない」、「胎児診断があつたのに」の声は、どれほど傷つけているだろうことか。

こうやって女たちは生殖技術に追い込まれていく。受けないことには、責任を果たしたと思えなくなるのだ。しかしそこで行なわれているのは医者の手によってしか行なえない技術、そしていったん治療に入ると決めてしまえば、あとは医者者に任せるしかない技術だ。それも患者を人間扱いしない医者者の扱いに耐え、自分のからだを試験管になったかのようなだというほどの疎外感と屈辱感を感じて。ここでは女のからだ

への自己決定権などはるかかなただ。

それでも女たちは治療を受ける。なぜ彼女たちは治療に向かうのか。私たちは昨年『不妊』の翻訳をてがけ『不妊―いま何が行われているか』フィンレージの会 晶文社刊』その中で語られる実態に驚くと共に、不妊の人の気持ちに初めて触れた。本が出版され、その反響は私たちの予想をこえた。本をきっかけに日本でも不妊の女たちが語り始めた、そしてその語る状況は国をこえて変わらない。彼女たちが感じているのは、子どもを産まねばならないという外的圧力以上に、自分のアイデンティティの危うさ、自分で自分を肯定できない気持ちだという。今まで彼女たちのそんな気持ちを語れる場はなかった。そして精神的に支える場も。このような動きの中で不妊の人たちが交流し、不妊を受け入れ、乗り越えるための自助グループを作ろうという活動も始まっている。

女たちの性・生殖に関わることは長い間語られてこなかった。しかし出産、中絶、女たちの本音が語りだされ、語ることによって整理され、女たちの共通の課題になってきた。不妊の人たちが語り始めた今、女にとって子どもを産むとはどういうことなのかを、産む・産まない・産めないを通して考える基盤がやっとできたのだと思う。その中から、生殖技術に対してもっとも有効な批判が出てくるのではないかと期待している。

(ながおき さとこ・フィンレージの会)

## ひとと生殖

### つづやきから叫びへ変わった

### 「産みたくない」女の声

吉廣紀代子



ひとつの数字が「踏み絵」のような役割を果たしてしまふことがあるものだ。昨年の六月に一九八九（平成元）年の合計特殊出生率が史上最低の一・五七に落ち込んだと発表された途端、それは「一・五七ショック」となり、「建前論を言っている場合ではない」とばかりにさまざまな人の本音を表出させる結果を招いた。

その証拠に、総理大臣以下、大臣、財界人には、国家イコール経済大国の危機発言が目立ち、それに対抗して女性からは「出産ストライキ」や反発もみられた。そして、浮かび上がってきたのは、男対女が繰り広げた労使の対決のような構図であった。対決は華々しいから面白く、多くの人々の関心を呼び、耳目を集めることになった。

しかし、厚生省人口問題研究所の見解では、合計特殊出生

率が一・五七まで低くなった原因は、出産の手控えや、諦めではなく、この十数年続いている晩婚化と未婚率の上昇のせいだという。実際、八九年の二五―二九歳の女性の未婚率は三七・三％（労働力調査）と史上最高を記録している。日本では婚外子が極めて少なく、出産時期は二五―三四歳に集中しているから、広義に解釈すれば、晩婚、未婚率の上昇も産み控えと考えられなくもないが。

従って、もし、誰かが本気で出生率の上昇に取り組むなら、女が結婚したがらなくなっている要因を探ってみるから始めなければショックは癒せない。だが、政府が打ち出してきたのは、育児手当の増額や、育児休業の制度化である。しかも、その中身はいよいよはまし程度であるから、果たして有効なのかどうか極めて疑わしい。

要するに、いつものことながら数字の魔力に浮足立って、事の本質は直視されず、対症療法が試みられているわけである。そうとわかって、私はまた別の視点から今回の騒動へ加わることにした。それは、これまで公表されることなく、つぶやきや囁きで終わっていた産まない選択や産みたくない声を、この際、公にして「女が子どもを産む権利」と「産まない自由」を等価とする方向へ道を付けたいという期待からであつた。

産む女と産まない女、産めない女を分断して差別しない世の中になつて欲しいという願いを叶える第一歩を具体化する時期を迎えていると判断した。幸い、私は既に産む、産まないの迷いから抜け出た立場にいるから冷静に対応できるのではないかと思つた。そうしてまとめたのが『女が子どもを産みながらない理由』(晩成書房)である。

子どもを産みたくない、産まないと声を上げた十八人の手記を集めたもので、そのモノローグは心の奥深くから絞り出されている。それは、迷いながらのつぶやきが歳月の中ではつきりとした意思や選択に変わっていく経過を物語っているが、その背後には、これまで個人として産む、産まないを選べないまま産まされ続けた女たちの悲痛な叫びが重なって聞こえてくるようである。

およそ半世紀前まで、女に生まれたなら、その人の生涯は女という性で規定され、結婚して子どもを産み、育てることが務めであり、それが幸せとされた。女にとってそれは生活の手段で、生きていく術は他に少なかったから社会通念に従うしかなかった。女は「富国強兵」を目標にする国家と「家」の存続を最優先する家制度を子どもを産むことで支えることを強要された。

しかし、敗戦を経て日本の目標は変化した。それは平和と経済に取って変わり、女は避妊と中絶が選べるようになって、女も働けば経済的自立が可能になった。その後の世の中は、女性の社会進出に有利に動いた。七〇年代後半の産業構造の転換、加えて、「国連婦人の十年」の活動によって施行となつた雇用機会均等法。女性が男性と肩を並べて働くだけでなく、女性の上司が男性の部下に指示を出す情景も見られるようになってきた。

おまけに、寿命が一気に延びて、人生八十年となっている。子どもを四、五人産んで、育て、末子が成人する頃には臨終を迎えていた時代とは様変わりして、子どもが手を離れてから四十年もの年月を生きなければならなくなっている。一言で言えば、女が生きる社会環境は、半世紀の間に天地が逆転してしまふほど変化した。



結婚の意味も当然変わった。女性が経済的に自立できなかった時には「永久就職」と呼ばれ、生活の手段であることが明らかだった結婚を、女性の過半数の五四・六％が「(してもしなくても)どちらでもよい」と答えるようになっていた(総理府「女性に関する世論調査」平成二年)。二十代の女性は、七五・三％が「どちらでもよい」で、そのわけは、「結婚したい人が現れれば結婚し、そうでなければ無理して結婚しなくてもよい」「結婚するしないは個人の自由であるから、どちらでもよい」と、結婚は相手次第であると考えようになっている。

そして、結婚が具体的対象となると、シングルライフとの比較で検討されるようになり、そのメリットとして男性は「精神的安らぎ」、女性は「子どもや家族を持てる」を第一に挙げている(厚生省人口問題研究所、昭和六二年度「独身者の結婚観に関する全国調査」)。要するに、女にとって生きていくための必要条件であった結婚が、ふさわしい相手を得て一緒に暮らし、子どもを産んで育てながら家族をつくっていく十分条件へと変わった。

結構なことであるが、自由な意志による選択というのは、言うは易く行はるは難しを免れない。まして男女の中は理屈ではなく、感覚や感情などどうつらい易いファクターに左右されるから、法律によって一対一の男女関係を固定化する結婚と

は矛盾する面も多く、それらを個人で解決するのは容易いことではなからう。運よく結婚にこぎ着けたとしても、子どもを持つには更に覚悟を決めなければならないから、模様眺めが続き、モラトリアムなんて言われたりする。

実際、現在、子どもを産んで育てることは、考えれば考えるほど大変で、決断の答えはなかなか出ない。「どうしても産みたい」という強固な意志でもなければ、「ま、他の人たちもどうにかやっているから、産んでしまえばどうにかなるんだらう」くらいに、少々無責任に行動しなければ、考えるだけに終わってしまいそうである。

敗戦の後、世界中がアッと驚く程の経済発展をやつてのけ、三十年足らずで日本は経済大国になったが、それは、経済最優先の一元価値観で突っ走った結果であった。女性の経済的自立も実現できるようになったが、その反面、本来、経済の論理を当てはめられない対象まで経済一本槍で押し切られ、さまざまな歪みも現れている。しかも、それは弱い所、者に集中する傾向を免れてはいない。だから、今、男女が共生しながら子どもを産み育てることに、その矛盾が顕著に現れている。

豊かになったのはいいが、子どもを育てるのにお金が掛かり過ぎるようになって数を制限せざるを得なくなっている。保険会社の試算によれば、ひとりを育てて大学を卒業させるま

でに、最低でも二四〇〇万円かかる。おまけに、家庭を築くのに必要な住宅を建てる土地が高くて手が届かない。地価の高騰は家賃にもはねかえり、求めるスペースの住宅には住めない。特に、首都圏では絶望的。

お金と住宅に恵まれたとしても、受験競争に象徴される子どもを巡る環境の悪さ。子育てを楽しむどころか、幼児の時から世の中の要求や受験に合わせた「教育」を始めなければ「落ちこぼれ」「いじめ」の恐怖に苛まれるという競争社会。そのうえ親は長時間労働で親も子も疲れている。挙句に急速な高齢化社会の到来で、子どもが老後の保証とならない。

こんな状況だから、子どもを持ちたくてもマネー、スペース、タイムに難ありで、思い止まってしまう。しかし、産める性の女が「子どもを産みたくない」と声を上げるには、身近を現実だけでなく、身体や生理を通して地球の生命との共鳴を感じとっているフシもある。なぜなら、女が子どもを産みながらなくなり、出生率が下がっているのは、日本だけでなく先進工業国に共通の現象であるのだから。

ヒトはこれまで種として、あるいは民族、国家がサバイバルの攻防を繰り返してきたが、科学技術は一步まちがえばヒトも地球も滅ぼしてしまうまでに「進歩」を遂げてしまった。一方、発展途上国では人口爆発をくい止めようと国家が

乗り出している。北と南では、子どもを巡って正反対の政策が取られている現実。

統計学者の算定によれば、地球上にこれまで生まれてきたヒトの合計は、六〇〇億だそう。そして、今年の国連人口基金の発表では、現在五四億の人口は二一世紀までに六四億に達し、二〇五〇年には一〇〇億になると予測されている。こうなると、この地球にヒトが溢れ、自然破壊が進む様が想像に難くない。溢れる人々がなだれ込む所は、職とお金のある先進工業国しかない。だから、日本をはじめ先進工業国は、自国の人口を増やすことより発展途上国から溢れる人々をどうするかを考えることの方が急を要するはず。日本が出生率をあげるように制度を充実させて、次代の労働力を自前で調達しようとするだけでは許されなくなる国際情勢である。

「子どもを産みたくない」のは、国際情勢を考えての選択と主張したいわけではない。只、こんな未来が見えているのに、自分がやりたいことを諦めても子どもを産み、育てなくてはいけないと言われる必要もないのではないのでしょうかと問いたいだけである。

女が子どもを産むか、産まないかは、それぞれの存在の根源と関わり、自分の生き方を選ぶとき、何を優先させるかで人生観がきまる。解放とは、自分が好きなことができる状況

## ・編集室からあなたに・

### 1. Weフォーラムのプログラム変更について

- 8月3日のシンポジウムにお願いしていた山下政一さんがちょうどその時期、カンボジアに行かなくてはならない用事ができてしまいました。大変残念ですが了承し、ピンチヒッターとして、「アジア人権基金」の有光健さんをお願いしました。同基金は、現在「バングラディシュ台風災害者救援」に力を入れています。同基金が支援している「国境のない医師団」もすでに現地入りし、医療救援活動に入っているとのこと。有光さんは、同基金のキーマンともいうべき方で、国対国の援助ではなく、人と人とのつながりから始めなければ意味がないというのが持論です。
- 同日の分科会に、八番目が加わりました（本号76頁参照）。平井雷太さんからのお申し出があり、テーマと深くかかわっていますので、すでにチラシを印刷・配布済みでしたが、分科会として位置づけることにしました。

### 2. 10月号からの新連載について

- 10月号からむらき数子さんの連載「現代衣生活考」が始まります。“着る”いとなみを中心に、むらきさん独自の調査を基本に、ユニークな視点は、家庭科にとって新鮮です。  
若い執筆者の欄は、山本謙吉さんから江口凡太郎さんにバトンタッチです。江口さんは、北海道の高校に男性家庭科教師として赴任したばかり。ホヤホヤの体験からどんな言葉がとび出すでしょうか。

### 3. Weバックナンバーを特別価格で／

- この号と同時にお届けした夏増刊号にはご案内しましたがWe 10周年を記念して、バックナンバーを特別価格でお届けします。在庫の僅少の号も思い切ってお届けしますのでなるべく早くお申し込み下さい。
- 10冊以上ご注文の場合は、1冊500円で、20冊以上ご注文の場合は、1冊450円で、在庫のない号は下記の通りです。  
vol. 1 5月号 1月号  
vol. 2 5月号 8.9月号  
vol. 3 5月号 夏増刊号  
vol. 4 12月号
- その他の号は全部ありますが、数冊しかない号もありますので、品切れの節はお許し下さい。

をつくり出して、それを実行することであると考えている。だから、女はすべて子どもを産みたがると思い込まれると困るのだ。思い込みというのは、偏見である場合が多く、抑圧や差別に繋がりがりやすいから用心しなくてはいい。

出生率が下がったのは、女が子どもを産みにくくなっている。

る社会のせいと指摘するのは、間違っていない。だから、産みやすい制度を作れば、産みたい人は助かる。しかし、産みたくない女の産まない選択もあることを、今、叫んでおきたい。

（よしひろ きよこ・フリーライター）

## ひとと生殖

### 男にとって「産む」とは

ひこ・田中



近ごろ、「一・五七（合計特殊出生率）ショック」とかい  
うのがあるみたい。

データってのはおかしなもので、妙に説得力を持つ。納得  
していなくても、説得されてしまう。説得されないと、こっ  
ちが馬鹿だと思われてしまうのじゃないか、みたいな恐怖感  
だってある。悪い癖。これってきつと、教育のせいだよ。

データは必要ない、とは思わない。でも、その「客観性」  
とやらが、「正しい」と簡単に結びつくのが厄介。それは、  
誰が解析するかによって、いかようにも読み取れるもののな  
に、「一・なにがし」だから「大変だー」と、声のかい誰  
かがわめいたから、すぐに、「そうか、『大変だー』なのか。  
だったら、大変だー」と飛びつくのはね。

それと、人間を扱うデータには、私やあなたが含まれてい

る事実が時に見失われること。「一・なにがし」の場合、男  
は含まれないし、十五歳以下と五十歳以上の女も含まれない  
けれど、十五から四九歳までのあなたは含まれる。ならば、  
当事者としてのあなたは、この「一・なにがし」が、あなた  
自身にとって果たして「大変」なことなのかどうかを考え、  
語る権利があるはずだけど、それはしよせん主観にすぎな  
い。もっと客観的、大局的に考えるのが大人の仕草だと、誰  
に言われるまでもなく、もしかしたらあなた自身が、規制す  
るかもしれない。

「一・なにがし」を、「大変だー」と叫んだ人たちに関係の  
あるものを思い浮かべると、例えば「一票の格差」がある。  
この格差は、票の価値の差ってことだから、一対三の場合、  
一方の選挙区の有権者一人の価値に比べて、別の選挙区の有

権者一人の価値が三分の一とかになってしまふ。「〇・三三人」ってこと。こいつは本当に、「大変だー」よ。でも、そんなに迅速に改正をしないところを見ると、「大変だー」と切実に考へてはいないみたいよね。「大変だー」と叫ぶ人にも、色々と都合があるらしい。素直にそう言えはいいのに。

素直に言わないことと、「大変だー」が「正しい」認識のようにあおられる状況は、何か臭う……。と思つてたら、「女が高学歴になったから」なんて発言が出るし、「晩婚」がどしたらというのもあつたし、育児休業案なんかも出た。

この案つて、両性の親が育児休業を取り易くなるのはいいけれど、有給じゃなければ、給与の低い方が休みを取るのはいい目に見えているし、また、取れるのに取らない女は、プレッシャーも掛けられるに違いない。つまり、女を労働力として必要だし、なおかつ「母性」による育児（と老人介護）者としても必要だという事態への、当面の解決策をスムーズに導き出すために、ちゃっかり「一・なにがし」が使われているようにも見える。そのための「大変だー」、なんじゃない？

だから単に、「ほら見ろ。男は『子産み・子育て』の状況をナンモ分かっていない」と批判してみても、女の気持ち（ルサンチマン）は一時スツとするかもしれないけど、「分かってない」ことを気にしているんじゃないかと、「大変だー」を利用したい側にとっては痛くも痒くもないかもしれない。

だって、「男はナンモ分かっていない」のは事実だということになっているし、「分かっていない」のを女は「よく分かっていない」らしいし、女がそれを「よく分かっていない」らしいのを、男も「よく分かっていない」らしいだけだもん。じゃ、どうする？ 例えば、「んなもん、別に変じゃないよ」と具体的に女が発言すること。たぶん、今号のWe誌上では、誰かがそれをやっているでしょうから、男の私はパス。そして、「分かっていない」のなら、騒ぐ資格はない、とも言える。また、次ぎのような質問も有効でしょう。

「あんたは、『国家存続のために、この行為をするのだ』と考えながら、生殖用のセックスをしていたの？」

それにうなづくなら、エライ。あきれるけどね。

といった辺りが、今回の「一・なにがしショック」への感想なの。

で、「男にとって『産む』とは」です。

この設問に男はクラッとする。だって、「男は分かっていない」が、両性の共通理解だったはずだと、男は考へているから。そんなことを急に質問されても困る。

「男にとって、天下国家的見地からの、合計特殊出生率の低下とは」だったら答えられる（つもりだ）けど、そんな話、聞きたくないでしょうし。

でも、困つても、すぐに立ち直つて、凛々と答えるのが、

男子たるものの努めでもありますから、答えます。

「男にとって『産む』とは、『産まれる』と『産ませる』だよ」と。

「結局、女は生まれて、産むんだよね。そして産んだ子供が女だったら、そいつがまた産む。『産まれる』ことと、『産む』ことが、次々リンクしているってこと。ところが俺たち男は『産まれる』ばかりで、『産む』がない。だから、『産ませる』って訳」てなこと。

あらゆるシーンで男は、己を主体として生き、主権もまた握ってきたよね。例えば、男は「見る」主体であり、女は「見られる」客体だとか。

なのに、「産む」の主体にだけはなれなかった。だから、このことに関する男のアプローチは、切りがないほどある。生物科学による生殖への介入。法制度による中絶の意志決定への介入。近代医学による出産への介入。家制度による子供の所有権の強奪。男は「文化」で、「産む」性である女は「自然」（野性ってこと）だという囲い込み、ナドナド。

つまり、主体が無理なら、主権は奪うってこと。

そうした姿勢による、男の発言や身振りは、うんざりするほど溢れているでしょ。「男として産まれたからには」だとか、「男のかい性」ってやつ。「産まれる」は女を「母」に位置付け、「産ませる」は女を「妻」とするのよ。

それが「産む」に関する男のアイデンティティな訳。だから、男は、自分が「分かっていない」のは当然だし、「分かっていない」ことを逆手にとって、「大変だー」をやれてしまふの。

ところで、「女にとって『産む』とは」なる設問を考える。こいつは、うんざりする程流布しているよね。ここ数十年だって「スポック博士の」なんたらから、「母原病」なんたらまで。女たちはそうしたメッセージに翻弄され続けてきたのでしょ。自分の責任でもないことを責任のように言われて。

そうそう、書き手は気付いてはいないみたいだけど、似た言説が最近もあった。母の日の「天声人語」。「母親とは／どんな失敗をしても、どんな悪いことをしても、そのまま受けとめ、抱きとめ、ゆるし、包んでくれ」る「無条件の愛で子どもを受け入れ」、「あるがまま、自然のままの状態を包み込む大きな包容力」的存在であり、一方父親は、「自然のままの世界ではなく、規範の世界を示す存在だ。もつとも、イマドキのことだから、「実際の人間は、母親でも父親でも母性的傾向と父性的傾向を」持っている」と、フォロワーのつもりの文章が挿入されている。でも、「自然のまま」が母性的とネーミングされ、「規範」が父性的とネーミングされると、結局は同じだよ。

つまり、「産む」女は主体ではあるけれど、「自然・無規

「範」である。そして、「産ませる」男は「文明・規範」なのだから、主権を握る権利はある、となる。

なかなかよくできたシナリオ。

「女にとって『産む』とは」に対応しているのは、「男にとって『産ませる』とは」なんだ。

この「産ませる」を別のものに転換するのは難しい。なぜなら、「産む」の素晴らしさや大切さをいくら女が語っても、語れば語る程、女は「産む」側としての性に自分を閉じ込めて行く危険性がある。これまでだって、男は女にそれを言わせようとし続けて来、そしてその言説を利用して、女を「母」と「妻」にしてきたのだから。

ひとつの手としては、「女にとって『産む』とは」の中から、本当に女の言説であるものと、男から刷り込まれ、まるで女の言説のように女自身が語ってしまっているものを点検し、後者を放棄するのがある。

例えば、「産む、産まないは女の」は、主体が、奪われた主権を取り戻すってことだから、女の言説でしょうね。

でも、「母なる大地」とか、「産みは海だ」とか、「初潮（生理）」や「産む性」に代表される、女から女への、母から娘へのメッセージとか、「産みの苦しみ」や、「腹を痛めたカンドー」とかは、どうだろう？ 私には、どうもうさん臭く思えるのよ。

出来るだけたくさん、「女と『産む』」にまつわる言説を振り払うこと。でないことには、いつまでたっても男は、「分らない」って態度を取り続けることができるもん。

もちろん、男は「規範」だの「父権」だの「男のかい性」だの男にまつわる言説を放棄することよね。放棄したくないからなかなかしないだろうけどね。でも、放棄したほうが楽よ。例えばさっきの「天声人語」（きつと、この「天」も「人」も男、だぜ）における、「母親」や「父親」って言葉を全部、ただの親に置き換えることで、物事は随分楽になるはず。「親は許し、包み込んでくれるし、また、規範も示す」とやればね。

で、互いに全部放棄したとき、そこに覚えて来るのはたぶん、「男にとって『産む』とは」とかではないと思うよ。

結局、「産む」や「産み」って発想は、「産む側」や「産ませる側」、すなわち、生殖可能な大人の側からのもの。でも、「産む」ってのは要するに、誰かが／何かが、「産まれる／産まれさせられる」ってことでもある。だから、もし、私たちがそいつを考えるのなら、「子供にとって産まれるとは」でもあっていい、でしょ。

私たちは、そのときやっと、スタートラインに立つのよ。

（ひこ たなか・児童文学者）



# 発言

## 避妊再考

### — 女の健康と人権の視点から —

芦野由利子

#### ■誰のための避妊か

避妊は、文字通り解釈すれば、望まない妊娠を避けるために、妊娠を調節する行為である。したがって、妊娠が起きてしまった後の行為である中絶とは、自ずと一線を画する。事実としても、家族計画運動の理念としても、避妊と中絶はイコールではない。

避妊に対する社会の姿勢や政策は、誰の視点で妊娠の「調節」が考えられているかで、大きく異なってくる。国家にとって、多くの場合、避妊は人口の調節弁である。たとえば日本政府は、敗戦直後の人口急増で、戦前の「産めよ増やせよ」を一変させ、人口抑制に乗り出した（ただし政府は、人口政策を公に打ち出すことは避けた）。そのために、優生保護法で中絶を合法化させ、家族計画の普及に力を入れた。ところ

が、一九五〇年代後半から出生率が低下し始めると、家族計画政策は途端に先細りになり、現在はほとんど無策と言っている状態である。

人口爆発の問題を抱えている開発途上国では、人口抑制政策は最優先の国策であり、国連や先進国政府の援助のもとで、避妊薬・器具が大量に配布されている。時には、強制不妊手術が行われることもある。胎児の生命を至上とする生命尊重派（プロ・ライフ）の主張では、避妊は、オギノ式や頸管粘液法等の「自然法」を除き、罪悪とみなされる。

これらの立場に決定的に欠けているのは、妊娠する当事者である女の視点である。時代や社会がどう変わろうと、望まない妊娠を避けたいという女の気持ちに変わりはないはずだ。なぜなら、妊娠にしろ出産にしろ、あるいは中絶にしろ、それは、女のからだと健康と人生に、深く関わる「出来

事”だからである。だから、避妊は、単に子どもの数の問題でも、方法や技術の問題でもなく、女の健康と、からだの自主管理の問題であり、人生の選択にとって不可欠な要因なのである。

日本に限らず、従来の避妊政策には、この視点がほとんど見られなかった。開発途上国の草の根の女たちからは、副作用の高い避妊薬や、使用に関する情報不足の問題が、数多く報告されている。本来、女の健康を守るためにあるべき避妊が、皮肉にも、健康を害する結果になっているのだ。

### ■リプロダクティブ・ヘルスとしての避妊

近年になって、リプロダクティブ・ヘルスあるいはリプロダクティブ・ライツという言葉が、フェミニストを中心に使われ出した。これは、避妊や妊娠、中絶を含め、性と生殖に関わる事がらを、女の健康と基本的人権の問題としてとらえ、実践しようとする考え方である。もちろん、性と生殖には男も関わっているが、ここで「女の健康と基本的人権の問題」としたのは、妊娠する機能を持つ女において、その問題がより深刻で切実だからであり、男には無関係という意味では、さらさらない。むしろ、避妊に関して言えば、男には、妊娠に伴う様々なリスクを負わない分だけ、より多くの責任をとって欲しいと思う。

一九九〇年の厚生省人口動態統計で、出生率が史上最低の一・五七を示して以来、政府も企業も、女にもっと子どもを産んで欲しいと躍起である。自民党の中には、避妊を制限するという時代錯誤の暴論を吐く議員すら現れた。中絶可能時期の短縮や、ビデオによる生命尊重キャンペーンなど、中絶規制に向けた動きも盛んに見られる。

日本では、今でも、避妊の情報やサービスが気軽に受けられる施設もクリニックもないのに、この上状況が悪化したらどうなるか。出生率との関連で、子どもを産み育てやすい環境作りということが言われる度に、リプロダクティブ・ヘルスとしての避妊の普及と、そのための制度や設備が、「環境作り」の重要な要因の一つなのだという認識を広める必要を痛感する。

日本も批准した国連の女性差別撤廃条約は、女性に産むままの選択の権利があり、政府は、そのための教育、サービスを徹底しなければならないとうたっている。世界には、北欧やイギリスなどのように、出生率の低下とは関係なく、避妊をヘルス・サービスとして保障している国が既にある。日本がリプロダクティブ・ヘルスを保障する国になるためには、何より、経済効率最優先の社会から、個人の人権や福祉を重んじ、弱者の視点から考える社会に、方向転換する必要があるだろう。その変革のための原動力になりうるのは、女

性である。

(注) 家族計画は family planning の日本語訳で、戦後使われるようになった。通常は、避妊と同義語として使われる。

世界の運動では、家族計画は個人の基本的人権と定義づけられている。しかし、女性の意識の変化、家族の変容を考える

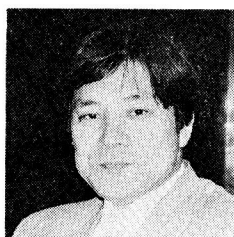
と、家族計画に変わる新しい言葉が必要とされている時代に入っているように思う。リプロダクティブ・ヘルスは、残念ながら日本語になりにくいのが、私個人としては、代替語として最もふさわしいのではないかと考える。

(社) 日本家族計画連盟事務局次長)

外語大のアラビア語の先生。アラビア語を選ばれたのは? 「よく聞かれるんですけどね、動機はないんです。受験対策で。だから苦手でしたね。大学時代はサッカーばかりやってましたね」と気取りがない。

中東の政治や歴史には興味があつたが、当時は本もなくあまり夢が膨らまなかったという。芽が出始めたのは、67年に第三次中東戦争が始まった頃で、そのあたりから関心を持ち始めた。72年から一年間エジプトのカイロ大学に留学。実際に中東の側に身を置いて見た中東世界はそれまで本で知っていたものとはまるで違って、アフリカ、アジア、ヨーロッパとの横の広がり、歴史的な縦の背景など、もっと複眼的に、丸みをおびて見

えてきた。その広がり感覚が新鮮だった。しかし、まだその頃にはバレスチナは見えていなかった。「反応が遅いんです。なんでも奥手なんです」とおっしゃる。



フォーラムの  
シンポジスト

藤田 進 さん

ご結婚は29歳の時で、お子さんはお二人。44年にハルビンで生れ、お父様が長いことソビエトに抑留されていたので、お母様が働きに出ていらしたので、小学校二年の頃には七厘でご飯を炊いたりしてらしたという。

中東に興味があるのは子どもの頃から歴史や地理が好きで、外国が好きだったから。遠いもの、見えない向こうの広がりを知りたい。確立されたものの、中心よりは端っこ、辺境に惹かれる。そこで人間がどうせめぎ合っているのか、中央を揺がす力をそこに期待しているとも。はみ出し者と自らを規定する人たちの「寄せ場学会」という会に入つたのもそんな熱い思いから。中東は私たちに関わりのない世界ではない、山谷とか在日の人々の問題、都市のスラム住民と繋がっている。著書に『蘇るバレスチナ』(東大出版会)。共著『恐れと怒りの話』(大月書店)の中の一篇「戦士になったイスマール」は小学校高学年向けの話で、かなり力を入れて書かれたフィクションだという。

(河村)

# 発言

## 産む手助けをしてきて

高橋富士子

「いきんで！」大きく深呼吸して息を止めて、いきんで！」ドップラーから流れる胎児の心音、産婦の悲痛な声、緊張感がたどよう分娩室。赤ちゃんの黒い髪が見え隠れし、だんだん頭が降りてくる。頭、肩が出、そして誕生。「オギャー」の産声があがり、体中に張りつめていた緊張が少しとける。そして、胎盤を娩出し、子宮収縮が良いことを確認し、無事終了。やっと、全身の力が抜けてゆく感じがする。

出産の場面に何回立ち会っても、無事出産が終わったときが一番うれしい。新しい生命が誕生する瞬間は、戦いや競争がない、民族も国も、男も女も関係がない、「無」である。産まれる時はみんな同じだから……。

深夜勤務。申し送りをうけた後、さっそくお産。経産婦。進行はスムーズで、零時四十五分に三七六〇gの男児出産。お産の後片付け、記録をすませ、ホッとひと息ついたところ、「破水した」と電話あり。入院の準備をして、すぐに来院するように答える。入院時、子宮口一センチ開大、まだまだお

産にならないだろうと判断する。ところが六時に「いきみたい」とナースコールがあり、内診すると子宮口は全開大。呼吸法を促し、あわてて分娩の準備をする。

六時十八分、三七五五gの男児出産。第一声があがり、赤ちゃんの体を拭こうと顔を見ると、口唇裂がある。一瞬動揺するが、落ち着いて赤ちゃんの体についた血液、羊水、胎脂をきれいに拭きとり、母親に告げることを決める。胎盤を娩出し、会陰の裂傷した部分の縫合が終わり、口唇裂があることを告げる。「実は、今から面会させるけど、赤ちゃんの唇が少し裂けていたの。でも、手術をすれば、きれいに治るから」と話す。一瞬、母親はおどろいた顔になるが、抱っこしながら笑顔になる。「よかった！」と緊張が崩れ、私も笑顔をみせる。いつも、とりあげる赤ちゃんに対しては、「いい子に育ってね」という気持を抱くがハンディーを持って産まれた赤ちゃんに対しては、そんな思いが特に強い。

先日はダウン症の赤ちゃんが産まれた。母親二十歳、父親

二十一歳の若い夫婦。退院していく二人の姿を見つめながら、いろいろ格闘して、子供によって生かされていくのかないと、最首悟さんの『生あるものは皆この海に染まり』の星子ちゃんのことを思いうかべた。

健康で異常のない子が産まれるという保証なんて何もない。産まれてみないとわからない。産もうと決心した時から生命に対しては全面的に引き受けていかなきゃいけないと思う。障害児や奇形児が産まれた時はどうするのか、「どんな赤ちゃんでも私の赤ちゃんよ、元気に産まれてらっしゃい」という気持でお産にのぞんでほしい。

自然で、主体的なお産をしたいと、ラマーズ教室に参加しラマーズ式呼吸法を共に練習してきた産婦さんが破水で入院。入院時、子宮口二センチ開大、陣痛も不規則。初産婦なのでまだ時間がかかるだろうと話す。しかし、二時間後、陣痛が強くなり、子宮口は全開大し、分娩室へ入室。努責を開始するが、いきみをかけると胎児の心音が下降し、陣痛がおさまると正常にもどる。「肛門の方へ力を入れて、長くくいきんで」と声をかけるが、努責がうまくかけられず、児頭がなかなか降りてこない。だんだん心音のもどりが悪くなっていく。産婦さんは、いきむのと深呼吸をするのに必死。分娩室の暖房で汗が出る。「吸引分娩になるだろうか。いや、産婦自身の力で産んでほしい。もう少し待ってほしい」

と心の中で祈る。その後やっと、努責の方法をつかみ、児頭は徐々に下降し、四時三十八分、三〇六五gの元気な男児出産。「がんばったね。自分の力で産んだのよ。いいお産だった」という私の言葉に、産婦は満足した笑顔で応えてくれた。お産の苦しいときに産婦と一緒にの気持ちになれば、出産を共にすることもある、そんなお産に出会えた時は本当に気持ちがいい。お産はスムーズに進むと思っても、途中で異常が起ることがある。また、異常の因子がいっぱいあってもスムーズに進む場合もある。しっかり自分の意志を持って出産にのぞむ人は、結果はどうであっても、いいお産になると思う。私はプロである以上、そんな妊産婦の意志に応えなきゃいけないし、それに応えるだけの力量をもたなきゃいけないと思う。

病院の産婦人科病棟は、「産む性」だけではなく、「産まない性」「産めない性」があり、どの「性」も大切なものである。今、胎児診断、体内外受精、男女産み分けなど、人間としての自然な営みである妊娠、出産に生殖技術が取り入れられ、技術の進歩はとどまることを知らない。しかし、そこには、人として大切なコミュニケーションが失われつつあるように思える。「性」とは「生と性」のことである。性行為、出産等を体験しながら、女と男のあり方、望ましい関係のあり方を学んでいき、抑圧したり、差別することのない女と男の関係がつくられていくのではないか。

(助産婦)

# 発言

## 男・子産み・子育て

——いのちの豊饒さに触れて——

星 建 男

### ■「中絶可能時期の短縮」の事

'89年の十二月に、厚生大臣の諮問機関である公衆衛生審議会の優生保護部会が、人工妊娠中絶のできる時期を今までの妊娠後満二十四週から満二十二週に短縮すべきとの答申をまとめ、それを受けた厚生省が都道府県に対し同趣旨の事務次官通知を出すという動きがありました。

報道記事の扱いも小さく、反響もそれほど大きく広がらない動きだったけれど、それを知った時、何かボクの胸の奥深く重く響くものがありました。「見過ごせないナ」そんな直感が閃いて、立ちすくむような感じがしたのです。

十年以上にわたって「男の子育て」というテーマに取り組んできて、というより毎日の生活の中で、女性の領分とされる「家事・育児」を淡々とやり続けてきて、女性の生理に関わる「妊娠・出産」がいつの間にか近くにきているように感

じて、無関心ではいらなかったのでしょうか。

どう考えても、「妊娠・出産」は女性の主体的な選択にかかわる権利だと思うし、中期中絶の原因の多くがボクたち男の側の自分勝手で貧しい「性意識・行動」からきているのに、そういう実態はそのままにしておいて、当事者である女性の意見も聞かずに、重要な中絶時期の変更なんておかしいと思っただけです（その後、「男の子育てを考える会」で厚生省に申し入れ行動をしました）。

若い頃、'73年の「優生保護法」改悪の際には、反対する女性たちの「痛み」みたいなものが全然わからなかったのですが、年を経て少しばかり自分の「実感」としてわかりかけてきたような気がします。

### ■「子産み・子育て」から引き離されて

多分、「男は仕事、女は家事・育児」という性別役割分業

に明白な根拠があるかも知れないけれど、それはどう言っても間違いだし、滅びゆく言い伝えのたぐいには思えます。

仕事一途に邁進し、堪え忍ぶ「専業主婦」としての母に暴力的に接する事でしか、自分の「強さ、たくましさ」＝大黒柱たる存在を確認しえなかった父の姿から、悲しいくらい「人間らしさ」から隔てられた男の虚像をくり返し見せつけられながら、ボクは育ってきました。父をある意味では支え続けた母はボクにとって、社会的な視野の欠けた受動的な女性そのものでした。そして、そのイメージは長いことボクの女性観を支配し続けたのです。

父を「男」に駆り立て、生き方を決定づけた役割分業のくびきは、父の父、そのまた父……と太い糸のように一貫して女性や子どもを踏み付けてきました。その子孫であるボクも例外ではありません。本来は持っていたかも知れない「人間らしさ」を奪われる事で、歴史に呪われ続けてきたボクたち男もある面では「被害者」と言えなくもありません。

### ■子育ては子育て

ある女性との出会いと別れを通して、このまま「男」として、従前の生き方を生かされるのがイヤだと痛烈に願った時、ボクの中でつくられた「男」をつくり直す、自分だけのささやかなチャレンジが始まりました。

硬直したタテマエを不断に作り出す「論理」や「言葉」に別れを告げて、封じ込められた「やさしさ」や「愛」が流れ出るように、自分の素直な感性を豊かにふくらませる試み——永年にわたって女性たちに押しつけて来た「家事・育児」の営みを、主体的に身体を使って担う事で何らかの展望が開けるんじゃないかって思ったのです。

男がやったとて特別な意味合いなどまるでない日常的な所為は、シンドい苦役に過ぎない反面、とても魅惑的な相貌も兼ね備えていたのです。泣きむずかり、生活のリズムを乱しまくる子どもとの付き合いは、自分を投入する分だけ確実にこちらへ跳ね返ってきました。子どもに育てられるというかけがえない発見があるのです。

### ■「やさしさ」を解き放つ旅

子どもの病氣から薬・医療の事、食べ物から添加物や農薬の事、洗濯では合成洗剤の問題に気付き、遊び場から地域の自然環境の破壊に思いがめぐって行く——これはみんな女性たちが先行して切り開いた道を、遅まきながらボクたち男もたどっていくのです。つくられてきた時間が気の遠くなるほど長い歴史の集積だから、つくくり直すには又同じ位かかるかも知れないけれど、ボクたちの旅は始まったばかりで、もう後戻りではできません。（男の子育てを考える会・保育園保父）



# 発言

## 不妊と向き合う

山田 貴子

私は今三十二歳、今年の秋で結婚して八年になります。初めて不妊のために病院を訪れたのが、二十七歳の時でした。以前から生理不順でしたが、三十歳までには一人は授かるだろう、とのんびりかまえていました。ひととおりの検査を受け、ホルモン剤による積極的な治療が始まりました。乱れがちな基礎体温も安定してきましたが、なかなか妊娠はしません。先生も首をかしげるようになり、受精しても子宮に着床しにくいのかも、と云われました。

そして夫の転勤のため、今度は、不妊専門の外來のある大学病院に通院を始めました。前の病院で検査を受けても、また病院を変えれば、一からやり直します。特に大きな問題はないと言われながら、ただ時間だけが過ぎていきます。今度こそもしかしたら、という期待と今度もだめだった、という絶望感のくり返しの中で、AIH（夫婦間の人工受精）を受け始め、現在に至っています。

最初の病院では、検査の都度、簡単な説明はしてくれるのですが、何か一つの事を聞くのにも、先生の様子を見ながら私の方が気を使うような状態でした。もちろん、薬や注射による副作用の説明は一切ありませんでした。そして先生は、何も言わずにまかせればいいのだ、という高圧的な態度でした。

次の大学病院は最初に不妊学級という、不妊検査の詳しい説明会がありましたが、とにかく混んでいて、一人の患者にかける時間の短かいこと。患者の顔を一度も見ないような事務的な口調の先生もいますし、納得するまで質問しようとすると、中には声を荒げる先生もいます。また、患者のプライバシーがまったくないことも大きな問題でしょう。診察室に二、三人の医師と二、三人の患者、そして壁一つ隔てた待合室、話はすべて聞こえてしまします。そのような中から、患者と医師との間に、信頼関係など生まれるはずもありません。

ん。今の不妊治療は確かに技術的には進歩していますが、私たちの精神的な不安や疑問を受けとめてくれる受け皿はないのです。

私は最初、ホルモン剤や人工受精に対して抵抗がありましたが。副作用も心配ですが、なによりも、本来自然な夫婦生活から授かるべき生命に人の手を加えていいのだろうか、という疑問、不安がいつも心にひっかかっていました。私が受ける身の状態で不妊治療を受けていたので、そのような気持ちが強かったのです。不妊治療が不必要だとは思いませんが、ただ、知らないうちに新しい生殖技術の実験台にされたり、副作用で体を傷つけたくないのです。十分な情報と、よりよい環境の中で、本当に自分で納得して、自分が主役となつて、不妊治療を選択したいのです。そして、不妊女性の体も心も尊重してくれる、信頼できる医師に相談したいのです。

それにしても、子どもが産めないことで、どうしてこんなに苦しまなければならぬのでしょうか。子どもを持つということはどういう事なのでしょう。純粹に自分の内から出てくる生みたいという気持ち、そしてそれがかなえられないから立ち、悲しみ。この気持ちとは、子どもを持てない限り、ずっとつき合っていかなければならないでしょう。その上に回りからの圧力による苦しみもとても大きなものです。特に他人からのなにげない言葉や態度にとっても敏感になっていま

す。結婚して八年もたっていると、大体の人が挨拶がわりに「お子さんはおいくつ？ 何人いるの？」と、子どもがいることを前提として聞いてきます。そして子どもはいないと答えると、同情の目を向けられるか、励まされるか、また、私の親ぐらいの年の人からは、「いないの。だめじゃない、がんばらなくちゃ」と言われます。でもがんばっても、どうにもならない事もあるのです。

よく、子どもを産んで一人前とか、子どもを産み育てることとで親も成長するとか、子どもを持って親のありがたみがある、とか言われます。このような社会的通説が、強迫観念として迫ってきて、否応無しに社会からの疎外感を感じてしまうのです。夫は、子どもができないことを責めたりしませんし、精神的には支えになってくれています。夫の両親からは最初の頃は口に出して子どものことを言われましたが、今は何も言いませんし、私の方からも話をしません。お互い、触れずにいる、という状態です。

今後、不妊治療をどのように続けていくかも迷っています。大学病院で最新の医療を受けていくか、漢方療法を中心とした先生を訪ねてみるか…。

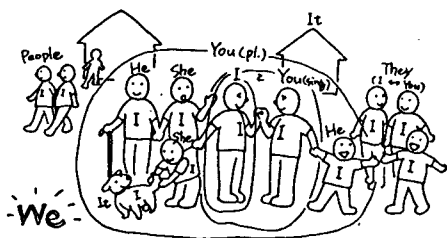
いつか不妊であるということを自然に受けとめられる日があるのでしょうか。子どもができないことで、自分を責めたり、負い目を感じながら、暮らしていきたくないのです。

# “近ごろの女の子”の

## 言い分

「えっ、言わせてもらって  
いいんですか?」

土田 尚美



「なぜ最近の若い女の子達は結婚したらないの?」とか、「女の人が、一・五三人しか子どもを産まなくなっちゃうなんてどうしたことだ?」と不思議に思う方々がかなりいるようだ。でも、いわゆる「結婚・出産適齢期」にさしかかる当事者の一人である私(現在二十四歳)は、逆に「どうして」結婚なんてそんないへんなこと、やすやすと簡単にできませんか!?」と問い返したくなってしまふ。子どもって、産むのはいいけれど、産んで終わりじゃないもんね。

だって「たいへん」ですよ。今まで当たり前とされてきた女の「結婚」「育児」の型に私達はまりきらなくなってきたから。だけど、私達女性が変わってきたのに、男性や社会のしくみが前のまんまで変わってくれないって言うのは、ほんととんでもない。

今、仕事を持っている人の四割が女性だというけれど、確かに昔(例えば私の母達の世代)と違って「女は家庭に入るのが当たり前」という考え方は減ってはきている。女性も社会でいろんな人と出会いながら、自分の

可能性を試し、世の中を動かす力の一部になることができる。これまでの女性運動の歴史が選択肢の数を増やしてくれ、女性の自己実現のフィールドが「家庭」に限定されなくなってきた。私には、夫や子どもの成功が自分の成功という「他者を通しての自己実現」は、スティックでまわりくどく思える。それに、自分が食べていくためのお金を他人に稼いできてもらい、自分はかわりに身のまわりのことをやってあげるなんて、欠けたところの補い合いは一見美しそうだけど、どっちかがいなくなったり死んじゃったら、残った人はどうするの。夫だって子どもだって、自分に対しての責任感以外に、妻や母親の自己実現や生活まで責任もたされちゃ、かなり重荷だし。(自分の好き勝手になんか絶対生きられないよねえ)。

みんな自分のことは自分でやればいいんじゃないのかな。子どもも、手がかるのは一時で、早く自立できるように夫婦がそろってめんどうみればいいと思う。だって子どもは母親の単性生殖でできるんじゃないんだもの。ちゃんと半分ずつ父親と母親から生まれてくる。母親一人だけの手にかかって育つより父親やまわりの大人の影響も受けた方が、

バランスのとれた子になるんじゃないかなあ。それに子育てって男女を問わず、すごく興味深くてもおもしろそうなことだもん。子どもが「めんどろをかける者」から「家族の役割を担う者」になる。つまり一人前の生活者に早くなれるように手助けできる親だといいな。去年訪れたスウェーデンのある家庭では、夕食を月曜は父、火曜は母、水曜は兄、木曜は弟、金曜は外食で土・日のお休みの日は夫婦でやっていると聞いて「うあ、こういうのって理想！」と思った。

ただとだけ、それができないのが今の日本の社会事情なのですよ。特に企業に勤める男の人達。商社に入った同級生の男の子は朝七時頃出て夜十一時まで会社について、平均睡眠時間は四時間だって言っている。これじゃ「自分のことは自分で」なんて無理だもの。どうしたってサポートしてくれる人が必要になる。ましてや子どものめんどろを見るなんて無理なこと。結局、いつもぶつかるのはここなのね。ほんとうに「会社」に言いたい。「男の人を返して！」って。男の人達もしんどいでしょ？ ほんと。 (さっきの男の子も「早く辞めたい」って言ってた。あの試験を受けるために勉強したいのだけど、

その時間もなかなかとれないんだって)。男の人達、『早くうち(家庭)に帰っておいでよ！』もって自分の時間、生活を、女の人達や子ども達と一緒に楽しもうよ。あなた達男性にすっかりたよりきるほど、女も子どもも力がないわけじゃないもん。

でも考えてみれば、こんなに日本経済が成長できたのは、私達の親の世代がモノのなかつた戦後のつらさという負のエネルギーをバネにして、すごく頑張ったからだものね。男女とも効率的な役割分担を受け入れて、我慢強くその役割を遂行した結果だ。私達がぬくぬくとモノに囲まれた生活ができるのも、そのおかげ。

でも、私達に同じことはできないよ。だってとてもそれが「自然」とは思えないもの。何が「自然」とか、何が「幸せ」と思えるかは、その生きている時代によって違うと思う。生活のスタイルだって、その「幸せ」の中身によって変わってくる。そして今「昔とは違うんだよ」と声をあげているのは、特に女性に多い。それだけこれまでの女性達の担ってきた役割は、男性のそれより、押しこめられ我慢させられてきた部分が多かったのだと思う。

でも本当は男の人達だって家の外ばかりにいて気付かなかっただけで、いろんな楽しみを取り逃していたのかもよ。子どもの成長にかかわる喜びや、逆に子育てによる自分の成長、生活の営みの小さな楽しみを味わうこと。男の子達も、こういう家の中のことが大事っていうのはわかっているようなのよね。だから、要領のいい男の子って、早く結婚して家庭を持つとうとする。今年から来年にかけて、同い年の男の子が二人結婚する。一人はマスコミ、一人は建設省のお役人。今、二人ともすごく忙しそう。建設省の子は、はっきり「これから五年間とはにかく忙しいから、今結婚しないと当分できない。彼女がついてきてくれるって言うから」と言ってる。彼女とは、二年間出向していた神戸で会った人。「もし彼女が仕事続けたらって言ったらあ？」って聞いたら、「そういう彼女だったら結婚は考えられない」だって。マスコミの子は「早く子どもが欲しい」なんだって。彼女が年上のせいもあるけど。両者とも、やるべきことはさっさと片づけちゃう安定指向型だな。選んだ人は二人ともいわゆる「家庭的」な女性のように。キャリア派の女の子の友達は「同僚の男の子、忙しい人ほど早く結婚する」っ

て言つてた。

確かに男の子も、家庭は大事と思つてゐたいんだよね。でもその中身に自分がかかわつていくことは、あんまり考えてないみたい。というか、現状では考えられないのよね、忙しくて。でも仕事する以前に、男の子は家の中のことをやることから隔離されてる。学校でも、一人前の「生活者」となるための訓練は受けられなかった（やったことないのに楽しいとは思えないよね）。社会に出てからは、仕事が「生活者」として過ごす時間を与えず、また先々「生活者」として一人前になりたい、という希望がおこるようなきつかけも余裕も与えられにくいもんね。家事、育児を「やってくれちゃう」女の人があるにいれば、一生その楽しみには気付かないでそのまゝいつちゃう。

だけど、その一方で同じ男の子の中にも変わってきた子たちがいる。ミュージシャンになった子（彼のバンドは「オルケスタ・デ・ラ・ルス」といって、米国のラテン・チャートで十週連続一位になった。宣伝しちゃおう）と話した時、「結婚するならどんな人がいい？」って聞いたら「自立した人。もたれ合うの、やだもん」と即答した。いやあ、こ

の時私は嬉しくて、彼の肩をバンバンたたいて「○○君の自立した結婚相手にかんばーい!!」とやってしまった。超多忙なのにね。彼の場合は会社人間でない分、頭がやわらかいのかも。他にもわかっている男の子は、わかっている。家事も育児もやりたいって言ってる人もいる。（でもふつうの民間企業で何の制

度もないところの子は、絶対こうは言わないな。だってそう言っちゃったら、会社の競争から早くも降りちゃったってことになるもんね）。まだ若くて未知数だけど、こういう考えの人達がいていうのは、働く女の子にとっても力強いことです。

さて、一方の女の子達。もちろんキャリア志向の子もいるんだけど、仕事への情熱と未来の家庭とを天びんにかけたら、ぐらぐらしている子が多い。仕事も大事だけれど、ほんとに好きな人ができれば、そっちが大事になっちゃうかも、ってカンジかな。（男の子で彼女のために仕事を辞める人っているかなあ）。能力もあつて語学にも堪能な、頼もしい働きぶりの、ある女の子は「すごい人ならサポートしてもいい」って言ってる。彼女は今、三十代後半の、とても仕事のできる素敵な上司（残念ながら結婚してるけど）にあこ

がれてる。相手の人もよく可愛がつてくれて、プラトニックにいい関係なようだ。女の子は目の肥えた子ほど、同じ年代の男の子じやもの足りないみたい。それでいきおい年上に目がいく。偶然だかなんだか、他にも二、三人そういう子がいる。深みにはまるほどじゃないけど。確かに職場にいて男性陣を見ると、年上の人の方が頼もしく見えて当然か。だけど、結婚相手としてすごい人が、適当な条件、適当なタイミングで現れるかなあ。結局、企業の忙しさの中では、家庭を持ちたいと思つたら女が仕事をあきらめなくちゃいけないと思うのかも。それなら、よほどすごい人じゃなきゃあきらめられないもんね。

ほんとのところでは、たいいていの女の子達「仕事も家庭も両立できたら最高」と思っている。でも、目の前でみんなの働きぶりを見ると、共働きをしていくのはちょっとムリかな、自分が引かなきゃいけないのかなと思っちゃう。なにしろ「時間」がないんだもの、仕事に吸いとられて。銀行に勤めてる女の子が、「男の人達は、できるかどうかかわらないけど、土日に家に書類を持ち帰るくらいせわしない気持ちで、余裕なく働いている」って気の毒そうに言つてた。

女性が仕事をする、とか、男性が家事をするって、夫婦二人だけの問題ではどうしてもかたづかない。「会社」という第三者が、大きく立ちはだかっている。勤務時間は長いし、人事優先であちこちとばされるし、働くほうの生活なんてムシだもん。でもそれに逆らうと、ステップ・アップのコースから降ろされかねない。会社人間世代の上司から「自分勝手なことを言うな！」と怒鳴られかねない。

だけどこれからは、もっとはっきり言っているじゃない？「社員が生活を大切にすることを認めない会社は、いい人材が集まりませんよ」って。今、見てると、同じ年の友達は何の子も女の子も、初めて足を踏み入れた社会、職場に、まず順応しようと、今のところは努力してる最中だけど、「こんなにしんどいの、やだなー」と思い始めてるみたい。この前大学時代のサークルのOB・OGが集まった時、仕事「やめる」「かえる」っていつてる人が、すごく多かった。

上の世代の人には「甘えてる」とか「自己中心的だ」って言われるかもしれないけど、そういうところが私達の世代の「私達らしさ」かもしれない。苦勞してない分、無理な我慢もしない。えっ？ そんなんじゃ日本の将来

思いやられるって？ うーん、でもGNP一位になったって、決して生活はラクで楽しいってことにはならないってわかったもんだ。それよりもむしろ、環境の問題もあるんだから、今の過剰な消費を少しシェイプアップして、モノより時間や気持のゆとりがあった方がいいと思うな。モノは不足したらそりゃいやだけど、これ以上ももっとも欲しいってわけじゃないよ。たくさん買っちゃうのは、広告があんまりあおるからでしょ。（のっちゃうのもあまりいけないけど）。

「自己中」と言われる私達だけど、それならスジ金入りの自己中心人間になろうじゃないの。もっと本当に自分を大切にしたら、会社に引きずられるようなことにはならない。自分のことに真剣なら、自分以外の人もまた、自分のこと考えて真剣だって、認められる。

女も男も、その真剣さには変わりはない。自分の将来の姿を本気でリアルに考えれば、自分が年をとった時のこと、体が不自由になった時のことを考える。そしたら、今その状態にある人達にも目がいかざるを得ないもんね。「世紀末現象」なのかな。「もう後ちょっとで地球はダメになるんだから」って言う人が多いのにはびっくりする。本気が冗談かし

らないけど。（でも話きくと、なかば本気のよねえ）。だけど自分の生活を自分でつくりあげていったら、それをそう簡単にはあきらめられないんじゃないかなあ。地球は私たちからもらったものでなく、自分の子孫から借りてるもの。って言うけれど、地球だけでなく、この体だって未来の命に続くその流れの中で、たまたま乗っけてもらった乗り物みたいなもんだもん。自分の後ろに乗る人達がいるだろうに、私達のところで切っちゃ、なんか悪い気がする。将来の地球に不安を感じるから子どもはつくりたくないという友達もいる。でも私は、不安だからこそ、そうはならないように生きてる間にせいぜいジタバタして、そして子どもも、ジタバタするように育てたいと思う。（ま、一緒にジタバタしてくれる人がいれば、ね）。

#### 〈訂正〉

七月号の松根敦子さんの文章の中で、37頁上段14行目「日本だけで」とありますのは「日本で」の誤りでした。大きな誤解を生む間違いで、松根さんと読者の皆さんにお詫びし訂正します。

（編集部）

## 昨年、1人平均1.53人出産

(厚生省「人口動態統計」から)

厚生省が六月六日発表した「平成二年人口動態統計(概数)の概況」によると、一人の女性が生涯に平均して何人の子どもを産むかを示す「合計特殊出生率」が平均一・五三に。最低だった前年の一・五七をさらに下回り、一年間に生まれた赤ちゃんの数も人口千当り九・九と初めて十を割ったということです。高齢化社会に向けて加速度が増した」とマスコミが掲げると、そんな気分になってしまいましたが、では「一・五三」という数字は、どのようにして出たのか「同統計概況」から見てみましょう。

### ◆「人口動態統計」の調査の概要は

人口動態統計は、出生・死亡・婚姻・離婚及び死産の「人口動態事象」について、その実態を明らかにするために、各届書によって作成された人口動態調査票をとりまとめたものである。

届書は出生・死亡・婚姻及び離婚については「戸籍法」により、死産については「死産の届出に関する規程」により、市区町村に届け出られるものである。

調査票は、市区町村で作成され、保健所・都道府県を経由して厚生省に提出される。厚生省では、これらの調査票を集計して人口動態統計を作成している。

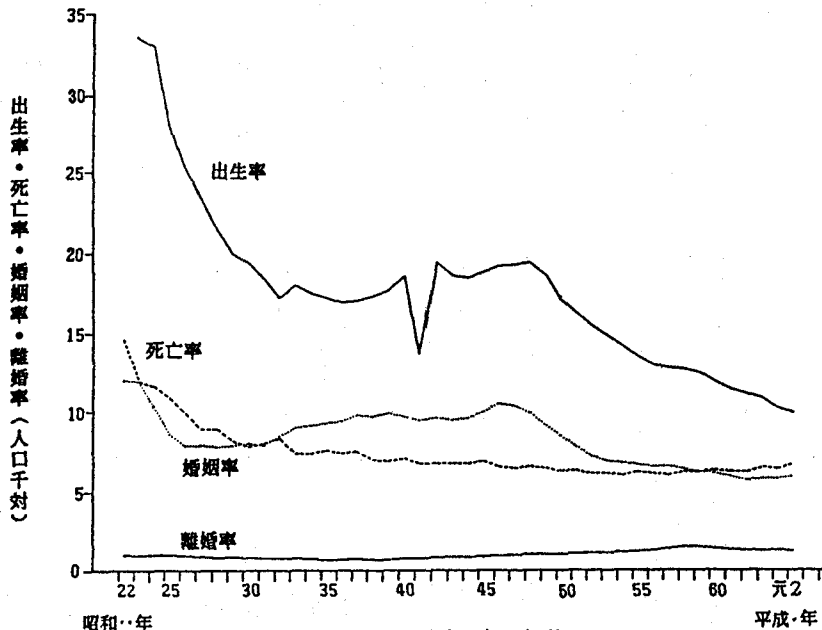


図1 人口動態率の年次推移



◆「合計特殊出生率」とは

15歳～49歳の女性が対象で、各年齢ごとに女性人口を分母に出産数を分子に年齢別出生率を出し、それを合計したものをいいます。表2に見るように、昨年は「一・五三」という数字が出ています。

参考までに「人口動態率の国際比較」を載せます。(図・表は、すべて厚生省大臣官房統計情報部の「平成二年度人口動態統計(概数)」の概況)より)

◆用語の説明

自然増……出生数から死亡数を減じたもの

乳児死亡……生後一年未満の死亡

新生児死亡……生後四週未満の死亡

早期新生児死亡……生後一週未満の死亡

死産……妊娠満十二週以後の死産の出産

周産期死亡……妊娠満二八週以後の死産に早期新生児死亡を加えたもの

表1 人口動態率の年次推移

年次	出生 (人口千対)	死亡 (人口千対)	自然増加	乳児死亡 (出生千対)	新生児死亡 (出生千対)	死 産 (出生千対)			周産期死亡 (出生千対)	妊 婦 離 婦 (人口千対)		合計特殊出生率 <sup>2)</sup>
						総 数	自 然	人 工				
昭和 22 年	34.3	14.6	19.7	76.7	31.4	44.2	...	...	...	12.0	1.02	4.64
23	33.6	11.9	21.6	81.7	27.6	60.9	36.9	10.9	...	11.9	0.99	4.40
24	33.0	11.6	21.4	82.6	26.9	68.7	39.1	26.9	...	10.3	1.01	4.32
25	28.1	10.8	17.2	80.1	27.4	64.9	41.7	43.2	48.6	8.6	1.01	3.66
26	26.3	9.9	15.4	57.6	27.6	62.2	43.0	49.3	48.7	7.9	0.97	3.26
27	23.4	8.9	14.4	49.4	26.4	62.3	42.8	49.6	46.8	7.9	0.92	2.98
28	21.6	8.9	12.8	48.9	26.6	63.8	43.6	50.2	48.0	7.6	0.86	2.89
29	20.0	8.2	11.8	44.8	24.1	66.6	44.8	51.1	46.1	7.9	0.87	2.48
30	19.4	7.8	11.6	39.8	22.3	66.6	44.6	51.3	43.9	8.0	0.84	2.37
31	18.4	8.0	10.4	40.6	23.0	67.1	46.9	50.1	46.6	7.9	0.80	2.22
32	17.2	8.3	8.9	40.0	21.8	101.2	49.9	51.3	46.0	8.6	0.79	2.04
33	18.0	7.4	10.6	34.6	19.6	100.7	50.2	50.6	43.9	8.0	0.80	2.11
34	17.6	7.4	10.1	33.7	18.8	100.6	51.9	49.3	43.0	9.1	0.78	2.04
35	17.2	7.6	9.6	30.7	17.0	100.4	52.3	48.1	41.4	8.3	0.74	2.00
36	16.9	7.4	9.6	28.6	16.6	101.7	54.3	47.4	40.9	8.4	0.74	1.99
37	17.0	7.6	9.6	28.4	16.3	88.8	64.2	44.6	38.7	8.6	0.76	1.98
38	17.3	7.0	10.3	23.2	13.6	86.6	63.3	42.4	38.2	8.7	0.73	2.00
39	17.7	6.9	10.7	20.4	12.4	89.2	61.7	37.6	33.1	9.9	0.74	2.06
40	18.6	7.1	11.4	18.6	11.7	81.4	47.6	33.8	30.1	9.7	0.79	2.14
41	13.7	6.8	7.0	19.3	12.0	86.2	56.2	43.1	31.3	9.6	0.80	1.68
42	19.4	6.8	12.7	14.9	9.9	71.6	43.6	28.0	28.3	8.6	0.84	2.23
43	18.6	6.8	11.8	15.3	9.8	71.1	43.4	27.7	24.6	9.6	0.87	2.13
44	16.6	6.8	11.7	14.2	9.1	88.6	42.3	26.3	23.0	9.6	0.89	2.13
45	16.8	6.9	11.6	13.1	8.7	86.3	40.6	24.7	21.7	10.0	0.93	2.13
46	19.2	6.8	12.6	12.4	8.2	81.4	39.3	22.1	20.4	10.6	0.99	2.16
47	19.3	6.6	12.6	11.7	7.6	67.8	37.8	20.1	19.0	10.4	1.02	2.14
48	19.4	6.6	12.6	11.3	7.4	62.6	36.6	17.0	18.0	9.9	1.04	2.14
49	18.6	6.6	12.1	10.8	7.1	61.3	34.9	16.4	18.9	9.1	1.04	2.06
50	17.1	6.3	10.8	10.0	6.8	60.6	33.8	17.1	16.0	8.6	1.07	1.91
51	16.3	6.3	10.0	9.3	6.4	62.7	33.1	19.8	14.8	7.8	1.11	1.86
52	16.6	6.1	9.4	8.9	6.1	61.6	32.6	18.9	14.1	7.2	1.14	1.80
53	14.9	6.1	8.8	8.4	5.6	48.7	31.1	17.8	13.0	6.9	1.16	1.79
54	14.2	6.0	8.3	7.9	5.2	47.7	29.8	18.1	12.6	6.8	1.17	1.77
55	13.6	6.2	7.3	7.6	4.8	48.8	28.8	18.0	11.7	6.7	1.22	1.76
56	13.0	6.1	6.9	7.1	4.7	49.2	28.8	20.6	10.8	6.8	1.32	1.74
57	12.8	6.0	6.8	6.8	4.2	49.0	27.7	21.3	10.1	6.8	1.39	1.77
58	12.7	6.2	6.6	6.2	3.9	46.6	26.4	20.1	9.3	6.4	1.61	1.80
59	12.6	6.2	6.3	6.0	3.7	46.3	24.3	22.0	8.7	6.2	1.60	1.81
60	11.9	6.3	5.6	5.6	3.4	46.0	22.1	23.9	8.0	6.1	1.39	1.76
61	11.4	6.2	5.2	5.2	3.1	46.3	21.4	23.9	7.3	6.9	1.37	1.72
62	11.1	6.2	4.9	5.0	2.9	46.3	21.2	24.0	6.9	6.7	1.30	1.69
63	10.8	6.6	4.3	4.8	2.7	43.4	18.6	23.9	6.6	6.6	1.26	1.66
平成元 年	10.2	6.4	3.7	4.6	2.6	42.4	18.9	23.6	6.0	6.8	1.29	1.67
2	9.9	6.7	3.3	4.6	2.6	42.3	18.3	24.0	6.7	6.9	1.28	1.63

注：1) 昭和48年以降は沖縄県を含む。平成元年までは確定値である。

2) 1人の女子がその年次の年齢別出生率で一生の間に生む平均子ども数を表す。

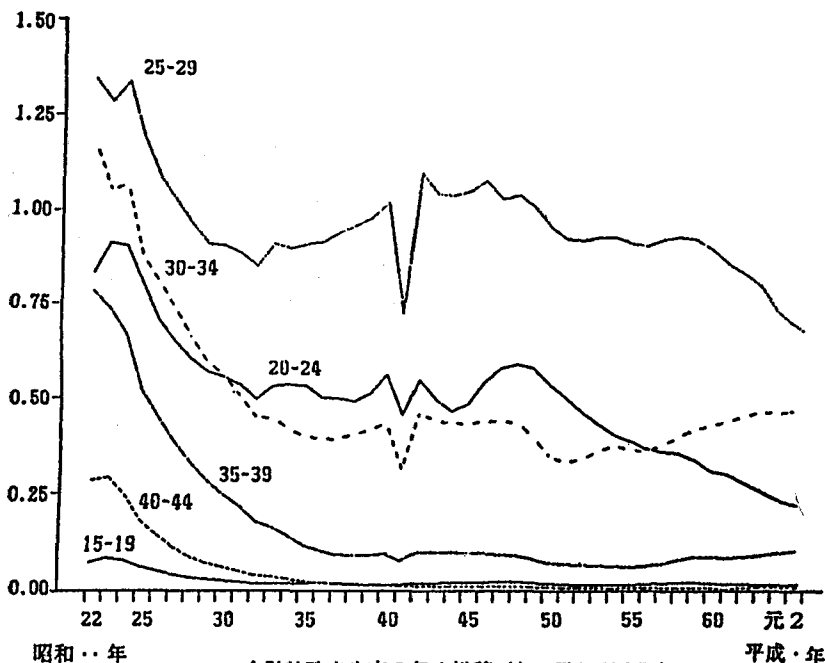


図2 合計特殊出生率の年次推移(年齢階級別内訳)

表2 出生数・出生率の年次推移・母の年齢(5歳階級)別

	昭和58年	57	58	59	60	61	62	63	平成元年	平成2年
山 生 数 1)										
總 数	1529 455	1515 392	1508 687	1489 780	1431 577	1382 946	1346 858	1314 006	1246 802	1221 688
15~19	15 439	18 694	18 242	19 180	17 654	17 687	17 530	17 318	17 171	17 477
20~24	281 127	276 168	274 911	264 205	247 341	237 159	225 098	214 393	202 389	191 868
25~29	786 659	745 229	727 006	715 754	682 885	652 221	634 440	611 998	588 095	551 035
30~34	401 957	404 110	402 440	393 182	381 488	371 308	364 838	364 186	356 728	356 067
35~39	56 840	65 131	77 704	88 558	93 501	96 731	95 778	84 887	92 240	92 391
40~44	7 184	7 772	8 109	8 805	8 224	7 527	8 682	10 820	11 881	12 587
45~49	228	257	246	239	244	260	229	279	256	223
合 計 特 殊 出 生 率										
合 計	1.74	1.77	1.80	1.81	1.76	1.72	1.69	1.66	1.57	1.53
2)										
15~19	0.0197	0.0208	0.0223	0.0233	0.0230	0.0198	0.0193	0.0187	0.0182	0.0181
20~24	0.3896	0.3581	0.3546	0.3417	0.3174	0.3018	0.2796	0.2818	0.2437	0.2332
25~29	0.9073	0.9231	0.9268	0.9229	0.8896	0.8558	0.8289	0.7972	0.7343	0.6884
30~34	0.3689	0.3886	0.4121	0.4326	0.4397	0.4473	0.4597	0.4693	0.4619	0.4654
35~39	0.0693	0.0709	0.0758	0.0812	0.0845	0.0829	0.0934	0.0987	0.1029	0.1079
40~44	0.0082	0.0085	0.0088	0.0091	0.0095	0.0094	0.0093	0.0103	0.0106	0.0113
45~49	0.0003	0.0003	0.0003	0.0003	0.0003	0.0003	0.0003	0.0003	0.0003	0.0003

注: 平成元年までは確定数である。

1) 出生数総数には母の年齢14歳以下、50歳以上及び年齢不詳が含まれている。

2) 年齢別女子人口による率の合計である。

表3 人口動態率の国際比較

国名	年次	出生率 (人口千対)	死亡率 (人口千対)	乳児死亡率 (出生千対)	新生児死亡率 (出生千対)	婚姻率 (人口千対)	離婚率 (人口千対)	合計特殊 出生率
日本	1980	9.8	6.7	4.6	2.6	5.9	1.28	1.53
アメリカ合衆国	1990	18.6	8.7	8.4	'88) 8.3	9.8	4.70	'88) 1.93
フランス	1989	13.6	9.0	'88) 7.8	'88) 4.1	5.0	'87) 1.91	1.81
ドイツ連邦共和国	1989	11.0	11.2	7.4	4.0	8.4	'88) 2.98	1.39
オランダ	1989	12.7	8.7	'88) 6.8	'88) 4.8	6.1	'88) 1.79	'85) 1.51
スウェーデン	1989	13.8	10.8	'88) 6.8	'88) 4.1	'88) 5.2	'88) 1.76	2.02
イギリス	1989	13.6	11.5	8.4	4.7	'88) 6.7	'88) 2.81	1.85
イタリア	1989	9.7	9.1	'88) 9.2	'88) 7.1	5.4	'88) 0.44	1.29

注： )内は調査年次を示す。

1) 旧西ドイツである。

資料：世界人口年鑑 1988

World Health Statistics Annual, 1990

Monthly Bulletin of Statistics, Dec. 1990. UN

: United Nations, Demographic Yearbook, Council of Europe, Recent

Demographic Developments in the Member States of the Council of Europe, 1989 及び各国中央統計資料

表4 分母に用いた人口

年齢5歳階級・男女別人口(日本人人口)

年齢階級	総数	男	女
総数	122 790 520	60 265 347	62 525 173
0 ~ 4	6 498 460	3 334 757	3 163 702
5 ~ 9	7 380 624	3 774 427	3 606 196
10 ~ 14	8 489 074	4 337 089	4 151 984
15 ~ 19	9 969 702	5 101 504	4 868 199
20 ~ 24	8 845 452	4 524 476	4 320 974
25 ~ 29	8 081 747	4 091 519	3 970 227
30 ~ 34	7 712 451	3 885 278	3 827 173
35 ~ 39	8 842 097	4 495 782	4 346 315
40 ~ 44	10 614 400	5 325 107	5 289 293
45 ~ 49	8 998 099	4 489 598	4 508 503
50 ~ 54	8 066 712	3 987 149	4 079 563
55 ~ 59	7 897 766	3 771 145	3 926 620
60 ~ 64	6 707 580	3 215 197	3 492 382
65 ~ 69	5 082 182	2 183 004	2 899 158
70 ~ 74	3 794 600	1 547 441	2 247 158
75 ~ 79	3 000 975	1 188 438	1 812 536
80 ~ 84	1 830 012	676 322	1 153 690
85 ~ 89	835 669	275 438	560 230
90 歳以上	294 965	81 679	213 286

12大都市・男女別人口(総人口)

-再掲-

12大都市	総数	男	女
東京都港区	8 183 127	4 080 806	4 082 321
札幌市	1 671 785	809 103	862 682
仙台市	918 378	454 886	463 492
横浜市	3 220 350	1 651 321	1 569 029
川崎市	1 173 805	617 373	556 233
名古屋市	2 154 664	1 077 418	1 077 248
京都市	1 461 140	708 616	752 625
大阪市	2 623 831	1 292 838	1 331 195
神戸市	1 477 423	712 600	764 923
広島市	1 065 877	533 965	551 712
北九州市	1 026 487	488 066	538 401
福岡市	1 237 107	603 468	633 639

注：分母に用いた人口は総務庁統計局の人口推計資料に基づき、厚生省大臣官房統計情報部で推計した。

「We」創刊10年！ この歳月に、著者が  
出会い、思い、考えてきたことの集大成

半田たつ子著

# 木犀の匂う朝に

定価1800円(送料260円)

ご注文は最寄りの書店に(地方小扱い)。ウイ書房に直接お申込みの場合は、  
送料をお添えの上、振替で。(書名明記)

新しい・家庭科を・創るために

「ヒトと生殖」を授業で

鈴木 まき子

(東京都江東区立新田小学校)

はじめに

新学期を迎えると、今年はなにを材料にして子供たちと共に「人間とは何か」「人間らしく生きることとはどうすることか」を、考えようかと思いを巡らします。

今年は六年の担任になりましたので、「ヒトと生殖」を単なる保健指導ではなく理科の授業として組み、ダイナミックな進化の歴史のなかでヒトのからだがつくられ、ヒトの特殊性が生み出されたことを学ぶチャンスを作ってみようと思いました(五、六年の家庭科は専科担任が行い、学級担任は家庭科の授業はしません)。

五年生の時に学級が荒れ、登校拒否の子供が二名出まし

た。

子供たちは人と人との関わりがつかれない凄まじい状況の中で過ごしてきました。新学期、担任が変わって、子供も親もそれなりの期待を持ったようで、私も真剣に授業づくりをしなければと思いました。子供も私も一緒に考えて考え、変わることができるのは、授業以外にはありません。

十二歳を迎える子供たちは、自分の体に起こりつつある変化の所以はなんなのか、本当のことを知っていたがっています。かつて行われてきた対症療法的な初潮指導ではなく、また、生殖のみを大きく取り上げるのではなく、「ヒトのからだ」の学習の中で、子供たちの知的要求に真正面から応えられるように、科学に基いた楽しい実践をしてみようと考えました。

現在、すべて実践が終了していませんので、中間報告ということで紹介します。

### 文部省の指導要領では……

さて、新学期。学級担任は知恵を絞って年間の学習指導計画を作ります。六年の理科の教科書を見ると、最初に、季節と太陽、地層の学習というように、むずかしい単元がならび子供たちを理科嫌い、授業嫌いにさせてしまいます。

そこで、理科の授業の年間指導計画を全部組み替えて、一番最初の授業で「人のからだ」を扱いながら、「人間らしく生きること」が探求できるように授業計画を組んでみました。

本誌六月号の栃谷さんの実践でも紹介されていましたが、六年生の社会科では、一番初めに、地球の歴史と人類の歴史を学びます。これと同時に進行で、ヒトのからだを扱えば、文化を介して生きている社会的な人間と、動物としてのヒト、特殊性を持ったヒトを知ることができます。

指導要領とその指導書を見ますと、扱う内容は、呼吸、心臓と血液の働き、食べ物と消化器官、骨と筋肉で、これは、ヒトのつくりとはたらきをみるだけの学習です。ヒトらしいヒトのからだがわかるように書かれています。新指導要領が実施される来年度からは、ヒトの生殖については五年生で、男女のからだのつくり、人の成長を扱うことになります。

しかし、その際、精子や卵子の生成過程は取り上げないこととなっています。これでは、人間の生と性について本質に迫る学習にはなりません。自分を含めたヒトの体についての正しい知識と科学的な認識に基づいた、男女共学の性教育を、きちんとしたプランを持って行う必要があるのだと思います。

### 実践のなかみは……

本来なら、五、六年の二年間を通したプランで「生物は、栄養をとり、なかまをふやして生きている」ことを、丁寧に扱うことが子供たちにとっても分かりやすくよいのです。しかし、残念ながら、急に六年を持つことになり、五年時に生物の授業は教科書どおりに行ってきたので、「ヒト」を中心に他の動物と比較しながら、「ヒトも栄養をとっている」「ヒトらしいヒトのからだ」「自然と人間」「ヒトも子を生んで育て、なかまをふやす」の四つの授業づくりに取り組んでみました。

これから紹介する内容は、江川多喜男さんから学んだもので、江戸川理科サークルで仲間たちと実践を積み重ねてきたものです。それを、新田小学校の子供たちに合わせて私なりに自主プランを作ってみました。

## 指導計画と課題

### 1 ヒトも栄養をとって生きている

休みなく動く心臓

① 私たちが生きている証拠はどんなところにあらわれているだろうか。今の状態でわかることをみつけよう。

② 呼吸も生きているあかしなのに、医者が脈拍数や鼓動を調べて健康かどうかを見るのはなぜか。

食べて消化・吸収するしくみ

③ ヒトの消化管はどのようになっているだろうか。図に書いて説明しよう。

④ 栄養分が消化管（小腸）から、体の中に吸収されるには、食物がどのようににならないといけないだろうか。

⑤ 尿はどこでつくられるか。

動物と捕食

⑥ 動物は、食べ物によって、口、消化管のつくりがちがっているだろうか。

### 2 ヒトらしいヒトのからだ

ヒトは直立二足歩行をする

⑦ ヒトも動物ですが、他の動物と比べると、くらしかたもからだつきもちがいます。①ヒトのくらしかたが他の動

物とちがうところはどんなところですか。②ヒトのからだつきが、他の動物と大変ちがうところはどんなところですか。

ヒトの手と足

ヒトは短足ではない

⑧ ヒトの手と足の長さは、サルと比べてどうちがうだろう。ヒトの足には「つちふまず」がある

⑨ ヒトの足は、サルの足と比べると、どんなところがちがうだろうか。

ヒトの親指は、向きがちがう

⑩ ヒトの手のつくりは、サルのつくりと同じになっているだろうか。

ヒトのおしりは大きい

⑪ これは、サルとヒトの骨盤です。どちらが人の骨盤だろう。

ヒトの背骨はS字型

⑫ つぎの図のなかでヒトの背骨はどれか。

からだが自由に動くしくみ

⑬ ヒトのからだは、かたい骨で支えられていますが、からだを自由に動かすことができます。これは、からだの骨組みがどのようなになっているからでしょうか。

ヒトは、顔に比べて頭が大きい

⑭ ヒトとサルとの頭骨では、どんなところがちがうだろうか。

### 3 自然と人間

作物と家畜

⑮ ヒトは食糧をうるために他の動物にはできなかったことを考え出しましたが、それはどんなことですか。

食物連鎖、自然の利用と破壊

⑯ ヒトが食べるものをたどっていくと、最後には何に行きつきますか。

### 4 ヒトも子を産んでなかまをふやす

子孫を残す器官

⑰ 私たちは、成長して大人になると、子供を産んで子孫を残します。私たちの体には、子供を産むどんな器官があるでしょうか。

受精

体外受精

⑱ 動物は、仲間をふやすために、メスが卵を産みます。卵を産むときのオスの役目はどんなことでしょうか。

体内受精

⑲ 子を産む動物では、オスはどうやって受精させるのでしょうか。

子育て

⑳ 子で生まれる動物は、メスのおなかの中で、どのように栄養をとって育つのでしょうか。

(卵で産まれる動物の成長は五年生でメダカで学習済みなので省略)

㉑ 自分が産まれたときのことを取材しよう。

### 授業と子供たちのすがた

「ヒトの栄養をとっていきっている」の授業では、「尿がどこでつくられるか」が一番おもしろく、おどろいたようです。

・尿は、じん臓でつくられて、ゆにょう管を通ってぼうこうにいく。じん臓の長さ10 cmではば5 cmで厚さ3 cmで重さ100 g。アンモニアが体じゅうにいきわたると死ぬことがわかった。尿が出ないといへんなことになると思った。

(石塚 孝)

・尿がたまっても、アンモニアになると毒になる。体の中の血管がぜんぶじん臓につながっているのを聞いてびっくりしました。

(樋口泰子)

「ヒトらしいヒトのからだ」では、サルとヒトの違いに気づく授業が、感動的だったようです。子供たちのノートには、自分なりによく考えをまとめてかいてありました。

・サルはあしがへんべい足で、全体で体重をささえているけれど、人の足はアーチ形でとくに体重をかかとでささえていることがわかった。人の足はアーチ形だから、アーチの中に空気が入って、それがばねの役目をするのがわかった。赤ちゃんは最初四つんばいで、土ふまずはないけど直立二足歩行になって成長していくと、だんだん土ふまずができてくることがわかった。

(伊藤健一)

・ヒトのこつばんはAだった(幅が広い)。ヒトは、内ぞうをささえるから、こつばんが大きい。サルは、四つ足でおなかを下だから、内ぞうがおなかのほうにいつている。サルはこつばんははったつしていい。ヒトはだんだんこつばんがはったつしていく。ヒトは女性のほうが、こつばんがおおきい。理由は、女の人はこどもを生むから大きいことがわかった。

(伊藤若菜)

## 「生殖」の授業は

### 校内で公開しながら

私自身とっても、生殖の授業に本気になって取り組むのは初めてでしたので、校内で公開し、子供たちも真剣に考えながら授業にくわわっている姿を見て、検討していただきました。

「ヒトも子どもを産んでなかまをふやす」の授業は、まだ途

中の段階ですが、未知のことに臨む子供たちの瞳は輝いていました。はじめ、自分たちで予想を立て、次に、パネルを使って男女の生殖器官の説明をしました。一時間の授業では十分理解し考えることはできませんでしたので、もう一時間使ってスライドを見せました(アーニ出版『私たちの成長』)。

・卵子がつくられていけないときはちつというところから出てくる。男子は、同じように精巣で精子がつくられ、陰茎から出てくる。男子はいつでも出られるようになっていて。女子の卵子は、月に一回とかいろいろその人によってちがうと思う。私は、まだ初潮になっていないからあまり良く知らなかった。でも、男子にも女子にも子孫を残す器官があることがわかった。

(太民淳子)

・精子が生きているなんて初めて知った。どうやって精子は女のほうにいくのか分からない。男だけでも女だけでも子供は産まれない。男女いなければ産まれない。

(小峰 恒)

### おわりに

もっとも子供たちの感想を紹介したいのですが、誌面がもうなくなつてとても残念です。興味本位の受取り方をせず自分なりに考えられ、学習意欲をそったのは、一連の「ヒトのからだ」のプランのなかに組み込んだ成果だと思います。



新しい・家庭科を・創るために

## 生命の尊さと自立への道をめざして

—— 保育学習を中心に ——

田 村 芳

(岩手県盛岡市立河南中学校)

### 一、はじめに

私の勤務校は、盛岡の東南に位置し、五つの小学校から生徒たちがやってくる。商工業地域、新興住宅地、農山村地域と学区も広く、最も遠いところで三十二キロもある。生徒の生活環境も多様であり、経済・文化・教育の面での地域差もある。ひところは、荒れた学校と聞いていたが、伝統を大切に育てようという全校的なムードがあり、現在、生徒の状態は、全体的にはいい状態にある。

私は、本校に着任して四年目になるが、着任した当時、全体的にはいい状態にあっても、個や小集団においては、様々

な問題があることを、日を追うごとに思うようになった。「生徒が変わってきている」と研究会等ではよく話題になるが、ここでも生徒の側面を見て、理解に苦しむ思いをすることもあった。

おもしろくないと本気でけんかしたり、自己主張が強く気に入くわないとトイレにかくれたり、ちょっと何か言われると飛び出したり。かつて、出合ったこともない新入生であった。通院のためなのか、遅れてくるもの、早退するものの多いこと(同じ規模の前任校に比較して)、寒暖の差に合わせずて衣服を調節しない生徒。朝シャンはしても、時間がないから朝食を抜く生徒もいる。塾通いまでして学習をがんばる

かのように、「ひとを思いやる心」「自分の健康管理」「あたりまえのことをあたりまえにやる」「目的意識を持って努力する」という点で大なり小なり弱さを持っているのが本校の課題である。

父母の教育への関心は、学習偏重の傾向にある。入試教科に期待しても技能教科を気にする親はどれほどいるだろう。子どもの変革を通して親の変革をねらうためにも、家庭教育の本質にせまる実践を努力していかなければならないと思う。実践の繰り返しが生徒の意識変革につながり、実践になるものと確信したい。

## 二、保育学習でどんな力を……

保育学習のねらいは、幼児についての理解と関心を高めることである。しかし、私は、保育学習のねらいがここでとどまっていけないと思う。今の自分を真剣に見つめ、自立への道をめざした生き方を考えるところまでいかなければならないと思う。そのためには、今の自分がどのようにしてできたかをわからせ、その事実感動させたいと思う。自分が大切にされたことで、他を思いやる気持ちも出てくるのである。自分も通ってきた幼児期。その時期の心身の発達や生活、保育と環境などの学習の一つひとつに自分の生育歴を今の自分をかかわらせなければならぬ。

また、幼児期は、育つ環境に大きく左右されるので、保育学習のすべての部分に「狼に育てられた子」の写真等を資料にしている。環境は、自分とかかわりのないものと思われがちであるが、実は、自分もその環境をつくっている一人なのである。幼児が、心身共にかけがえのない人間に育つてこそ、いい環境をつくる一人になれるのである。保育と環境については、生命の誕生後だけでなく、その前の部分も大切なものであることを忘れてはならない。出産前の母体保護（生理休暇・産前休暇）から産後休暇・育児休業の長いたかいの歴史にもふれなければならない。

今まで聞けなかった親子の語らいの中で、授業の中で、自分を探知するということは、今の自分を見つめ、今後の目標を持つことになりはしまいか。自立への道をめざした将来の生き方を真剣に考える人間に育てたいものである。

## 三、実践の記録

### (一) 保育に関する事前調査から

家族は、四～五人で、きょうだいはいほとんど二人である。幼児のいる家庭は、わずかに五％である。あなたは、幼児が好きですか、と尋ねると、好き七十二％、嫌い二十八％。嫌いの理由は、うるさい、言うことをきかない、生意気、わがまま、めんどろくさいであった。次に幼児の世話をしてみた

いと思いきやと問うと、思うが五十八%、思わないが四十二%になる。思わないの理由が、わがままでうるさく汚ない、そばにいとつかれる、泣き出したらなぐりそう、なまいきだといじめてしまう、で、幼児に対する拒否反応が例年になく多いようであった。

今までも保育学習に入る前に調査をしたが、保育学習は必要ない、と答えたものが二名あり、これは初めてであった。

### (二) 事前調査（父母から聞く）

——あなたが生まれた時の喜びと苦勞をお父さんやお母さんに聞いて書いて下さい——

母は、四十六時間も陣痛で苦しみながら私を生んだそうです。でも、生まれた時は、元氣のよい赤ちゃんでホッとしましたそうです。父が、母に「ご苦勞さん」と言ってくれたことがとてもうれしかったそうです。

。最初の子どもをなくしているの、私が生まれた時は、お父さんもお母さんも最高に幸せだったそうです。飲みたいコーヒーも飲まないでがまんして、私をお腹の中で育てたそうです。出血がひどくて、輸血をしながら生んだそうです。父は、毎日病院に来ては頭をなでたり、ながめていたり、二人で幸せにひたっていたそうです。

### (三) 最初の授業が大切

——感動させる授業で次の授業に期待感を——

前の領域の授業が終わりに近づいた時、「次は保育かあ」と意欲のない、明らかに、いやだなあという声音の会話が休み時間に聞えてきた。何人かがそれに同調して、あつという間に第一声を発した子の囁きにやる気のない雰囲気が生まれた。毎度のことながら、どの学校でも同じ傾向だなと思いい、そうであればあるほど、最初の授業をしっかりとやらなければならぬと思っている。最初の授業で生徒の心をゆさぶれば、必ず、次の授業を楽しむにしてくれるはずである。保育の授業は、知識の単なる伝達であってはいけない。こんな気持ちで最初の授業を展開した。

① 保育の意味について考えてみよう

② なぜ幼児期が大切なのか、保育の意義について学習しよう

③ みんなが生まれた時、お父さんやお母さんの苦勞や喜びはどんなだったろう。発表してもらおう

。おへそが体に巻きついて泣くことができなかったそうです。九十九%ダメだと言われたが、お母さんのがんばりで助かった

。逆子で、いろいろ運動しておしたが、大へんだった

ようだ

。予定日よりおくれて、機械を使って生まれたそうだ。最初の子どもが亡くなっていたので、両親は最高の幸せにひたったそうだ。だいに育てられた

④ 母子手帳を見て、出生時の状況を配った紙に記入しながら確かめよう。(略)

⑤ 赤ちゃんが生まれるのにどうしてこんなに時間がかかるのだらう。スライドを見よう。

赤ちゃんの通ってくる道は、距離にすると短いけど、赤ちゃんの頭囲はこれくらい(模型)あるから大へんなのです。この道は、尊い命の道ですね

⑥ 生まれた赤ちゃんが、小学校に入学するまでにどんなことができるようになるか、話し合ってみよう

運動、ことば、心、生活習慣のことが出る。沢山のことができる、すごい!

⑦ 人生八十年(平均年齢から)というけど、この長い紙(三・六メートル)が八十年とすると六歳はここまで(二十センチ)。六歳までにこんなことができるようになるのですね。

⑧ 今、十人の赤ちゃんが生まれたとすると、みんな同じ時期に、同じようにできるようになるだろうか。

狼に育てられた子の写真を見せ、環境のかかわりを話

す——あなた方の一人ひとりも環境をつくっているのです

⑨ なぜ幼児期が大切なのか、今日の授業をふり返ってまとめてみよう。

\* 母子手帳については、各々の家庭の事情があるのである人は持つて来ること。ない人は心配しなくともよい。

#### ④ 授業を終えての生徒の感想

。子供を産むっていうのは、まさか一日以上もかかってしまうものだとは思ってもみなかった。いつも母には、反抗ばかりしているけど、今までの母の苦労などを考えると罪を感じてしまう。あと、幼児期って、ほんとに大切なんだなあ。

。両親に感謝します。人間らしく育ててくれて、本当にありがとうと言いたい。保育がこんなに大切なものだとは思ってもしなかった。人間は、人間らしくなるのがあたりまえだと思っていた。でも、狼に育てられたら、人間らしく生きていけないということを知って、とてもショックだった。保育の時間で大切なことを学びたい。

。私は、母ががんばってくれたおかげで、今、ここにいるんだと思いました。十ヶ月もお腹にいる間、食物から仕事から気をつかってくれたんだなあと思いました。授業をやっ

ていて、今までは、「うるせー」なんて言ってきたけど親に申し訳ないと思いました。親の苦勞もしらないで親のことを悪くいったりして……。

〈保育のすべての学習を終えて〉

私が保育の学習をしてきて一番強く感じたことは、「やっぱり親はすごい」ということです。親がすごく大きな存在に見えて来ました。私は、病気を沢山したので、親に沢山心配をかけてしまったと思います。今、こうして私があるのも親のおかげなんだと思います。

今、しっかりすることが親に心配をかけないことにもなるけど、それ以上に、将来の自分を立派にすることにつながるんだなと思いました。

#### 四、終わりに

「母親から具合が悪いから欠席します、との連絡があったA子さんが、保育の授業は受けたいと言って登校して来たんですよ」と、三年生の担任の先生。

「保育の授業はなくともよい」「子どもは嫌いだ」という生徒も、生活に真剣さの欠ける生徒も、授業のねらいをわかってくれた。そして、一つの生命が誕生するその太へんなドラマの中から今の自分があるのだということを知り、心から親に感謝していた。学級や国語科で書かせる作文に真剣に取り

#### ◀Weの後半のテーマは▶

- 10月号 売買春の構図
- 11月号 アジアの中の私たち
- 12月号 地球再生へ向けて
- 1月号 揺らぐ家庭
- 冬増刊号 夏季フォーラムの記録
- 2. 3月号 男女共生の道を拓く

テーマにかかわっての投稿、ご意見をお寄せ下さい。

「Weになんでも言おう」「わたくしからあなたに」におたよりをお待ちしております。

We編集部

組まない生徒も、自分の気持ちを素直に書いていた。「もし、この学習をしていなかったら、この先もずっと親に反抗を続けていただろう」と。そして、今の自分を振り返り、今の自分はこれでいいのか、どうしなければいけないのかを真剣に考えていた。学習指導要領がどう改訂されようとも、生徒をゆさぶり、職場に、父母に訴える努力を続け、男女ともに自立した生活者、男女ともに連帯した生徒者の育成をめざした研究を進めていかなければならないと思う。

新しい・家庭科を・創るために

## 産まない”ことから みえてくること

分校 淑子

(金沢大学教育学部附属高等学校)

一昨年、初めて「家族」というテーマに挑戦し、その取り組みについては、We'90年六月号でも紹介させていただきました。授業を終えてますます、家族について扱うことの難しさと魅力を感じました。「家族って一体何だろう?」というはじめの問いが一段と重いものになりました。同時に「家族にとって大切なことは、血縁や婚姻というよりも、生と死なのではないだろうか」という漠然とした思いが残りました。

昨年再び「家族」をテーマとし、特に「生」を中心に授業を行ってみました。特にこの年、1・57ショックという言葉まで生まれた、出生率の低下に焦点をあててみました。

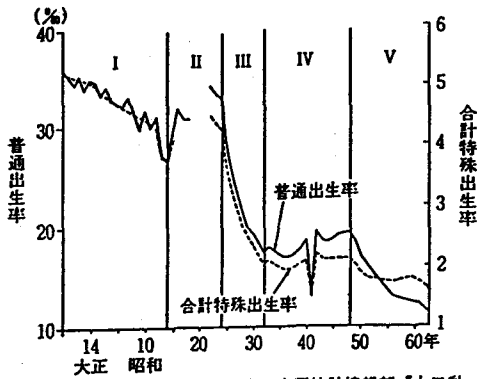
出生率の低下は社会問題とされ、原因や対策について様々な意見が出ています。しかし、私は生徒たちに、出生率低下

を他人事として、また社会問題の一つとしてとらえさせたくはありませんでした。1・57という数字は、単なる結果にすぎません。その数字が出るまでに、一人一人の女性の、一つ一つの家族の、大きな決断があるのです。現に、私自身四歳の子どもが一人おり、二番目をいつ産むか、もしくは産まないかの選択は非常に大きな問題です。

### ●「産まない」ことを扱うこと

以前視聴したビデオには、中絶について若干触れてありました。ビデオの感想は中絶に集中し、「中絶は殺人。それも我が子の命を自分で断つなんて」という意見が主流でした。その他、DINKSに対しても「我儘な生き方」という見方

が大半を占めます。確かに、まだ産むことも実感できない生徒たちではありますが、自分は(女性)産む性であるという認識は大変強いように思えます。そんな彼女たちにとって、産めない状態や、産まない選択は、とても遠い感覚なのでしょう。また、単純に、まだ子どもである自分の立場そのものを否定されているようで、反感を覚えるのも当然のことだと思います。高校生に対し、産まないことをぶつけるのは難しいことですが、ここ一二年生徒の中でも少数派ながら、「産みたくない」と表明する者も増えてきたようです。



(資料) 普通出生率は厚生省大臣官房統計情報部『人口動態統計』、合計特殊出生率は厚生省人口問題研究所『人口統計資料集』。

図1 普通出生率と合計特殊出生率の推移

私は、産む・産まぬは個人や家族の決断の結果だと基本的には思っています。同時に、これは全く個人的にですが、生徒たちも、やはり産む選択をして欲しいな、と思っています。しかしその前に、今、女性が産むこと・産まないことで揺れているこの現実をみつめて欲しいと思います。現実をきちんとみつめる中で、「生」について考えをふくらませて欲しかったし、「家族」についてももう一歩考えを深められるのではないかと思ったからです。

## ●出生率の変遷

現在の出生率低下を考える前に、授業ではもう少し前からの出生率の変遷を見ました(図1参照)。大正10年頃から今日までを、大きく五つの段階に分けることができます。その中でⅠ期・Ⅲ期、そして現在のⅤ期が減少期となっています。Ⅰ期の女子の晩婚化、Ⅲ期の人工中絶の合法化と避妊の普及を、直接的な原因として教えました。そして「なぜ晩婚化や中絶・避妊がこんなにもすすみ、出生数が減ったのか、本当はそれを考えることが大切だと思う」と投げかけをしてから現在へと目を向けさせました。

## ●コンピュータを活用して

昭和50年以降現在進行形の出生率の低下の原因について

は、まだ様々な人が様々な意見を出している段階です。その原因を、生徒たちにも追求させたいと思いました。

アシストカルクというコンピュータ用ソフトに、合計特殊出生率をはじめ、平均寿命、第一子出生時の母の年齢、一戸建住宅の価格、月間労働時間、保育所数など、約40項目について、昭和50年以降の年ごとの数値を入力しておきました。操作方法は、授業日前の放課後に各グループの代表に、約一時間の説明をしました(但し、私はコンピュータには詳しくありませんので、操作方法等は、かなり他の先生に協力していただきました)。

授業はグループ学習の形態をとりました。まず、「なぜ出生率は下がったか」について予想をたてるため、ディスカッションをしました。「橋本さん(大蔵大臣)」が言っているように、やっぱり女の人の高学歴化が問題なんじゃない?」「そうしたら、その対策として、女子の大学受験を不利にすることになったりして!」「いやだ!」とか、「うちのお父さんが読んでいた『日本人口崩壊』って本には、地価の高騰が原因だって書いてあったらしいよ」「なんで土地の値段ぐらいで子どもの数が減っちゃうのよ。都会だけじゃないの」「教育費の方がピンとこない?」「うーんお金か。むなししい現実だね」「けど、やっぱり量より質よ」。等々話し合いが盛んなグループがあれば、全く予想がたたずにまごまごしている

グループもありました。

予想をたてたグループから、コンピュータの入力項目をながめ、年次推移のグラフや出生率との関係のグラフを出し、ディスカッションを深めました。「女子の大学進学率とは関係ないじゃない」「夫婦仲の悪さが原因だと思ったんだけど離婚率は減り出しているよ」「愛情の中身が変わったのよ」「働きすぎなんじゃない?」「でも子育てにはお金がかかるから」「数字の裏を読むなんて、学者さんになったみたい」等々、予想以上にディスカッションを重ねながら結構真剣に取り組んでいました。

グループごとの考察は、レポートにまとめ、クラス全体で発表し合いました。生徒の考察の中には、

⑦地価を筆頭とする物価の上昇に伴い出生率が低下している。但し、家計黒字率との間に相関がないことから、生活観の変化、つまり高級指向が影響している。

④出産適齢期といわれる25〜29歳の女性の労働人口率が急激に上昇している。つまり、働きながら子どもをもつという選択が少産化を促した。

など、なかなか鋭いものも多くみられました。数週間後の新聞には、①の理由とほぼ同じものが発表されていました。

最後に、一人一人に感想文を提出してもらいました。その中から少し紹介してみたいと思います。



(A) プリント類を与えられて受身的に考えるのと、自分で選択できるというのは大きく違うな、と思いました。暗中模索しながらグラフを見るのは楽しかったし、自分から求めて行かなければならないので、普段より深く考えてみたりもしました。

(B) グラフについて分析して、あれやこれや考えるのは楽しかったし、「冷酷」と思っていたコンピュータルームにも温か味を感じた。一人の世界と思っていたコンピュータだったけど、グループのみんなと論じる中で、とてもよいコミュニケーションがもてた。

(C) やっていて、「何か足りない」と感じた。別に「○○○データがないから入れるべきだ!」と思ったのではなく、なんとなく厚みがないと思った。女性が子どもを産まなくなった原因は、そんな簡単に割り切れるものじゃない。先生もそう思っているでしょう?!

(D) 数々のデータによって色々な方面から考察ができました。でも、それ以前の段階で予想することや、画面を見ながらみんなで疑問を出し合ったりして、データ以外の何か人間の心にかわからないことを見い出すことを忘れてはいけないと思いました。

(E) 子どもが欲しくないというのは、次の世代のことを考えると自分勝手だ。けれど、女性が自分の人生を犠牲にし

て子どもを産むのも残酷な気がする。

(F) 出生率が低下しないで、女性も自由に生きられるようになれないものでしょうか。それには、女性も男性も共に家事や育児や仕事することだと私は思います。

コンピュータを使用することについて、随分悩みました。しかし、今回は手段と割り切って使うことを決心しました。(A)(B)のような感想は多くみられ、情報を主体的に活用して考えるという形式自体はよかったように思えました。また、コミュニケーションを深める手段としてコンピュータが有効に作用したことがわかり、ホッとしました。

しかし、(C)(D)の意見は、少数派とはいえ大切なことを指摘してくれたように思えます。日頃、私は正か否かという形でのディスカッションをほとんどしていません。それは、——人々が色々な意見をかわし、その中で視野が広がり、他の人の意見を理解する柔軟さが生まれ、何より自分の意見を確立することができることを大切にしたいからです。ただ、今回は、各々の感性にちよっとプラスして、刺激を与えてみようと思ったのです。ナマのデータという刺激を。その刺激を通して、より深く、より多くの生徒の意見が出されることを期待したのです。とはいえ、今回、コンピュータを使う中で、その主従が逆転しそうになった私に対して、生徒がブレーキ

をかけてくれた気がします。私自身、二人目の子を産む決心がなかなかつかないのも、もちろん働いていることはとても大きな原因だけど、それだけではない色々な葛藤があるからです。この問題は、その人固有の問題が含まれているのです。そういうことに気付き、見つめなければ、家族にとっての「生」を考えることはできないのかもしれない。

ただそんな授業の中からも⑤のように素朴に女性の人生について意見を述べてくれた生徒や、⑥のように新しい男女の生き方や家族のあり方に目を向けてくれた生徒がいたことは救われる気がしました。

## おわりに

「家族」全体の流れは表1に示してみました。しかし、この文章を書き終えて、「生」に対するつっこみの弱さを痛感してしまいました。今年も、また一から出発です。

先日、一年生の授業で、スウェーデンの働く女性とその家族を映し出したビデオを視聴しました。三人の子供をかかえ重要なポストに就く妻と、育児休暇をとる夫の姿を見て、ほとんどの生徒は、「日本じゃ考えられないけど素敵だわ」と言いました。その中で一人、「どうして、そんなにまでして子どもを産むのかしら」と言った生徒がいました。なぜ産まないのか、ということばかりにとらわれていた私は、ハッと

表1 「家 族」

- ①家族の一般的定義とキーワード  
同居・婚姻・血縁・(愛情)
- ②家族のゆらぎと社会  
～家族の横軸(結婚)と縦軸(子ども)に見られる変化～  
・結婚の意味の変化と男女の結婚観の違い  
☆・出生率の低下を引き起こす社会のしくみ
- ③家族の歴史  
・古代から近代以前までの家族の形態  
・近代家族の特色  
・近代家族=家族という感覚
- ④家族の現在  
・生殖と血縁  
・母性本能と家族愛  
・老人と死
- ⑤近未来家族
- ⑥家族とは(それぞれの家族)

させられました。なぜ産むのだろう？ 実は私も、ベトナム難民の様子などを見るにつけ、感じていたことです。もちろん、本能だからとか、避妊を知らないから、等という理由ではなく、「死」と直面した中で、なぜそれでも「生」をあきらめないのだろう、という感覚です。「生」をみつめる時には、同時に、「死」もみつめなければならぬのかもしれない。今、そんな思いがよぎっています。

「家族」は、本当に難しいテーマです。生と死、これを私のキーワードとしてこれからも模索してゆきたいと思います。

## We 関西・初夏のつどい

### NO! と言える関係

「ヨメ」「ムコ」「シュートメ」  
スクランブル

パネラー

勝部温子 (『別性結婚への選択』 著者)

川端里奈 (関西女性学研究会)

司 会

北川好美・吉田清彦

(5月12日 神戸学生青年センターにて)

五月十二日(日)神戸学生青年センターで、  
「ヨメ・ムコ・シュートメ・スクランブル」  
と題して、We兵庫・大阪の会による初夏のつ  
どいが開かれた。最近、テレビの昼番組に  
「嫁姑」を扱ったものが目につく。家制度は  
なくなったはずなのに、私たちは、まだまだ、  
家制度の呪縛から逃れられないでいるのでは  
ないだろうか。吉田清彦さんの司会で、はじ  
めに、『別性結婚への選択』(セルバ刊)を書

かれた勝部温子さんの話をきいた。

娘から別性結婚を宣告されて、それは何  
だ? と思い、本屋に行ったりと、別性結  
婚をする側の本ばかりで、される側のもの  
がないということに気づいたという勝部さん。  
本を出してから、いろんな人から手紙をもら  
ったが、その多くが勝部さんに対する同情や  
はげましで、戸籍を共にしない結婚を法律で  
おかした結婚と捉えている人が非常に多いこ

とにびっくり。娘に別性結婚された親とし  
て、自分の主義主張は置いておいて、できる  
だけ、娘にとって住みやすい社会をつくりた  
いと、親バカで思った。そこでわかったこと  
は、私たちは法律に守られて生活しながら、  
法律を知らず、慣習を法律だと思いこんでい  
るということ。最初は、コメディータッチの  
おもしろい本にしようと思っていたのに、本  
を書くようになって、何回か、娘と手紙のや  
りとりをしながら、だんだん、おちこみ、腹  
を立て、でもそれで、はじめて、娘の考えが  
わかるようになってきたと話された。

婚姻届けを出さない理由は、戸籍にこだわ  
るから。大阪市東淀川区から高槻市に引越し  
た時、なぜ、本籍地を移さないのかきいた  
ら、母が父が「本籍地を移すのは部落出身者  
のすること」と言ったこと等、日常生活の中  
で、えー? と疑問に思っていたことがため  
こまれていた。また、大学に入って、アルバ  
イトで、市役所の戸籍係をし、毎日コピーを繰  
り返しながら家制度の亡霊をみる思いがした  
という娘の尚子さんの言いが紹介された。  
次に「関西女性学研究会」のメンバー、事  
実婚をして夫婦別姓や非嫡出子の問題に興味  
をもったという川端里奈さんの話をきいた。



川端さんが籍を入れなかったのは、当時、学校の非常勤講師をしていて、結婚したら、肩たたきされるのではないかと思ったからで、戸籍そのものの問題はあまり考えず、籍を入れることで不利になることを考えたためだった。夫の親から、「戸籍のことはよくわからないけど、とにかく籍を入れ、早く、うちの一員になって、孫の顔、見せて」と、会ったに言われ、つらかったそうだ。もともと、親が息子のために買っていたマンションに住むことになったが、家財道具一式、インテリア、すべて、夫のお母さんの好みのもので、歩いて十分ぐらいの距離に住んでいた夫の親がたびたび訪れ、生活に介入してきた。私の思い通りにならない家だなあと思ったという。例えば、気に入らない水切りカゴをせっかく捨てたのに、すぐに夫が、前と全く同じものを買ってくるというように。一年間ぐらいいは、日曜日には実家でごはんを食べ、いい嫁ぶりを発揮したが、今はほとんど行かないという。嫁姑という関係ではなく、人間対人間として、興味をもって話ができたなら最高だなと思うという言葉が印象に残った。

この後、ティータイムをはさんで、スクラブルトーク第一部、第二部があり、自分の

経験から家制度の問題が次々と語られた。「名前というのは、どちらかが好きな方を選んでらよいと思っていたが、父が死んで葬式の時に、名前ではなく、これは、家名なのだと思います知らされた」

「少し前までは、籍を入れるのは女性の権利を守るためだった。だけど、妻であれば守られ、妻でなければ守られないというのはおかしい。嫁や娘しか頼るものがないという老後不安についても、私たちが社会制度をつくっていかない限り、家族間葛藤は解決できない」  
「今、別姓結婚を選ぶには、しんどいところを乗り越えないといけないけれど、法改正で別姓を認められた時、それを定着させることからではじまって、次には、届けを出すのか、出さないのかという問題について考えていかねば」など、別姓結婚ですべて解決するのはなく、戸籍そのものの問題について話された。他に、お墓の問題、男が親離れしていないこと、小姑の問題、母の日に、こんな所に来ていいのだろうか、『別姓結婚の選択』がドラマになったら別姓もトレンドになる(?)など、いろんな意見が出された。

さらに、バザータイム、交流会もたれ、盛りだくさんの半日だった。(浅井由利子)

## Weの会・初夏のつどい

### 男の役割くずし 女の役割くずしを どう進めるか

問題提起者 津田正夫 (テレビ局ディレクター)  
内山裕子 (「モンペハウス」経営)  
司 会 武田秀夫・諸橋泰樹

(5月12日 東京都婦人情報センターにて)

「夫婦・家庭・社会・労働・教育・ジェンダー・セクシュアリティ等々、さまざまな局面で、性役割の固定化は、はたして揺らいでいるのでしょうか。『We』91年一月号「性役割の固定化は揺らいだか」をもとに、読者・執筆・座談会出席者ともども、現状を語り合い、女の役割くずしをどう進めるか、方途を探ります」。

このような呼びかけで、Weの会拡大読者会

は、四十数名の参加で開かれた。Weの会としては、男性の参加者が多く、役割くずしのために、いろいろな運動を展開中の人も。90年We夏季フォーラムの分科会「女の解放・男の解放」から一貫して取り組んでこられた武田秀夫さんの想いが、多方面に広がっていくのが感じられた。私は、日々の生活の中で男の意識の相違から起こる人間関係のきしみでいらだつことが多く、少しでも居こちの

よい場を作りたいという思いから、話に入っていけたらと思った。

問題提起者のお一人はテレビ局にお勤めで、只今単身赴任中という津田正夫さん。

「ただの男の切なる想いを話してみたい。自分の生き方とか、自分につながる人たちとのこととか、とても生き苦しい世の中で生きている男たち、自分の同類たちと共にどうしたら生きやすくなるかと、いつも考えている。それが、女性たちが模索したり、提起したりしていることと重なると思う」と前置きして、次のような問題提起をされた。

男にとっての問題の所在を、①「差別やめろ、つらい」男女平等要求、②家族解体、③結婚難など外的な面から、④「男」のアイデンティティ崩壊、⑤企業活動のかげり、⑥日本の男原理の副作用など内的な面から、分析し、様々な問題を話された。次に、役割くずしのための模索、その進め方をめぐって、フェミニストたちが、男に対していろいろ言うことは重々承知しているながら、それらにいま一つしっくりこないものがあるという。男は男でじっくり考えていくしかないだろうし、男の持っているグローバル性は大事、と述べ



られた。

続いて、夫婦共に無理せず働いていくのが理想と、それを実践中の内山裕子さんの報告。We 一月号を読んで心に留めたことを、内山さんの暮らしの様子にもふれながら話された。まず、青木やよひさんのインタビュー記事から。ジェイムズ・ロバートソンの「自己雇用」の提案に非常に共感したということ。現在の働き方を変えていくに限り、男女共に暮らしに目を向けていくことはむずかしいのではなからうかという感想を。

牧野カツコさんや「新しい家庭科を創るために」の記事からは、女子差別撤廃条約に感動したことを思い出し、男の問題、女の問題を同じ立場で話していけるようになってきているなと思ったということ。十数年前の比較において今がより自由に物を考え、述べる人たちが多くなったことに期待してもよいのではないだろうか、家庭科の男女共修が決まったけど遅れているのは大人たち、大人たちの共修も進めていけるといいだろう、と話された。

お二人の報告を受けて話し合いに移った。「あなたはどうかするののか」という問いかけ

に、それぞれ模索中であっても答えを持っておられる方も多く、様々な意見が出された。それぞれが生きていく間に身につける考え、生活の方法、人とのつき合い方など本当にいろいろあるのだと改めて感じた。現在つらい立場にあっても声を上げない(上げられない)人もいるし、どう声を上げようかと悩んでいる人もいる。それらは個々の問題であるけれど、制度を変えない限り解決できない問題でもある。

超特急で走り続けてきた男たちが、あるいはその列車に乗り込み援助してきた女たちが、そこから降りて物を言うようになったのはとても好ましいと思う。それは、ほんの少数派なのか、多数派になりつつあるのかかわらない。きっと少数派なのだろうけど、こういう集会が持てて、本音が言えれば、世の中風通しもよくなるだろう。男ももっと参加するといい。そうすれば、踏みつけにされて声を上げている弱い立場の人たちのことがもっとわかるだろう。役割くずしのためにまず何に目を向け、取り組めるかわかるし、自分のこととしても考えていけるだろうと思う。男子高校生が、自分の家族は父が仕事をやめたことにより、家での役割分担が変化していっ

たことを話し、仕事とか家事とか性別にとらわれることではないと感じていると発言したのが、私は強く印象に残っている。

先日、私は、中学三年生と共に、京都方面に修学旅行に行った。生徒たちは、グループ別に計画にそって見学したのだが、帰ってからの感想のいろいろ。

「男の子たちってまったく頼りないんだよ。時刻表の見方もわからないし、私たちの後をついてくるだけ」と、元気のよい女の子たち。「僕たちの班は、女子が休んで、男だけ。ちよーつまんねーの」。

「男の子が頼りになって、見直したよ」。彼らの将来に期待する。子どもも変わるのだから、大人も変わらねば……。 (磯部幸江)

「このごろ、女の解放・男の解放をやってる」と言うのと、友だちが皆笑う。よほどひどいミス・マッチに見えるらしい。

昨年のWe夏季フォーラムで「女の解放・男の解放」分科会を担当して以来、行きがかり上あとに引けずというところなのだが、この世界にも、独特のギョーカイことばが飛びかかって、シロウトはなかなか立ち入りにくいということがわかってきた。で、せめて、自分

のような「オトコの一般大衆」が平気で参加できるような会にするのが役目かなと思って集まったこの集い、まずは所期の目的にわづかながら近づいたかなと思っているところ。

Weの会会員の津田正夫さん、内山裕子さんに話題提供をお願いした。おふたりとも、専門家風ギョーカイことばとは無縁のことばで語ってくださるだろうと考えたからだ。結果は期待どおりだった。問題の所在・布置を自分の中で明らかにするよすがを与えていただいたと感謝している。

スリリングだったのは、金井淑子さん(91年一月号執筆者)の発言だった。津田さんが、「現在の世界・社会・関係の課題をグローバルにとらえ、それらを全体として変えた」と思ってしまう男、その男の全体構造に、フェミニズムの側からの提起は十分に迫りえていない気がする」と語ったのに対して、金井さんは、「そのように、男のグローバルイズム、女の身辺主義と、セパレートに問題をたてるのは危険ではないか。グローバルに問題ををとらえることと、ラジカルに個の立場から変革を追究することとは、共に大事だし、その点については、男も女もないだろう」と指

摘した。

津田さんから丁寧な補足があり、問題が生産的に煮つまりそうだったのだが、時間切れ。いつか金井さんをお呼びして、討論を続行できたらなあ、私はかなり興奮して、二次会の酒を飲んだ。

(武田秀夫)

### ◆「Weの会」に入りませんか

Weの会は、Weの読者でつくっています。「Weの会だより」の発行と、夏には、ウイ書房と共催で、二泊三日のフォーラムを開催しています。全国各地で、Weの読者会なども、ひらかれています。今年

は報告のように五月十二日に東西でつどいがもたれました。年会費は千二百円です。左記へお申込み下さい。

〒182 調布市東つじヶ丘3の6の17  
郵便振替/東京2-4025-9

芦谷 薫

# 荒野のバラ

田中裕一

## 愛のコンサート

### 1 三点セット性教育

「お父さんは二回性交したの?」という息子の質問の衝撃で頭に来た親父さんの「なぜだノ」に、小学五年の息子の答えは明快だった。「だってうちは子供が二人だもノ」

呆れた父親が学校にねじこんだ時、教師の反省もまた明快だった。「今まで生殖の性だけ教えて、快楽の性を教えなかったことを反省するノ」

人生という有機体の複雑な小宇宙を、どうしてそう簡単に割り切るのか、哀しく恐ろしい。重要なことは、さりげない日常生活をする「ひと」のもつ総体としての、トータルな生き方にある。成績急低下の原因が、隣の座席の子が好きでたまらぬ結果であったこともある。文化祭での劇「夕鶴」を熱

演した与へう役の男子が、つう役の女生徒に舞い上がってしまい、女の子が冷静だったので、男の子が虚脱状態になって、関係者の心痛ただらぬこともあった。

確かに中高生の妊娠中絶も増え、20歳以下の中絶の統計では、女子人口千人につき5〜7人である。'85年熊本県内のレイプ件数21件(検挙19件)強制わいせつ72件(検挙56件)、性媒介疾患(SKD)中、'87年で204件と梅毒が増え続けている。

私の調査でも、車から手を引張られ、連れ去られようとした女子生徒、ソープランドに引きずりこまれかかった男子生徒もいた。確かに生殖・快楽・避妊三点セットが、性教育の重要部分を占める背景も理解できる。だが最近の心なき社会の中で荒れている子供達の内面の空しさを余りに見

熊本市の中学2年生対象の調査

質問1) • あなたは、何人かの いっしょに、おんなのこ とをいっしょに したことがあるか。	M (154)		F (98)		Total (332)	
	YES	NO	YES	NO	YES	NO
(質問2) • あなたは、何人かの いっしょに、おんなのこ とをいっしょに したことがあるか。	13 (86.7%)	2 (13.3%)	16 (88.9%)	2 (11.1%)	29 (87.9%)	4 (12.1%)
(質問3) • あなたは、おんなのこ とをいっしょに したことがあるか。	2 (13.3%)	13 (86.7%)	11 (61.1%)	7 (38.9%)	13 (39.4%)	20 (60.6%)
(質問4) • あなたは、おんなのこ とをいっしょに したことがあるか。	8 (53.3%)	7 (46.7%)	11 (61.1%)	7 (38.9%)	19 (57.6%)	14 (42.4%)



すぎた私は、生殖―快楽―避妊をいくらかき集めようとも、人間の性教育は完成しないように思う。個人の尊厳と両性の平等、扶養―保育―育児―教育の視座が欠落しているからだ。大新聞が、「熊本市、12日間で赤ちゃん遺棄3件―母親の自覚どこに―」と書く。父親の自覚は不問なのだ。家庭科の保育、社会科の人権・婚姻・扶養、保健の性・感染症、理科の生殖が、不統一に、無定見に詰めこまれ、生きた生活行動として作動しない上、生徒指導では、「不純異性交友」防止で、「健全育成」とくるからもう支離滅裂である。人間の性の深淵を、のぞくことさえできぬ教育のシステムができ上っている。

## 2 生きるため続出する疑問からのスタート

一九六〇年代から、私は、基本的人権、科学的認識、全面発達、現実主義、理想への主体的行動、人類の発展と平和などの視野を持った性教育を構想して来た。子供の疑問は、現実根ざし、素直かつ純粹である。幾つかを拾うと、

- 1 大人も私達の頃好きな人がいたと思うのに、私達にはなぜ制限するのでしょうか。
- 2 加害者は男性なのに、なぜ女性に注意を呼びかけるのか。
- 3 結婚は必ず肉関係を伴うのですか。
- 4 同じ人だけ一生愛し続けることが本当にできるのですか。

5 結婚と同棲はどう違うのですか。

6 独身がいいと思うけど、結婚は果して意味がありますか。

7 未成年で子供ができたなら、どうすればいいのですか。

8 女の子を妊娠させたら、必ず結婚すべきですか。

9 自分のダンナ様のフリンを知った時、言った方がいいのですか。それとも黙って見過す方がいいのですか。

10 好きな人が結婚したら、愛人になるしかないのですか。

11 自分の子供なのに、なぜおろしたり、殺したりするのか。

12 「父の子、兄の子を産んだ」などの記事は本当ですか。

13 別な人を好きになるのは、本当にいけないことですか。

14 男女の交際はどこまでいいのですか。Aまで？Bまで？

15 エイズやその他の性の病気について知りたい。

16 中絶が増えていますが、それならなぜ妊娠するのですか。

17 障害者が生まれるのは、どのような時ですか。

18 私達の年代の子の、性の失敗の本当の姿を教えてください。

19 受験生は、人を好きになってはいけません。

20 自分の子を、正直で、心豊かな子に育て、明るく平和な家庭を作るために、どんなことが大切なのですか。

私達の胸に迫る、人生の重い問いが、一つひとつに籠められている。ここから性教育を始めよう。六十ほどの質問を、生徒のリーダー達の討議にかけ、切実度の高いものを選び、それに答える筋道で授業を構成し、20番目の間に収斂するよ

うに授業を進めた。

### 3 愛のコンサート

授業は、中学二・三年対象に、「愛のコンサート」として、指導案をソナタ形式で書いた。

#### 序奏

生まれ、生き、生み、死ぬ、人の一生は一回限りだが、その愛の意味の広さと深さ、その輝きである不滅の仕事に触れる。

#### 呈示部

第一主題として「生物としての人間」をセット、ここで自分が大切という「個体保存」と、あの人（配偶者）やわが子が大切という「種族保存」の、二つの生物のメカニズムに触れた。ここで様々の生物を豊富に使う。生徒が身をのりだす。

キキョウの近親婚拒否、マツの受精、倒木更新、クモの交尾、サケの一生、カバキコマチグモの親子関係、クダマキモドキの雄の、他の雄の精



「ヘア」どころでない、意味深長な記念写真。生物学的現象を前に人間はかく反応する。男生徒がいらないのが残念。写真週刊誌のポール・ヴァン・リール氏撮影。

子食い、カッコウの託卵、ライオンやハヌマンラングール（猿の一種）の子殺しと発情期、何時間経けても、生徒の興味つきない魅力的世界の教材である。

第二主題は、生活や文化としての人間の愛の形に触れる。人は紛れもない生物でありながらどこかが他の動物と違う。

一枚の写真を呈示する。修学旅行中の高校生の、奈良での記念撮影中、皆の前で鹿が交尾を始めた時の、人々の関心、驚き、当惑の読み取りである。人前で鹿の様な行動を取らないのがヒト社会の「常識」というものである。

#### 展開部

性の理解から愛の理解へ進む。ここで授業は、テーマⅠとⅡを織り込んでいく。三部に分け、① before bed ② in bed ③ after bed と構成する。私の授業では①・②・③

が不可欠となる。①では準備的出会い↓関心↓意識化↓表現化の段階から直接的行動つまり接近欲↓接触欲↓性交欲と次第に②へとクレシェンド（次第に強く）、アチュレラニド（次第に速く）加速する姿を映し出す。自分が今どのプロセスにいるかの座標や展望が見えるようになる。



ショパンのワルツの多くは女性達に献呈されている。これはフィアンセのマリア・ヴォジンスカに贈られた。ショパンと別れた後もマリアはこれを大切にしていた。



ショパンが、初恋のコンスタンチアに思いを馳せながら作ったと書簡に書いたワルツ。彼女はショパンの思いを彼の死後に知った。

結婚ゆび輪はいらない  
朝顔も洗うとぞ  
私の頬をきつけないように  
体を抱き上げよう  
私が抱くように  
結婚ゆび輪はいくつもない  
今、レースのカーテンをひきぬけて  
朝陽の中で  
私の膝にまたあなただけ  
洗面器から冷たい水をすすぐ  
その十本の指先から  
金よりも銀よりも  
美しい涙が落ちてくる

障害者の星野富弘氏を見舞った女性（今の夫人）を謳った詩。彼はこれを口で書いている。

②では妊娠のメカニズムと対応する避妊のメカニズムの説明に入る。排卵→コンドーム・ペッサリー、排卵→ピル、受精→精管・卵管結紮、着床→IUDの四段階と、妊娠→人工中絶に触れ、それぞれの自然に反するトラブル、性と生殖の分断、生む性の不平等な苦痛、第三者としての子の人格、性行為感染症に触れる。

③では、生まれ出づる悩みと喜び、赤ちゃんのすばらしさ、母性のすばらしさを、資料や写真で呈示する。子どもを心豊かに育てるために、父親と母親になるための責任ある自覚と学習の必要は特に強調する。遅しく、心豊かに育てるために、自分がそのような親になることこそが重要な学習の目的なのだから。受験のエリート、権力や財産・主要科目等はその前で無力となる。

### 再現部

人間の愛のかたちが、生物としての性のエネルギーを根源としながら、それを個人の尊厳と両性の平等に根ざした働きによって、社会生活や文化のエネルギーに点火した先例を豊富に取り上げた。愛に燃えつき輝いた人生は無限にある。そうした

先例は、ベートーベンと不滅の女性たち、ロベルトとクララ（シューマン）、アルマをめぐるマラー（音）・ココシュカ（画）・グロピウス（建）・ヴェルフェル（詩）の巨匠達、またジャンヌとモジリアニ、カミーユとロダン、ピカソと女性達、マリーとピエール・キュリーらの仕事に輝いている。精神的にはレギーネとキルケゴール、メック夫人とチャイコフスキー、マルヴィーダとロマン・ロランの例もあるが、犠牲を強いた愛や地獄を見た愛もあった。高村光太郎と長沼智恵子、北原白秋と松下俊子、鵲外とエリスも、それが智恵子抄」や「城ヶ島の雨」や「舞姫」の原型となった。そうした

人の歩んだ道を、豊かに示すがいい。  
私は、この「愛のコンサート」の授業の最後のカデンツ（終結）に、シヨパンが初恋のコンスタンチアに思いを馳せて作った13番のワルツと、フィアンセ・マリアに贈った9番の（別れのワルツ）、それが破綻した時の葬送ソナタの一部を、ピアノで弾いて聴かせた。そして最後に寝たきりの障害を持つ星野富弘さんを見舞った女性（今の夫人）への星野さんの詩を以て授業をしめくくった。この授業で、私は熊本県の福田稠産婦人科院長にレクチャアをいただいた。そして生徒達の純粋な感性に導かれたことに、深く感謝している。

#### クリストファー・ノーウッド

綿貫礼子・河村宏訳

『胎児からの警告』

―危機に立つ生命環境―

（新評論 二二八四円）

今日の環境汚染が、幼い子どもや、まだ生まれぬ子どもたちの健康にどのような影響を及ぼすか。「人間がまだ経験したことのない、化学的、物理的作用因子に曝され続けた場合、どんな影響を受けることになるのか」。

この本は「問題となる事柄を容赦なく叙述した」とある。子どもたちが身を犠牲にして

絶えず送ってくる危険信号——自然流産率の増加／先天異常／胎盤経由の発がん物質／放射線被曝／農薬／ダイオキシン鉛中毒／妊娠と労働環境／管理された出産／人工誘発分娩……。

多くの事例を出し、子どもにとっては誕生前の母胎内での影響が後発的障害を惹き起こす可能性があるのだということが繰り返して述べられており、この「危険信号」を我々がどう受けとめるか、緊急性をおびた問題をつきつけられる。

#### 青木やよひ編

『誰のために子どもを産むか』

―性と生殖のフィロソフィー―

（オリジン出版センター 一六四八円）

76年出版後、絶版になっていたものの再版。

「産む・産まない」の議論が活発だ。青木さんはこの本で、人口問題、国際経済、文化などの大状況と、「個人が子どもを産み育てることの意味、哲学を、その主体（女性）小状況」の側からさぐり出すという大テーマに、いどまれている。各分野の「鋭い問題意識の持ち主」を次々と登場させて、対論、討論形

式で、問題の所在が次々と明らかに becoming。特に、第一部「私たちにとって人口問題とは何か」では、西川潤、日高敏隆、宇井純、原ひろ子、青木やよひの五氏の登場で、それぞれの専門分野からの話が興味深く、十五年前に出版された本だが、時代の先行きの読みの正確さにおどろかされる。

青木やよひ・丸本百合子

『私らしきで産む・産まない』

(農文協 一二五〇円)

「初潮、月経、思春期、避妊、不妊、妊娠、人口妊娠中絶、出産、授乳、更年期、閉経、およびセクシュアリティーを女性の健康という視点からとらえ直す」——リブログダクティブ・ヘルスを提唱しておられるお二人の共著。「産む性」として、妊娠、出産だけが対象となってきた、女性の生殖機能を、もっとトータルにとらえ、自分の人生の中で、主体的に選びとっていくことを、女性の基本的人権として保障する社会をめざす考え方——人生をトータルにとらえる視点を与えてくれる。

出生率低下や中絶の問題など、すべて女性のからだの健康という視点から語られ、思い込まされてきた「生殖」をつきつけられる。

今月の  
読書から



青木 喜代江

「女の人権と性」シンポジウム有志  
『沈黙をやぶった女たち』

(ミネルヴァ書房 一五四五円)

カナダの女性スタッフ制作の映画『中絶——北と南の女たち』をめぐる『の、日本語版制作と上映会を行なったグループが、上映会ごとに開いた講演と、アンケートを中心にまとめた本。

ヤンソン由実子、堂本暁子、駒野陽子、落合恵子、宮淑子氏らの講演の記録。上映会ごとに行なったアンケートの回収率は、常に60

く70%をこえ、総計千枚近くにおよんだ。いずれも中絶に対する切実な思いや考えがさまざまな形で述べられ、「はからずも他に類を見ないほど雄弁な『中絶白書』の様相を呈した」というアンケートを多数掲載している。巻頭に映画のシナリオとフィルムの一部を紹介。アイルランド、ベルー、タイ、日本、カナダ、コロンビアの「中絶の現実」の記録。巻末に、資料として「中絶と法律」と参考文献をのせている。

エウリン・ショー／ジョーン・ダーリン  
グ 田中和子・三木草子訳

『生殖神話が崩れる』

(有斐閣選書 一六四八円)

動物のオス、メスの行動の例をひきあいに出して、女は受け身なもの、女には「母性本能」があつて子育てをするものという考えをおしつけてきたが、この本は、生殖に関する根強い固定観念を、いろいろな動物の例を提示して、あっさり打ち破っている。訳者二人は、この本はフェミニズムにとって「必要な本」と、翻訳にも力が入った様子があとがきにあった。専門的な分野の著述が、平易な文章で読みやすく、おもしろく訳されている。

# 家族と家庭科

● 酒井はるみ

## 小学校「家庭」にみる

### 科学と道徳の間

先月号で、私は家庭科は科学的でなければならないと述べた。科学的であることは、事実（事態）を客観的に把握したり、認識したり、分析する力を育てるものである。現代の拡大した科学技術・知識のなかで暮らすことが即生することである私たちにとって、科学的なものをとらえる力は生きる力そのものである。そういう意味で、教科は科学的でなければならないのである。

さて、科学と道徳という視点から「家庭」の内容を問題にしよう。

その一つは家族構成の問題である。'58（S33）年指導要領による教科書'61年度版では、祖母のみの三世代家族が核家族の倍近くになっていることに疑問を呈した。確かに日本人の

平均年齢（'60年国勢調査による）ばかりでモデル家族をつくと、第一子が五年生になる年に祖父はいなくなる。しかし、実際には祖父母＋父母＋子は9%、祖父または祖母＋父母＋子は12%で、祖父母のいる家族と祖父または祖母のいる家族は大差なく存在していたのである。祖母のみが強調される根拠は認められないのに、寿命がずっと延びた現在でも教科書に登場するのは祖母のみである。その上、核家族は直系家族（三世代家族に該当）の倍以上もあるのだ。

事実とちがって、祖母のみの三世代家族が教科書の中心に位置づけられているのは、視覚を通して、直系家族をモデル家族として示しているわけだが、そこにどんな意味をこめているのだろう。世論調査の結果を使って、日本では欧米に比べて同居志向が強いことを示したのであれば、ことの適否を問わなければ、一つの主張だから、そのように記述すればよい。しかし文中になんの説明もなく、敬老は大切なのだというように、視覚を通して訴えているのであれば、それは科学ではなく道徳である。

つぎに「家庭のはたらき」についてとりあげよう。

'56年から'60年の間に、中、高校指導要領は「家族」を排して、「家庭」の理解へと方向づけた。小学校では、このような地ならしが終了したあとに、はじめての教科書が刊行された。本稿では開隆堂のケースを追ってみよう。

（'62年度版——'58年指導要領による）

①家族がいっしょに住んで、食事をしたり、衣服を整えたりするところである ②一日のつかれをなおし、元気にあすのしごとや勉強をするための力を養うところである ③家族がたがいに親しみ、教え合って、教養をたかめるくふうをしたり、みんなで協力して楽しく生活するところである ④親類や近所の人と交際し、たがいに助け合っていくための生活について、学ぶところである。

（'74年度版——'68年指導要領による）

①家族のだれかによいことがあると、みんな喜び、こまることがあると、みんなで心配して、はげまし合う ②父母は、いつも子どもを考えたことを考え、よく育てようとして努力する ③祖父や祖母など、年をとった家族をみんなで見守り、たいせつにする ④父やその他の家族が働いて得た収入で、みんなが生活をする。⑤楽しく食事をしたり、休養やすいみんなをとったりして、しごとや勉強のつかれを直し、元気を回復する ⑥読書や話し合い、新聞・ラジオ・テレビなどで、教養を高めたり、楽しんだりする ⑦たがいに助け合い、信じ合うなど、人びとがいっしょに生活するのに必要な心持ちや態度が養われる。そして、明かるくなかな社会をつくるのに役立つ。

両方を比較すると、修飾語が多くなってくることに気づく。これは'58年改訂、'68年改訂を通して一つの傾向になっている。

これに対し、数ある教科書中もっとも簡潔な例をあげよう。

①わたしたちの生活のよりどころ ②家族の人たちが、ゆっくり休むところ ③子どもをまもって、育てるところ ④家族の人たちが、教養をたかめたり、楽しんだりするところ ⑤社会生活

のきそとなるところ（倉沢、日本書籍、'65年度）

いともそっけない記述で、子どもにはとっつきにくいかもしれない。しかし、この記述に肉づけしてゆくところこそが授業というものではないだろうか。

開隆堂の例では、新書の修飾語が多すぎるために、これに規制されて、教科書のペースですすむ可能性が大きいのではないだろうか。

一例をあげてみよう。⑦で「たがいに助け合い、信じ合うなど」を「たがいに意見を述べあい、一致する場合もあるが受け入れられないこともあることを知るなど」としたり、「明るくなごやかな社会」を「時代を切り開く社会」などとした場合、子どもたちが受けるものはずい分変わってこよう。そして、家庭は、いつも平穏なわけではなく、葛藤や深い苦しみをかかえることがある、ということも改めて理解することだろう。

「家庭のはたらき」は簡潔な表現であれ、修飾語をつけた表現であれ、その一つ一つは同じようなことを述べているようでも、修飾語を付すことで客観的な事実からはずれて一定の方向性を与えることができる。客観性を装いながら、一定の価値観を織りこむこともできるのである。私たちは、科学と道徳とは全くちがうことを認識し、そのことに敏感でありたいものである。

# 男性学への契機

魔男の宅急便

■諸 橋 泰 樹

## さらば息子は愚連隊

日中、電車に乗っていると、中学生の親とおぼしき女性たちのグループの、大きな話し声に接することがある。聞くとともにしに聞いていると、会話内容のほぼ100パーセントが、自分たちの子どもが進学校にかかわっての、ほとんどカタログ的ともいえるべき校名や偏差値の乱舞と子ども(特に息子)自慢だ。あそこの付属は偏差値が急上昇しているそうだ。都立高へはやりたくない、浪人確実だから。いや、今でも、某都立高は偏差値が66で今年は東大に32人入っているのだから、何故なら「主人」もそこから東大へ行ったので……。いやはや。「娘自慢」でなく「息子自慢」という、親のもつ期待の基準の性別による差違もさることながら、カタログマニアのように学校情報に踊らされる上流校指向の発想・意識が、どれほど現在の学校化社会を支える主要因となっていることだろう。往来で徒党

を組みはしないのでよく知られていないが、こういった傾向は母親たちだけの専売特許なのではない。一流校指向が他者との比較関係の中で心理的見栄・地位的(結婚から職業、階層まで)差別化、究極的には他者の服従という「支配の政治学」にかかわっているとすれば、これは父権論的領域ともいえる問題であり、それゆえ男性学が批判的対象とすべき事象でもある。ぼくの感触では、より社会化の度合いが強い——学校化・会社化されている——男性ほど、権力の道具としての有名校・能力神話にとらわれているようだ。

ぼくのもと父は、他人に見せびらかすための有名校、という価値観の持ち主で、表向き、人は学歴や校名で測れないという民主的、えせいンテリのマスクを着けていたが、他者をそれによってラベリング(レッテル貼り)することを実際にしており、息子にも、世間的に通りのよい学校に入ることをおまえのためと称して強制してきた。会社で、地域で、身の関係で、息子が一流校に通うことは、自分のステイタスを補強かつ高める重要なファクターなのである。

小学校二、三年生ごろのことだ。学校で知能テストがあるという。もと父親は、通常ルートでは人手することは困難だったと思われる知能テストをどこからか手に入れてき、当日の早朝、ぼくにテストを施した。親バカと、他人指向の見栄と、知能テストを「事前演習」しても無意味ということ、そ



して、知能テストそのものを人や能力を測る尺度と盲信しているという四つの意味で、まことに愚かというしかないのだが、この時は、「何の準備もしなくてよい」という教師の言いつけを守らぬ自分への後ろめたさと、父親への不信感とを抱いた。登校前、寝ぼけまなこでテストをやりながら、父親が時計の秒針を見て「始め」とか「終わり」とか言っていたのを思い出す。ボカの多いぼくは、やるべき問題をまるまる一行飛ばしてしまったりもしたものだ。彼がその場で「知能指数」を算出したのかどうか記憶にないが、多分、そのあと会社などで出したのではないだろうか。そして、家でやっただなどと学校で決して言わぬようにと釘をさされ、ぼくはそれを守った。「教育」については、万事がこのようだった。これを「教育熱心」「子への愛」と言えるだろうか。

この春、テレビタレントの父親が息子を大学に入れるべく「替え玉受験」を画策したことが公となり、世間の父親を内心ギクリとさせた。子ども（Ⅱ息子）に学歴、しかもより「有名校」を望むのは、そこに、この子にはこの比較競争・上下社会で人よりも優位に立ってほしい、という意識が働くからだ。それ以上に、「有名校」に子をやる親、という世間的評価で「栄光」に浴し優位に立ちたい、という意識も働くからだろう。前者は「親の愛」や「親の情」として心情的に共感されやすいが、後者を人はなかなか認めたがらない。

社会学者のパーソンズは、核家族内における父親のパーソナリティーを、手段的役割を持ったものととらえ、母親のそれを表出（Ⅱ緊張緩和・調停）的役割ととらえた。この考え方は、男女の性役割を固定的にとらえている点で、採用は慎重でなければならないが、性役割の相対性・流動性を前提とするならば、男性学のキーのひとつともなるようにも思われる。ぼくのもと父、タレントの父、いずれの父親のあり方も、社会の中の自分の家庭を維持し、優越した階梯を昇っていくための、技術的・経営的な側面を担う手段的なものであったし、そしてまた、父―息子関係では、裁判官的な手段的優位性を行使していた。問題は、母親もまた、息子に対し、同様の役割を担うようになってきたことだろう。冒頭の母親たちの会話や、テストの点が下がる度に小遣い額を下げた母親の例がそうであるが、「親」がどのような形態をとるにせよ、手段的役割と表出的役割が流動的に相補って働くことが望ましいのではないだろうか。父、母二人して息子を責めた一柳展也君の事件は、母の表出的役割を放棄しての手段的役割化によって逃げ場を失ったために起こったことのように思えてならない。ぼくのところも、多分に母もまた手段的であったから、それがよく解るような気がする。

このような中で息子（Ⅱ男性）が育つというのは、しごく大変なことなのである。

# 橋元の夢

## 核家族の未来

武田 秀夫

——このごろ妻が、どういうわけかしきりにきくんだよ。「ねえ。死ぬまで一緒にやってみく？」って。

同年輩の友人が、こんなことを言い出した。

——そんなことを言われたら、男はだれだってドキッとす。でも、相手は冗談のように軽い調子できくから、こつちも知らん顔して、「なんだ、急にそんなことを言い出して。どうかしたのか」と、まあ、そんな答え方をする。新聞なんぞを見てとぼけている。が、それで引き下がる相手ではない。

——それは、そうだろう。

——「あ、はぐらかした。もう一度きくから、ちゃんと答えて。いい？　死ぬまであたしと一緒にやっていく気あるか」と、こうだ。お前だったら、どう答える。

——ふむ。それはキビシイ。

——キビシイだろう。そんな質問にまともに答えるなんて、できるわけないよなあ。

——できるわけない。「いまのところは、そのつもりでいます」なんてこたえたら、かえって敵の追及に油を注ぐようなものだしなあ。

——しかも、くすぐったがって逃げ回るところを、笑って追いかけながらさらにくすぐりかかるような調子の底に、妙に真剣なものが加わっていく。目も心なしか光ったりして。わかるか、そういう感じ。

——わかる。ほら、子どもが小さいころ、膝に抱いてコチョコチョなんて、くすぐって遊んだらう。子どもはキャッキヤ笑いながら身をよじって、父親の腕からのがれようとす。それを抱きしめてさらにくすぐっているうちに、こつちのくすぐりかたに妙に真剣なものがかもってきて、ふざけていたつもりな

のに、はたの者の目には、本気で子どもをいじめているようにも見えかねない不穏な感じがつのっていく。子どももなんとなくこわくなるらしく、最後はおびえて泣き出す。あの感じだろう。

——そう、それだ。笑ってさらに追及しにかかる妻がいつ泣き出すか、いつ叫び出すか、一触即発の剣呑な感じがそこはかとなく纏綿して、こちらはおびやかされたような気になる。まともに付き合うと危ないと、本能が知らせる。で、おれは煙玉を投げて煙幕を張り、逃げるが一手、逃げ逃げ天下を取る家康のひそみにならおうとする。「何を言ってるんだ。いまさ。何年夫婦やってんだよ。」

——アハハ……。へたな逃げ方だ。

——全く。敵もさる者、引つ掻くものだ。そんなチャチな煙幕なんか手もなくいくぐって真直ぐに迫ってくる。

——やあ、川中島の謙信だな。

——「また、そうやってごまかす。その手はもう桑名だよ。もつとまじめに答える。いいか。汝は、この私と、死ぬまで一緒にやっていくつもりか否か、天地神明に誓って、どうだ、どうだ」

——四半世紀前にやった結婚式の、あの誓い

のことばの悪しき再現を迫られているわけだな。五十になって。で、どうした。

——しかたがない。おれは俄然として反攻に転じたよ。窮鼠猫を咬むさ。「そんなこと、当たり前だ。結婚したときから、そのつもりさ。おれは、結婚すると決めたときに、別の可能性をきっぱり断念して、この関係に賭けたんだ。閉じることによって開こうとな」そう、おれは大見得を切った。「それがおれの倫理だ！」

——油田の火事をダイナマイトで消す手だな。で、おさまったか、奥方の火事は。

——「ふーん、ずいぶんカッコいいこと言うねえ」と疑わしげに笑っていたが、「まあ、今日のところは勘弁してあげよう」と、鉾をおさめてくれた。

——やれ、やれ。

やれやれと笑いはしたものの、私は身につきまされた。友人の妻は、「ほんとうにこれから死ぬまで私と一緒にやっていくつもりならもっとちゃんとしなよね」と言っているのだ。私も、このところ、妻から同様の問いつめ方をされている。

「ちゃんとやってるじゃないか」

私は答える。

「それでちゃんとやってるつもり」

「そうさ」

「甘いなあ。考え方が」

妻は溜息をつく。

（もし、そのつもりなら、今すぐにでも、もっとちゃんとこの私と向き合ったらどうなのだ。「やるべきことが他にまだまだある。おれはグローバルな世界と向き合っているんだ」なんて、逃げないで）

妻は、そう言っているのだ。  
（二十数年もとにかく夫婦をやってきたんだ。黙ってこれからも時の流れに任せてうま

く年をとっていけば、おのずから「好人好日」といった穏やかな夫婦の晩年が恵まれる。そう、男のお前は考えているらしいが、そんな甘いものではない。もっとずっと脆いものなんだ。夫婦なんて。昔ならいざ知らず、今は、よっぽど意識的に努めないと、保たないんだよ、夫婦なんて。そうなってしまっているんだよ、いまどきの夫婦は。男のグローバルイズムとかなんとか言ってる間に、男の足もとが崩れかけているんだよ。それが分からないのかなあ）

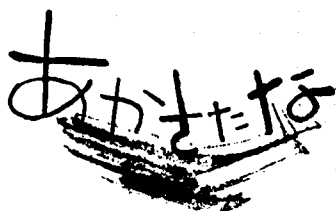
友人のところもそうだが、私の家庭も核家族だ。係累をできるかぎり断ち、そのうえで

新しい人と人との関係を、内と外に、自分たちのイニシアチヴでつくりだそうとしてきた。それが今、どうだ。娘二人も育ち上がり、気がついてみたら、五十を過ぎた私と五十を前にした妻とが裸のまま残され、さて、これからどう生きていったものかと、互いの関係を見つめ合っている。

そして妻は私に、これからはんとうに、死にいたるまで、二人でもう一度新たな楕円を描いていくということではないんだねと確認を迫っている。私はその問いかけを前にして、とつおいつしている。

妻と私と、結婚後二十数年にして再びむき出しになった二つの焦点。その焦点に鋭く針を立て、たるみなく緊張した糸を張って、新しい楕円を描く。楕円を描くということは、ひとつの創造だ。だが、それは同時に、二つの焦点を楕円の内部に閉じ込めるということにもなりかねない。へたをすれば、二つの焦点が、一つの点に吸収されて、退屈な同心円を描くことになりかねない。

楕円を二人で描きながら、関係を閉じず、関係を、内と外に開きつつけていくにはどうしたらいいか。私はとつおいつしている。逃げていただけではないつもりなのだが。



え・加藤由美子

ぶん・福田 緑

—先生、ヒゲが生えてる—

「宿題はやってきたかな？」

「うん」

「よし、よし、毎日がんばったんだね。それじゃ、フンワリホットケーキの舌の練習をしてみようね。ハイ、お口を閉じてフワッ」

「お口を閉じてフワッ、二回」

「お口を閉じてフワッ、三回」

.....

「お口を閉じてフワッ、十回。すごく上手になった！」

「先生、ヒゲが生えてる」

「.....」

ショックでしばらく口がきけなかった私ですが、その後おかしくしておかしく涙が出る程笑いころげてしまいました。

哲也君とは、今年の四月からのおつき合いです。一年生ですが、側音化構音といって、舌の動きに独特のクセがあるため、息がわきかちまわっています。哲也君は「ち」と言っ

ているつもりでも、まわりの人には「き」と聞こえたり、何と言っているのか聞き取れなかったりします。

そこで、哲也君も、まず舌の緊張をとる練習から始めました。舌を上下、左右に動かしたり出したり引っこめたり、グルグル回したりする「舌べろ体操」をしてから、フンワリホットケーキの練習です。力が抜けた楽な状態で「エ」の形に舌をフワッと出してみます。哲也君は舌に段々力が入っておせんべいのように固くなりがちなのですが、この日は十回続けてもフンワリしたままでした。

「お、今日は良いぞ」とうれしくなっていた私。その私の顔をま近に見て、「先生の顔にヒゲが生えてる」とうれしくなっていた哲也君。参りました。子どもの目って、どこを見ているかわかりません。

でも、考えてしまいました。涙が出るほどおかしなのに、汗をかくほど恥ずかしい。こ

の恥ずかしさはどこから来るのでしょうか。

男の人が多少ヒゲが伸びていても特別どうということないのに、「うちの女房にゃヒゲがある」ということばの中には女らしさの否定が含まれているような気がします。ふだんから心とからだのあるがままに生きたい私はジーンズに運動靴、ナップザックをしょって、ノーメークで通勤しています。ヒゲもわざわざそりたくないから放っておいただけなのですが、やっぱり哲也君に指摘されると恥ずかしくなり、その夜一生懸命カミソリをあてたのでした。

気にし始めれば顔のシミだって、シラガだって、シワだってたくさんあります。ふだん開き直っているつもりなのに、小さな男の子の一言で揺らぐ私。ずい分痛いところを突かれたのかもしれない。薬や科学物質を使ってごまかすことはしたくない。でも、哲也君に会う火曜日は、ついつい鏡をのぞきこんでしまうこの頃です。



## グループ・女の人権と性

〈金佳 典子〉

過去二度にわたる優生保護法「改正」による中絶規制の動きは、女性たちに大きな不安をつきつけた。妊娠する機能をもった女性にとって、望まない妊娠を一〇〇％避けることは不可能なのに、「中絶は胎児を殺すこと」という非難の刃を前に、私たち女性はやり場のないジレンマに立たされてきた。

家族計画連盟主催の、「女の人権と性・優生保護法と墮胎罪を考える―連続シンポジウム」(一九八三年)を準備する過程で、産む性をもった女性をこのジレンマから解放し、墮胎罪、優生保護法を廃止して産む産まない(中絶)の自己決定権を保障するような制度をつくりだしたい、という共通の思いで生まれたのがこのグループ(メンバー十人)である。

中絶の自己決定権を否定している根本が墮胎罪と優生保護法にあることに確信をもつに私たちは最初の一年を費やした。以来、人工流産剤、生殖技術、中絶時期短縮、出生率低下などの問題をテーマにシンポジウムを開いたり、本をつくるなどの活動をして今日に至っている。そして、昨年十月よりやく、当初の最小限の目標であった「提言・私たちが望む法律と制度」(パンフレット『リプロダクティブ・ヘルスを私たちの手に』一冊八百円)をまとめた。

《連絡先》

〒170

東京都豊島区東池袋1の45の11 メゾン  
金子202 婦人協同法律事務所気付

## 自己紹介するイキイキ

### フィンレージの会

〈池田 悦子〉

90年の春から秋にかけて『不妊』(原題は“infertility”, ナーテ・クライン編著)の翻訳作業を行なったのが、活動のきっかけ。生殖医療の中で、女からだと心がどれほど傷つけられているか、そして全く情報も与えられないまま、どれほど多くの女性たちが危険に身をさらしているのか。世界中で不妊治療実際に受けた女性たちが、初めてその体験を声にした本だ。この本を訳すために集まった私たちは、作業をすすめるうちに、自分にとって「産む」あるいは「産まない」ということはいったいどういうことなのか、自分に対して突きつけられることになった。そして「産みたいのに産めない」ということが、現実の中でいかに一人の女を苦しめ、疎外していくことになるのかということも。一月に晶文社からこの本が出版された後、全国各地から不妊で悩む女性たちの手紙が会に届いた。私たちができるまず第一歩として、ニューズレターをつくり、不妊の女性たちのネットワークづくりに役立ててもらおうと思っている。去る六月一日には初めての交流会を開き、自助グループづくりの可能性について話し合った。新生殖医療に抵抗する国際的フェミニストグループ“FINRAGE”のニュースも邦訳し、紹介していく予定だ。

《連絡先》

〒153

目黒区中目黒1の4の18 サングリシア中  
目黒401 大島方 フィンレージの会

# 買うて来て使う

■山本謙吉

## 花の種

買うて来て使わない物がどのくらいあるか。そう思いついて、たんすに本棚、押入れ、台所、と眺めまわしてみた。

たんすには着ない服。年に一度着るか着ないかの白いカッターシャツ。はけるからはけばいいのにはかないズボン。これなら着れるよと言って譲ってもらったけど、一度も着なかったボロシャツ。十年間ハンガーが着ていたオーバー。

台所には器のかずかず。使えばきつとレパートリーも増えるのにめったに使わない、フライパンと食用油。いろんな利用の仕方があるだろうのに使わない圧力鍋。湯呑、皿、水切り袋、コーヒーフILTERペーパー。缶切りがないから、缶詰はもらったら増えてゆく一方。電気加温台。電気天ぷら鍋……有難いことにそれらのほとんどが友達や知り合いからもらったものだけど、悲しいかな使わない。

毎晩おなかが空くと、とにかくは味噌汁か佃煮でしつかりごはんを食べる。おなかがふくれたあとで、運よく材料があつて、たまたま気が向いたら、大根や菜

っ葉の煮物をこしらえたり、大根蓮根ごぼうカレーをつくったりする。僕のひとり暮らしはせいぜいそんな具合だから、ひとりでは料理をつくれないう人、料理をつくらないう人の分も毎日調理している人の苦勞はわからない。ただ、誰かに御馳走になるというのは、これはもうこれ以上ない幸せと言えるかもしれないと思う。すると、明くる日のごはんは味噌汁が、これまたおいしい。

使わないものは押入れと本棚にもある。あれば便利だが、めったに使わない、必要なときには借りることもできる物。あるいは何か理由があつて、しまいこんでいる物。家中のそういう、僕にとっては死蔵の物でも活用してくれる人がいれば……。僕はごそごそし始めた。散らかしているのか、片づけているのか、部屋中が物で渾沌としている頃、一通の封書が届いた。

石けんコンサートの帰り道、金森弓束さんが「誕生日何が欲しい？」とたずねた。「もう物は欲しくない」と僕は答えた。封を開くと、白ごまの洗いごまくらいにつぶつぶの入った、透明の小さな袋がでてきた。

「きのう、一晩中考えて、種をプレゼントすることにしました。どんな花が咲くかは、育ってからのおたのしみ。

ゆづか

(完)

## 二十世紀末

半田 たつ子



昨年「合計特殊出生率」は、一・五三と前年の一・五七をさらに下回り、一年間に生まれた赤ちゃんの数も人口千当たり九・九と初めて十を割ったことが、六月六日、厚生省発表の人口動態統計で分かった。六月十四日には、政府の「臨時脳死及び臓器移植調査会」が、脳死を人の死とし、臓器移植を基本的に容認する中間意見をまとめた。

人間の生と死という「聖域」に、国の政策や企業の思惑、医学者の功名心などが踏込む。前者については、一年前の「一・五七シヨッ

ク」以来、女性の異議申立てが活発だが、後者について女性の発言は、まだ少ない。

昨年の五月二十日だったと思う。アメリカで肝臓の移植手術を受けた野村氏のレポートを、テレビで見た。病気を直したい一心で、より優れた医療を求めて、アタックし、チャレンジする人と、それを支える家族や医療スタッフの姿勢に励まされた。しかし、アメリカで、自分の条件に合う肝臓をひたすら待っている野村氏が、救急車のサイレンを聞くと「私のドナーか!」と期待する、と聞いた時、ああ、そういう問題をほらむことなのだ、と思った。また野村氏がアメリカで治療をするための(額は忘れたが)莫大な費用にも、驚き、考えさせられた。私の母は、昨年の五月から末期の腎臓病で入院し人工透析をしているが、かつては人工透析の施設を持つ病院は少なく、保険もきかなかった。そのころは「人の命も金次第」がまかり通っていた。医療のめざましい進歩とこれに伴う社会制度が、人の命を救う、その恩恵に浴しながらも、開かれた場でもっと深く論議を重ねなければならぬことが、山積していると思う。

国策によって、子供を産まされたり、制限させられたりすることに、女が怒りまくるの

は当然だ。まなじり決してノン! と叫ばなければならぬ。だが、その視点をずらして脳死に向けた時、私たちは簡単に賛否を語れるだろうか。「産む・産まないは女が決める」と言い切った人も、「脳死は死か否か、女が決める」とは言えないだろう。死に至る人の看とりを、ほとんど女がしていても……。

脳死臨調の中間意見が発表された六月十四日、NHKミッドナイトジャーナルは「特集」で、この問題を取上げた。徳島大学の生命倫理委員会の齊藤氏が「密室の審議では、そのプロセスや、結論に結び付く理由が分からない。専門家が決めれば、みな納得というものではない。一般の人と一緒に考え、参加できる仕組みが必要」「徳島大では十年も前から公開してきたが、困ったことは何もない」と言われた。

「各大学の生命倫理委員会も様々で、原則論ばかりやっていて一人一人の患者についての対応が不十分。慎重審議をしすぎて保守的になっている」「アンケートをとったところ、委員会のチェック機能は、担当者の自主的判断に委ねるところが51大学、定期的に報告させたチェックするが15、必要に応じて報告させるが5、だった。チェック機能が働かない



と危ない」と。各大学とも、委員は学内から9〜10人、学外から1〜2人で、女性はやや多いことだ。ここにも改善しなければならぬ問題が残されている。

小出解説委員は「医者の世界は外には見えにくい、先進国・最先端の医療の問題がますます大きくなっていく今、医学の進歩と生命倫理委員会とは、車の両輪のように進んで行っている。この委員会が、人間としての新しい価値観をつくって行くものであつてほしい」としめくくった。

六月二十日の朝日新聞は、ルーマニアの赤ちゃんが、養子という形で欧米に売られていることを、写真入りで報じた。その数は、今年に入つて約四千人。もうかる「商売」だといふ。チャウシエスク時代の無理な人口増加政策の後遺症である。

人間って、いったい何なのだろう？ 小学校五年で自死してしまつた杉本治君は、四年の時「雨も二十一世紀になれば／雨をふらしたければ／ボタン一つで／雨が自分の家だけふる／そんなことになる前に／雨、緑のしぜんをあげよう」と書いた。ボタン一つで自分の家だけに雨を降らせるのが、私たちが享受している文明なのではないか。この価値

観を転換させられず、歯止めさえかけられないままに、文明を発展させていいのだろうか？

こんなナーバスな気持ちになっている時、恐ろしい本を読んだ。カナダの女性作家マーガレット・アトウッドの『侍女の物語』（新潮社）である。

ジョージ・オーウェルは48年に『一九八四年』を書いた。アトウッドは、この物語を85年に出版した。以来ベストセラーリストの上位を走り続け、幾つかの文学賞を受け、彼女は一躍「時の人」になったという。内容は、『一九八四年』の姉妹編ともいうべきディストピア（反ユートピア）としての未来である。

二十一世紀の初めごろだろうか、アメリカに、キリスト教宗派間の抗争の結果、クーデターによつて独裁国家ギレアド共和国が生まれる。エイズや環境汚染などが女たちの生殖意思・能力を奪ひ、出生率が著しく低下する。この文明的危機に対応するため、国家は、恐怖政治の下、女たちの性と出産を完全に管理する。女性は子供を産むための道具としかみなされない。女主人公は、妊娠可能な子宮を持った「侍女」として司令官の家に派遣される……。この暗黒社会の身の凍るような恐

怖は、小説で読んで欲しいが、女性作家の想像力が、こういう世界を構想する時代に入ったのだ。

「訳者あとがき」に、この小説が大反響を巻き起こした理由は、ベルリンの壁、物資と自由の乏しい東欧共産圏の社会情勢、ルーマニア・チャウシエスク政権下の中絶禁止など、現実の社会を喚起させる不思議なリアリティを持っていたからか、とある。

作家の想像力といえ、富岡多恵子は、83年に講談社から出した『波うつ大地』で「既成の『男』『女』の役割から登場人物を解放しよう」と試み、「女がコードモを生む理由を失つた」時代の男と女の関係を暗示する。

私たちも既に、84年春の公開ゼミナールで性別役割分業のない社会とは？ を語り合っている（84年七月号参照、残部少しあり）。富岡多恵子より私たちのほうが楽観的だ。

人間がうろうろしている間に「社会システム」が音を立てて変わっていく。確実な座標軸を持たないと足をすくわれる。それにしても後世（があったとして）の歴史家は、二十世紀末―この時代をどう書くのだろうか？ いま、女と男がした選択は、幸福を招くのだろうか？

# We 夏季フォーラム — 分科会・交流会のご案内

八月三日(土)はシンポジウムをはさんで、分科会—8、交流会—4が予定されています。内容と担当者は、以下のとおり。日帰り参加も大歓迎です。(詳細は事務局 03-3326-1380 までお問合せ下さい)

## 分科会

8月3日  
a.m. 9時から

### 女の解放・男の解放パートII

板本洋子さん(日本青年館結婚相談所・著書『現代結婚事情』他)と星建男さん(保父・「アジアの売買春」に反対する男たちの会)をお呼びして、アジアと日本、都市と農村といった視点から、女・男の問題を考えたい。

武田 秀夫

### 2 親と子が水平に向き合うには

— 母子幻想からの逃走 —

女が自立して羽ばたこうとする時、子育てや夫をプラスの要因にする道はあるのか。母

性社会で男が家族の人間関係に求めるものは何か。親と子が他者としてノビノビ出会う方法を愉快なおしゃべりからさぐりませんか。

森本 邦子

### 3 シングルのメリット、デメリット

結婚しない女や男が多くなる一方で、高齢者の单身世帯もまた確実に増えています。これからは、好むと好まざるとにかかわらず、シングルの時代。家族幻想にサヨナラして、個の自立の問題に楽しく迫って行きたい。

吉田 清彦

### 4 どうすすめる

どうすすめさせる、家庭科男女共学

「日の丸・君が代をやめて」全国各地で親・地域市民が学校へ働きかけをし、成果をあげました。

この闘いに学び、家庭科の共学問題でも行動を起こせたらいいな。

根津 公子

### 5 こんな家庭科をやってみたい

学校に「？」のあなた。家庭科教師じゃないあなたも、語りあってみませんか。

自立した女と男を。人間らしい生活を。

差別のない社会を。家庭科の時間は育み創り出すひとつのチャンス、参加してみませんか。

青谷 薫

### 6 みんなにやさしい老後環境

— 北欧を歩いて —

昨夏、Weの仲間三十名とともに、北欧を八日間歩いてきました。老人福祉の現状視察を中心に、障害者家族や男女平等オンブズマン

での話し合いもできました。

それらをスライドを見ながら報告します。

立山ちづ子

## 7 葬送の自由から女性・

環境を考える

八王子に住んで、まわりの山がどんどん墓  
地に変わるのを見てきた人見達雄さん。「死  
んでまでまた環境破壊する人間に、大きな  
『？』」がスタート。男女共学家庭科もつき当  
たる現代の墓問題いろいろ。さて、打解案は  
？！

若竹キミイ

## 8 「違いと向きあう」ってなんだろう

— 気づいたらインタビュアー —

教師が情報を一方的に流す「教育」を変え  
よう。教える（普及する）側・教えられる側  
という固定的な関係を「インタビュアー」の技  
術を通して変えよう。個と個が向き合うとは  
一体何であるのか」を一緒に考えてみたい。

平井 雷太

# 交 流 会

8月3日 p.m. 7時から

### 1 藤田進さんに聞く

アメリカによって仕組まれ世界に同時中継  
された湾岸戦争。国際協力・貢献を名目に参  
戦し戦費負担・掃海艇派遣・PKO参加と海  
外派兵・改憲へと進む日本…。こういう問題  
の根底にあるものを、藤田さんに聞き出しな  
がら、ともに考えよう。

半田たつ子

### 2 CMの中の性差別と

メディア教育の可能性

親よりもガッコのセンセよりも子供たちに  
大きな影響を与えるといわれるテレビや雑  
誌。「CMの中の男女役割を問い直す会」が  
編集したCMビデオを見ながら、学校や家庭  
におけるメディア教育の可能性について考え  
て行きたい。

吉田 清彦

### 3 アジアと私たち

「アジアからの労働者の子どもたちが日本の  
小中学校に在籍するようになる時、行政や学  
校はどう受け止めるのか」。昨年の分科会で  
の提起や、昼間のシンポジウムでの提起を受  
けて、語り合いましょう。

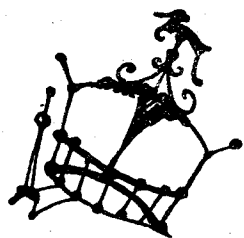
根津 公子

### 4 家庭科スクランブルトーク

くらし混沌、かていか混沌、きょういく混  
沌、わたし混沌……。  
単純に何かを目ざしていた時には、こうじ  
やなかった。何かを考えたからこそ、いま混  
沌。混沌にめげない力を家庭科で！ 何に根  
ざすかを語る時間です。

若竹キミイ

We  
なんでも  
言おう  
なんでも  
聞こう



◆六月号が届き、「なんでも言おう」欄の私の文を読み、あの時の気持ちから、少しばかり遠のいている自分を恥じています。

それと言いますのも、子供たち三人が同時に幼稚園に入園したことで、私も学校に通い始めたことが重なって、時間的余裕がなくなつたためか、もともと心にあつたもやもやがますます大きくなってしまったようなのです。

私の落ちこんでいる理由といえますのは、半田さんもお話に来てくださった新松戸女性講座を通して、再びフェミニズムに目覚め、私の「今の生き方」に、どうしようもない欺瞞を感じているということです。あの講座を機会に、これから私の生き方として、男女平等の世の中に一歩でも近づけようとする運動

にかかわっていききたいと決心し、できることから行動を起こそうと、例えばWeのフォーラムに参加したり、女性講座の仲間とも学習サークルを作ったり、本を読んだりしています。

しかし、フェミニズムの運動にかかわっていかうと思う気持ちが強まるほどに、二つの大きな問題が、心に重くのしかかってくるようになりまして。

一つは、先にも述べました私の生き方に感じる欺瞞です。つまり、私自身、内容はともかく、世間的には専業主婦で、性別役割分担の女役割をしっかりと担いながら、固定的な性別役割分担をなくさなければならぬと主張するのは、自己矛盾以外のなにものでもないと感じるのです。

Weに特集された子供たちの考え方を見ても子供たちは、両親の役割分担をそのまま受け入れて育っていくというのが、よくわかります。確かに私自身の子供に限ってみても、私が家庭で女役割を実践している以上、女とはこういうものと思ひ込んでも当然です。さらに私がフェミニズムの運動へのかかわり方として、教育の場での男女平等をめざすための運動をしていきたいと思っていますが、例え

ば「女も自立心を育てるために、いつも男の後ろからついていけばいい」といった習慣を植えつける男女別名簿は、やめなければならぬ」と主張したとしても、私自身、現在自立していないのでは、なんの説得力もないのではないかと思うのです。

この運動は、すべての女性が経済的自立を果たすべきだと強制するものではない、ということは分かっているのですが、自分が実践もしないで、フェミニズムを主張するのはまちがっていると言えないまでも、心にひけめというか、ひっかかりを感じます。『主婦論争』などを読みますと、武田京子さんの「主婦こそ解放された存在」とか、上野千鶴子さんの「えんじょいす」となど、今の私の状況にぴったりのものがあります。ただし、いくら主婦で活動家がまかり通るといっても、環境問題とか平和問題ならともかく、フェミニズムは無理だというのが、いろいろな本からのメッセージでした。

今、私が働かない理由は二つあります。一つは経済的理由で、三人の子供を保育園に預けると、私がよほどの高給取りにでもならない限り、大幅な赤字になるということです（保育科だけで20万近くします）。

もう一つは、これも私の現状認識の甘さが一役買っていますが、どうせ仕事をするならやりたい分野で、などとぜいたくなことを思っているものですから、今は技術を身につける期間にしているということです。週二回お茶の水まで通っています。だいたい二年くらいで、やっていけるかどうかの結論が出るようなので、うまくいかないようなら、いさぎよくあきらめもつくだらうから、とりあえず後であの時こうすればよかったと悩むことのないようにと思っています。つまり、この年になっても、あいかわらずのモラトリアム人間なのです。

実際このように書いて「そういう事情なら仕方ないから、居直って運動してもいいのではないか」とか「今は充電期間とあきらめて、仕事についてから運動を始めたら」とかそういう言葉が欲しいだけなのかもしれない。私としては、とりあえず、専業主婦でもこの運動を続けていけるという結論がほしいのです。それは、欲しいものはどうしても同時に手に入れないかもしれないという、わがままにすぎないのかもしれない、という気がします。それに、いろいろな場面で職業は？ と聞かれて、自分の自立さえてきてい

ないのに、他人の自立を言う自分に、自己嫌悪を感じなければなりません。こんなふうにわがままと見栄と甘えの間でくよくよ悩んでいます。

もう一つの落ちこんでいる点というのは、フェミニズムの運動の遠さと孤独感といったふうなものです。つまり男女平等を願っているのは、ごくごく少数で、女の人でさえ、たいていは、こんなことに気がつきもしないし、願ってもいない。しかも世の中は、相変わらず、男、男、男……のオンパレードだということなのです。

今はこんな状態で「男女混合名簿の運動」も、今一つ進展していません。一度、二月に「松戸市女性計画」にこの問題をとり入れてもらおうと、要望書を出し、この運動を進めるための仲間を四、五人集めただけです。また六月から、改めて学習会から始めていこうと思っています。

いずれにせよ、迷いを整理し、元気を仕入れ、理論を身につけるために、この五月からPARC(アジア太平洋資料センター)の「フェミニズムが問う日本社会」の講座に週一回通っています。ここでも仲間が見つけられればと期待しています。(松戸・小山尚子)

◆6月号、興味深く読みました。シュタイナー教育については、大学時代、子安さんの本(中公文庫)を読み、おもしろいなあと思っていたので、Weで取り上げられてうれしかったです。

私は養護学校に勤めています。四月から小学部三年の副担任となりました。昨年度は中学部でした。ギャングエイジという言葉がびったりの三人と「自閉症」の子、そしておしっこの自立がまだできない、重度といわれている子の五人です。

おしっこでぬれたパンツを替えたり、給食を手で食べようとすることを止めたり、ギャングエイジの三人は、何を言っても「いや」としか言わないし、もう!! と思いつつ、ブツブツ言いながら過ごしています。やっと、少し子どもたちがかわいいな、と思えてきたところです。(福井・安川早苗)

◆官製の研究会で'94年の男女共学家庭科に向けて研究班をつくり取り組んでいます。私は将来構想委員会に入り、「情報」を選びました。Weでもたびたび話題になりましたが……。研究班では、まず資料を集めながら勉強しようということで、昨年の夏増刊号をみなに紹介しました。(大阪・浅井由利子)

## わたくしから あなたに



### ◆大阪府に初の女性部長が誕生！

府立婦人会館長の津村明子さんが、生活文化部長に就任しました。三年前NHK大阪放送局ディレクターから府庁入りした方で「女性が生きてできる町づくりを」と意欲十分。「女性職員はいま特定の部署に偏り過ぎ。広い分野で活躍できる、突破口の役割を果たしたい」との抱負が新聞に載りました。大いに期待できる存在で、ありがたいです。

(高槻・楠崎ルリコ)

◆読者のみなさま、お元気ですか。今日は、手作りの本を一冊紹介いたします。

『ふるさと唐子のくらしと遊び』Weに連載した「たべもの文化史」でも取り上げましたが、子どもが通った小学校のPTA活動の記録をまとめたものです。

読書部の父母たちが、地域の暮らしについ

て、古老に聞いたり調べたりして、一年に一冊ずつ絵本にし、それが十年続きました。

この本は、はじめの五冊「地域の概要、年中行事、衣食住、あそび、おてつだい」を合本したのですが、暮らしの文化を考える家庭科の教材としても役立つのではないかと私自身は考えています。

残り五冊を出版するために、資金の点で千冊の本を販売するノルマがあります。もし、本を販売してもよろしいなら、「地域の暮らしと文化、PTA活動、家庭科の教材研究」などのテーマで、出張講座をする用意があります(もちろん無料にて)。

ご講入、講演依頼などは左記へご連絡下さい。お待ちしております。

自宅〒355 東松山市上唐子1534

0493・23・5764

勤務先〒196 昭島市東町3・6・33 都

立川短期大学 0425・43・3001

(石川尚子)

◆お百姓が引越すというのは、やはり普通のことではなく、何もかもゼロからのスタート。2メートルを越すかやがぼうぼうの田畑や、桑を抜いて使えという畑ばかり。事を始める苦労を長野のとき以上に、今味わっています。

作れるものも、時期も長野とは全然違い、改めて、ここでお百姓することを学習しています。

でも、あの寒冷の地、佐久八千穂を経験した私にとっては、ここでの作物の勢いには励まされます。野菜づくりはやれ肥料だ、やれ土質がどうだこうだと研究されていますが、そんな人間の浅知恵(?)より、とにかく太陽と雨なんだ——と感激です。虫・鳥による被害も雑草もすごいけれど、虫を食べてくれる鳥、畑に還元すれば土を肥やしてくれる草、それらとともに悪戦苦闘、しつかりやっていきたいものです。

野菜は東京・保谷の共同講入の会と提携して出荷しています。このグループのほかに個人の方には、宅配でお届けしています。

(山梨・仁ノ平尚子)

◆去る四月に、石けんにこだわっている全国の生協など76団体からなる協同組合石けん連絡会が、「シャボン玉全国フォーラム」を大阪で開催しました。これは、毎年全国的に繰り広げている「7月のシャボン玉月間」に向けて研修交流するもので、今年のテーマは「石けん運動と地域社会」森・川・海の連帯」で360余名参加しました。

この分科会の一つに「石けんを広げる―学校教育現場への挑戦」があり、どうしたら学校教育現場で石けんの利用が呼びかけられるかを討議しました。

問題提起として、PTAの行事の中に、石けんに関する学習・実験・人形劇などの企画を提供して成果をあげつつある報告と、私の生協の経験として、家庭科の講師（「We」の熱心な購読者であることを、この日知りました）の依頼を受けて、五年生に「石けんと水循環」の授業をしたことなどをもとに今後の対策を話し合いました。

私たちは、子供たちが日々のくらしの中で、環境問題を考える時、一人ひとりが自覚して実践出来る石けんの利用を、教育の現場でまず教えて欲しいと願っていますが、現実にはそう簡単ではありません。

そこで「We」の愛読者である全国の家庭科の先生方に奮起を期待したいと思います。

「石けん」に関する資料・実験・紙芝居・ビデオ・その他の企画についてご協力・ご紹介をいたします。どうぞ「挑戦」してくださいませんか。

大阪府堺市小代77 泉北生協 河野王子  
☎ (0722) 93-4660

◆私が書いた夏季フォーラム第3分科会「女性と政治」の記録、木谷さんの発言の中から「'91地方選出馬を予定」を抹消するという訂正記事が2・3月に載りました。記事に目をとめた方は少なくないと思いますが、記録を担当した者として誌面を借りてお詫びをしたいと思います。それは木谷さんの発言の記録化を私の誤認のもとに行ってしまった、本人の確認をとらないまま、事実でないことを書いてしまったことに対してです。分科会のメンバーは選挙出馬の意向をかためている方が多く、女性の政治参加について議論が高まった中で記録をしたことが私の誤認の原因ではなかったかと思っています。

「ああいう発言をしていない」という彼女の訴えを真正面から受け止めて、誤認の事実とむきあうまで長い時間をかけてしまいました。辛抱強く待っていて下さった木谷さんに感謝いたします。  
(東京・杉本千代)

◆本来ならギラギラ照りつける日差しなのでしょうが、今日も灰で白っぽくかすんでいます。風が吹く度に、あたりの灰がワッと舞い上がって大変です。

先日はお見舞状、本当にありがとうございました。半田さんからお見舞状をいただい

すぐお礼の便りを書いたのですが、出す前にまた大規模な火砕流……そして土石流の危険………ついに学校も登校できない生徒がふえたので、一週間休校になりました。わが家は勤務校のすぐそばで、このあたりは北側にあたり、火砕流の心配はないのですが、八日の夜は直径1〜2cmの石が降り、昨日はまた土石流の危険のために、すぐ上の地域に避難命令が出て、ちょっとあわてました。避難している生徒が七十数名、交通ストップで来れない生徒を合わせると、百数十名が登校できない状態です。今のところ物質的には困るようなことはありませんが、避難生活が長いといえる人たちは大変のようです。早く山が静まって、もとの水のきれいな静かな町にもどってほしいです。いろいろお心づかいありがとうございます。  
(島原・中村美佐子)

◆プロ教師の会の河上さんの発言を特集した貴誌四月号をお送り下さい。狭い学校という特殊社会に、自らも生徒をも閉じ込めようとする「プロ教師の会」はダメ。教師はむしろ「風呂教師の会」にでも入って、あの狭量な世界でしみついたアカを洗い流すべきだと私は考えます。  
(岡山・岡本隆夫)

# 泉

この頁はあなたと  
私の情報交換の場  
小さなスペースで  
すが、ご利用くだ  
さい。

## ◆第一回江の島読書フォーラム

### 「大庭みな子の男性論」

#### ～男と女の生きる場所～

自然で自由な女と男の関係を提案してきた作家、大庭みな子氏の作品から、新しい女と男の関係について考えます。

・講師 与那覇恵子（東洋英和女学院短期大学専任講師）

・日時 七月三十日(火) p.m. 一時～三時半

・会場 神奈川県立かながわ女性センター  
参加費無料

☆七月二十三日(火)～七月三十日(火)まで、大庭みな子関係図書などをかながわ女性センター図書館で展示します。

・問合先 神奈川県立かながわ女性センター  
生涯学習部 ☎0466-27-2111 内線562

## ◆新学習指導要領スタート直前講座

このほど、「人間と性」教育協議会では、新学習指導要領がスタートする前に、研究会のメンバーを授業者、発表者、助言者とし、どのように授業を作っていけばよいのか、視点をハッキリさせ、展開の仕方、教材の使い方、作り方などを一緒に学ぶ講座を開きます。

・テーマ 月経・射精(1)・(2)／性交／性教育  
いろいろな取り組み。

・日時 十月十二日(土)(星陵会館)・十一月十六日(土)(食糧会館)・十二月七日(土)(食糧会館)・一月十八日(土)(星陵会館)

いずれも p.m. 三時半～六時半

・参加費 六百元 定員四十五名

・問合先 〒183 東京都府中市天神町四ノ十六ノ十 富沢寿美子 ☎0423-61-5173

## ◆'91消費者問題神戸会議の開催について

消費者問題神戸会議も今年で十五年目を迎えます。神戸市消費者協会では、'91消費者問題神戸会議を開催いたします。

・日時 十月二十四日～二十五日

・場所 神戸文化ホール他神戸市内各会場

・テーマ 「豊かな社会の中の消費者の選択」  
内容 部会／実践活動の報告・調査研究の

発表 全体会議／基調講演 シンポジウム  
等

・募集 九月上旬の予定

・問合先 〒650 神戸市中央区加納町六ノ五ノ一 神戸市市民局消費生活課内 消費者問題神戸会議事務局 ☎078-322-5184

## ◆「生と死と、そして超越のためのワークショップ」公開体験参加者公募

このワークショップの性格上、客観的な立場での参加希望を断ってきましたが、要望が強いため、医療職、医療外部専門職、専門的なボランティア等に限定し、特別企画として開催します。個人としての内面的な矛盾、人生上の悩み、職業上の葛藤など意識の潜在にあるものを、鮮明に表在化し具体的なイメージを作り上げて参加していただくことが条件です。プライバシーは厳重に守秘します。

・期間 八月二十七日(火)～二十九日(木)  
・会場及び交通手段 関東方面、東京駅からJRで約一時間

・定員 十五名程度

・参加費 九万円(宿泊費・食費を含む)

・問合先 〒658 神戸市東灘区住吉山手一六  
一二 うらべ医院内ワークショップ係



◆「すすめましょう 男子の家庭科」リーフができました

「家庭科の男女共修をすすめる会」では、主に男子校の先生に読んでいただくことを目的に、みだしのリーフレットを作りました。

内容・家庭科なぜ男女共修に？・男子にどんな家庭科？・設備や教員の確保は？・カリキュラムはどのように？・生徒や親が反発するのでは？という基本的な疑問に答え、私立M校の教育課程表と参考資料です。

費用 無料、担し六十二円（二部まで）切手を貼り、送り先を明記した封筒を同封のこと。

申込先 〒151渋谷区代々木2-21-11婦選会館内「家庭科の男女共修をすすめる会」

◆学習交流会「男子の家庭科」を載せた

「家庭科の男女共修をすすめる会」会報同会では四月六日、みだしの学習交流会を開きました。男子校または、生徒の大多数が男子という高校の教師を中心に、11名の男性教師の参加があり、率直な意見と悩みが語ら

れました。この会の様子を三ページ余にわたって載せた「会報」91年夏号は、少し余分につくりましたので、希望の方に頒けることができます。

申込方法 送り先を明記し、六十二円切手を貼った封筒と、会報の代金一部百円（切手）を同封して、同会事務局（前項参照）へ

なお、家庭科男女共修にかかわる最新情報を載せた「会報」を入手するために、運動の支え手となるために、「会」への入会をおすすめします。年会費は三五〇〇円です。会費は郵便振替（東京0191801）または、百円以下の切手でお収め下さい。

◆市川房枝生誕百年記念事業とテレフォンカードの頒布について

（財）市川房枝記念会では、故市川房枝満百歳の誕生日を記念して、市川房枝の思想・信条・行動・人柄を広く社会に紹介し、次世代に婦人参政権の意義が継承、発展していくことを期待して各種の事業を行います。そのためテレフォンカードを頒布し、その益金を記念事業の運営資金に充てることにしました。

生誕百年記念事業実施期間 一九九二年五

月十五日〜九三年五月十五日まで

。主な事業 出版・展示会・講演会・など。

。テレフォンカードの頒布 市川房枝全身写真と市川自筆の「婦選は鍵なり」の二種類（各五十度数）・カラー刷・一枚千円・二枚セット二千円

。問合せ 市川房枝生誕百年記念事業委員会  
〒151 東京都渋谷区代々木2-21-11  
婦選会館 ☎03-3570-0238

◆本紹介

「白灰」 青柳清子

筆者の弟は、中部電力の社員として浜岡の原発に入り白血病になった。四人の子の育児に追われながら、白血病の実体とHLAの適合検査、骨髄移植などその治療の現実に基づいていく。時あたかも、ソ連ではチェルノブイリ原発が事故を起こし、日本国内でも原発の事故が次々と起こっていた。弟は「浜岡」でなにをしていたのか。（チラシより）  
。四六判・定価七百二十円（税込）・送料二百十円

。問合せ あおやま文庫・青柳事務所

☎03-3831-5331 郵便振替・東京1-40

0938「あおやま文庫」



## 十字路



〈北海道〉「世界宣言に協力を」―国際先住民とアイヌ民族シンポ（北海道5／22）

ギリシャの国際法学者で、国連のエリカ・ダイス先住民作業部会議長を招いたシンポジウム「国際先住民とアイヌ民族―先住権とアイヌ新法について考える」（主催・道ウタリ協会、北海道新聞社）が二十一日、約六百五十人の聴衆を集めて札幌市で開かれた。

二年後の「国際先住民年」に向けて、アイヌ民族の権利を保証する「アイヌ新法」制定の道筋について、世界的視野で考えるのが狙い。ダイス議長は基調講演で、先住民年に国連総会での採択を目指す「先住民族に関する世界宣言」に関し、「草案には、土地、資源、言語、環境などさまざまな権利が盛り込まれている。採択できれば、世界の国家と先住民族にとって、偉大な一歩となろう。みなさんの協力をお願いしたい」と述べた。（高橋芳恵）

〈神奈川〉外国人相談窓口「意外な」人氣（読売5／21）

藤沢市相談情報センターに四月一日から設置された「外国人相談窓口」の利用者がすでに六十件を超え、月十件程度という市の予想

を大きく上回った。就労目的で転入してくるブラジルなど南米人のための窓口だが、こうした人々が日本での生活で各種制度の不安内、生活習慣の違いなどに戸惑い、悩んでいることを浮き彫りにしている。同市の外国人登録者は四千三百八十一人いるが、うち57％が南米人で、この多くは市北部の自動車関連企業で働いている。市は相談窓口の開設と同時に、これらの外国人が日常生活に役立つよう、市民センターなどにゴミの収集の方法、病気やけが、地震時の対応などをイラスト入りで説明したポルトガル、スペイン語のパンフレットを置いている。（青木昭美）

〈埼玉〉「怠け」「登校拒否」を登校拒否原因にしないで（毎日6／4）

埼玉県内の市民団体「子どもサポートネット埼玉」（代表・秋山淳子さん）が、子どもの登校拒否の原因を「怠けによる遊び」や「登校拒否症状」と決めつけた回答項目のある調査はしないで欲しいと同県教育委員会に中止を要望した。問題の項目は毎年同教委が行っている長期欠席児童生徒の中の欠席理由を書き込む欄にあり、病気以外の理由では「怠け

による遊び」と「登校拒否症状」の二項目に学校側の回答が集中している。要望書では、怠けや病気と決めつける調査は子どもの人権侵害にもつながるとしている。

〈東京〉初の三國合同シンポジウム（毎日6／4）

朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）、韓国、日本合同の初の女性シンポジウム「アジアの平和と女性の役割」が五月三十一日、都内で行われ、韓国の尹貞玉・元梨花女子大学教授が、第二次世界大戦中に旧日本軍の従軍慰安婦として連行された朝鮮人女性の悲劇を取り上げ、日本政府が謝罪と償いを行なうよう訴えた。（長谷川宏）

〈山梨〉中三死亡事件 少年を家裁送致（朝日6／5）

甲府市小瀬町の市立城南中三年森屋真一君（14）を死なせた同級生の少年（14）に対し、甲府地検は四日、「突発的とはいえ、殺意はあった」として殺人罪を適用、さらに「少年院送致相当」という意見書を付け甲府家裁へ送致。今後、少年は、送検事実をもとに非公開で審判され、処分が決まるが、過失致死から

一転、殺人罪となり、家族や学校関係者は大きなショックを受けている。(仁ノ平尚子)

「福井」 「町中に処分場を」——解決策探り意見の応酬(読売6/9)

県外から大量のごみが運び込まれている敦賀市の民間廃棄物処分場問題で、市内の市民グループ「緑と水の会」(森本定雄代表)が八日、シンポジウム「ゴミ・コミュニケーション教養」を開いた。参加者らは関東や関西方面から年間七万トンを超すごみが持ち込まれている同市の民間廃棄物処分場を見学。一般廃棄物の埋め立て地は県外からの見学者約三十人に制限され、他の人は「緑と水の会」会員から処分場の現状などの説明を受けながら産業廃棄物の埋め立て地を見て回り、カメラに収めていた。参加者からは、「ごみ処分場は、たいてい山あいの目立たない土地にある。そこにはごみを隠してしまえばよい、という行政や市民の意識が強いように思う。処分場は、だれも見えない町の中に作り、みんな考えなければ問題は解決しない」など、鋭い指摘が相次いだ。(上山悦子)

「京都」学習会 「出前」——原発案じる府民

有志(朝日6/11)

府への請願運動に取り組んでいる「若狭の原発を案じる府民有志」は、今年二月の関西電力美浜原発事故の問題点を分かりやすく伝えようと、学習会の「出前」に取り組んでいる。「いつでも、どこでも、どんな小グループにでも」講師を送り、基本から説明。「伝え、みんなで考えることから、府の防災計画の充実にもつなげられれば」と、出前の注文を募っている。問い合わせは「若狭の原発を案じる府民有志」(711-5865 林方) (塚崎美和子)

「福岡」福岡市「全面的に争う」——生き埋め体罰訴訟(毎日6/12)

福岡市西区の市立荏岐中学校の元生徒(15)が起こした「生き埋め体罰訴訟」で、被告の福岡市は十一日、「全面的に争う」との方針を固め、福岡地裁に答弁書を提出した。元生徒は卒業後の今年三月、母親とともに①教師から誘拐、生き埋めにされた行為②体罰の翌日に丸刈り制裁を受けた行為③違反の学生服着用を理由に登校を禁止された行為——の三点をとらえて、「教育を受ける権利を奪われ、人間の尊厳を傷つけられた」と主張。大穂猛

## 十字路

校長と教師七人、福岡市を相手取り、一千万円の慰謝料を求める損害賠償請求を同地裁に起こした。

同市が提出した答弁書は、元生徒の訴えに対して棄却を求め、具体的項目に対する認否を記述した内容。「認諾はせず、全面的に争う」(法制課)ことを基本姿勢とし①生き埋め体罰は細かな点で事実が違②丸刈りは元生徒も同意した③登校禁止措置ではなく、再登校指導である——として、一連の行為は教育の一環だったと主張する可能性があるとしている。(安倍宣人)

「長崎」防災対策など陳情(朝日5/29)

衆議院内閣委員会の近岡理一郎委員長ら十三人が二十八日県内を訪れ、柴田芳男副知事が雲仙・普賢岳の防災対策に対する国の財政支援などを陳情した。柴田副知事は「県は土砂除去にすでに四億円を費やし、島原市は炊き出しで二千万円を使った。災害救助法の前倒しなどを考えてほしい」と窮状を説明。土石流の土砂の除去を国庫対象事業にすることや火砕流などによる各種災害に対する国の財政支援を訴えた。(中野志保)

# ★「夫婦別姓」判断せず

結婚後も別姓を名乗るために婚姻届を出さずにいる東京都武蔵野市の夫婦らが、長女の住民票の続柄欄に非嫡出子を意味する「子」と記載されたことについて、「法の下の平等を保障した憲法などに違反する不当な差別」として武蔵野市と同市長を相手取り、記載処分の取り消しと慰謝料など約340万円の支払いを求めた訴訟の判決が23日、東京地裁で言い渡された。

涌井紀夫裁判長は、記載処分取り消し請求について、「親たちに訴訟を起こす資格がない」として訴えを却下。「今回の住民票の記載は、国が定めた事務処理要領によっており、職務上の義務違反や過失はない」として棄却した。

原告側は他に「婚姻に際し、夫婦の一方に姓の変更を強調している民法の規定は違憲」とも主張していたが、判決はこの点に判断を示さなかった。(5.23日付 朝日)

# ★セクハラ防止 均等法に規定を

日弁連(中坊公平会長)は24日開いた定期総会で、社会問題化しているセクシュアル・ハラスメントについて、会社などの使用者に対し、その防止と救済を義務づける新規定を男女雇用機会均等法に設けるべきだとの方針を打ち出す。「セクハラ問題が深刻化しているにもかかわらず、現行法では禁止規定など何もない」というのが最大の理由という。(5.22日付 読売)

# ★ダイヤルQ<sup>2</sup>に倫理規程

日本電信電話(NTT)の回線を使った有料情報サービス「ダイヤルQ<sup>2</sup>」の番組内容を審査している社団法人・全日本テレホンサービス協会(東京、衛藤隆吉理事長)は31日、社会問題になっている露骨な性的内容の番組の規制を中心とした「ダイヤルQ<sup>2</sup> 倫理規程」を発表した。「青少年への配慮」では、「悪影響を及ぼす性的表現が含まれている情報を流してはならない」と規定するなど全面的に禁止規定を盛り込んだ厳しい内容になっているが、不特定多数の

会話や見知らぬ男女を結ぶ「パーティーライン」「ツーショット」については、「通信の秘密」にかかわることから、一步距離を置いた。(6.1日付 朝日)

# ★パーマ禁止校則訴訟

校則に違反してパーマをかけたなどとして、卒業1ヵ月前に東京葛飾区の私立修徳高校を自主退学となった元女子生徒が、学校と校長を相手に「重すぎる処分で違法だ」として卒業認定と同校生徒としての地位確認などを求めた訴訟で、東京地方裁判所の石垣君雄裁判長は21日、請求をいずれも退ける判決を言い渡した。

判決はパーマをかけることを禁じた校則について、「高校生にふさわしい髪形を維持し、非行を防止することに目的がある」として、その必要性を認めようえて、原告の元女子生徒は、これより前に学校に無断で自動車運転免許を取得して嚴重警告を受けていた点を指摘、「学校側に裁量権の逸脱はない」と述べた。

同校ではこの元女子生徒への処分と同時に、校則で禁じられたオートバイ免許を取得、運転した元男子生徒が退学処分になったが、東京地裁は先月「裁量権の逸脱で違法」との判断を示し、学校側に慰謝料の支払いを命じる元生徒側勝訴の判決を言い渡している。(6.21日付 朝日)

# ★中絶禁止法案で揺れるポーランド

社会主義政権下では自由だった中絶を禁止するかどうかで、昨秋からポーランドを2分して争われてきた中絶禁止法案は予定されていた17日、国会下院での審議が行なわれないまま「先延ばし」になった。今回の中絶禁止法案は、レイプによる妊娠でも、経済的理由で堕胎を必要とする場合でも、中絶を認めないとする極めてカトリック色の強いもの。背景にはカトリック教会からの「圧力」が指摘されており、共産党政権崩壊後のポーランドでカトリック教会がいかに力を得ているかを示しているという。(5.28日付 読売)

## ★出生率低下続く

厚生省が6日発表した「平成2年人口動態統計」で、合計特殊出生率が史上最低の1・53に落ち込み（情報欄参照）出生数から死亡数を差し引いた自然増加数が初めて高知県で減少に転じた。出生率低下の背景には、女性の社会進出や高学歴化に伴う晩婚化などが指摘されているが、今回の統計で、出生率は女性の30歳代ではむしろ上昇しているのに対し、20歳代は急激に下がっており、これが全体の出生率を引き下げている。

一方、厚生省が同時にまとめた「将来推計人口」では、'98年には65歳以上の老年人口が15歳未満の年少人口を上回り、来世紀初頭には世界一の老人大国になる。予測を上回る少産化の進展で、高齢化社会に向けての足取りが一段と速まっている。（6.7日付 読売）

## ★売られる赤ちゃん

ルーマニアではチャウシェスク時代、国力の増強をはかるための無理な人口増加計画の後遺症で、孤児の数は13万人にも上った。一昨年の革命直後から子どもたちの悲惨な状況が報道され、外国人との養子縁組が始まったが、やがて簡単に養子縁組ができるという点が注目され、子どもが欲しい夫婦が欧米から殺到。

政府の養子縁組委員会によると、その数は今年に入ってから4千人近くに達した。最初から自分の子どもとして育てることができる生後2、3週間の赤ちゃんを欲しがる人が多く、親の同意を得るため支払われる金は交渉次第で、数百ドルから数千ドルと幅があるが、平均で2千ドル。ブロードの髪に青い目、白い肌の赤ちゃんは特に人気があり、高い金が支払われる。首都ブカレストでは街頭で赤ちゃんを売るジプシーが現われたり、業者がアパートに買い集めた子どもを監禁して摘発されるなど、大きな社会問題になっている。（6.20日付 朝日）

## ★介護専門の「職安」構想

労働省各局の課長クラスで構成する「介護プロジェクトチーム」がまとめた報告書によると、高齢者や病人、障害者を介護する人手を確保し、あっせんするため、介護専門の公共職業安定所（仮称、ケアサービス・ハローワーク）をつくる構想をたて、厚生省とも調整したうえで、'92年度予算案の概算要求に盛り込む。

同報告書では他に勤労者が家族などの介護のために休暇をとる権利を保障する「介護休業法」（仮称）を新たに制定する構想もあり込まれている。（6.11日付 朝日）

## ★脳死を「人の死」とするか

臨時脳死及び臓器移植調査会（会長・永井道雄国際文化会館理事長）は14日、第20回の会合を開き、「脳死の人からの臓器移植を認めるべきだ」とする「中間意見」をまとめた。しかし、脳死を「人の死」と認め現在の法体系のもとでも移植を認められるとする立場をとる多数の委員と、「脳死を人の死と認めると社会的混乱が起きる。脳死移植を実施するには、それを可能にする新しい法の創造が必要だ」とする少数の委員が最後まで対立。中間意見は、少数意見を添付する異例の形になった。

臨調は来年1月までに、脳死移植実施の具体的な方法を探ることにしているが、両者の根本的な立場の違いは今後の議論に深刻な影響を与えそうだ。（6.15日付）

京都地検の田辺信好次席検事は17日、定例の記者会見で、「脳死移植には殺人罪を適用することもありうる」との見解を示した。「人の死は、刑法、民法上、客観性と明白性がなければならないのに、脳死は、医師のグループにより判定基準が微妙に異なっていると指摘。「心臓の鼓動の完全停止」を死とする従来の見解を変更する必要はなく、このようなあいまいな脳死判定基準で脳死移植が行われた場合は、殺人罪の容疑を含め「事件捜査の対象になる」と述べた。（6.19日付 ともに朝日）

# ●●●●●●●●●●編集後記●●●●●●●●●●

◆タイムリーに厚生省の「人口動態統計」の発表があった。「合計特殊出生率」というのが、どういふ数字なのか、厚生省にたずね、実際に計算してみた。たしかに一・五三と出てきたものの、数字におきかえた「産む数」をどう読むのか、分母に入っている一人として未だにピンとこないでいる。今回は、出生率低下、生殖技術に焦点をあてた。このテーマはつづけて考えたい。(青木)

◆文化人類学の原ひろ子さんによると、ヘアーインディアンの子どもたちは、十歳頃までに自分の守護霊と出合い、その守護霊に道を尋ねながら人生を歩むという。従って、親といえどもゆきずりの関係。自分の子は自分が育てなければ、とも思わず、子をもらいも

らわれ、子育てを楽しむと、決められた枠の中で黒か白かを問う息苦しさとは別種のふつと心なごむ世界。(稲邑)

◆夏季フォーラムの申し込み締切りは七月十九日です。これからでも間に合うかもしれない。即こ一報下さいませ。

今年の会場、八王子のセミナーハウスは十四年前、育児ノイローゼから脱出すべく大学の通信教育を始めた時、同じ思いを抱えた仲間たちに出会えたセミナーの開催会場でもあった。私には思い出深いところでもまた新たな出会いを期待して……。(河村)

♥女性はだれでも、結婚をして子どもを産むと思っていた少女のころ。何も考えず軽い気持ちで、「お子さんはまだで

すか?」と聞いてしまったこと。自分が知らぬ間に人々をきずつけていたかもしれないと思うと、心が少し痛みます。今は結婚をしても子どもをつくらない夫婦がふえているとか。今は女性の考えで、子どもを産む、産まないを決める時代なのですね。(渡辺)

★たつた今、フォーラムのシンポジスト藤田進さんにお会いしたところです。「アラブやイスラエルの提つて立つ基盤は、われわれ人間の浅知恵では計り知れない世界。知的になればなるほど日本は西欧化していくが、実は大事なものを切り捨ててきたのではない。物質的に満たされてはいても、日本で生きるの、苦しくなっていく……」。この号のテーマで私が感じたのも同じことでした★次号は「売買春の構図」です。(半田)

**Weバックナンバー** (在庫があります。ご注文は、最寄りの書店「地方小扱い」または、料金をおそえの上、振替で直接ウイ書房へ)

- 90/5 生、そして死に迫る教育 (¥567)
- 90/6 「家庭生活」をどう語る (¥567)
- 90/7 「環境・資源」を見つめる (¥567)
- 90/8.9 消費者教育は、何を指す? (¥567)
- 90/夏増刊号 家庭科が変わる  
一情報化のうねりの中で (¥721)
- 90/10 地域をよみがえらせる (¥567)
- 90/11 高齢化社会がやってくる (¥567)

- 90/12 マス・メディアは何処へ (¥567)
- 90/冬増刊号 出会いは歴史をつくる (¥721)
- 91/1 性役割の固定化は描かれたか (¥567)
- 91/2.3 新しい家庭科を創る (¥567)
- 91/4 「教師」という仮面を脱ぐ (¥580)
- 91/5 少年・少女の現在 (¥580)
- 91/6 心からからだへ (¥580)
- 91/7 生と死を授業で (¥580)

## 新しい家庭科——

Vol.10 No.5 1991年7月20日発行  
定価580円(本体563円+税17円)送料共  
年間購読料・定価7200円  
編集兼発行人/半田たつ子

発行所/(有)ウイ書房

〒182 東京都調布市西つつじヶ丘2-25-14  
☎・FAX03(3326)1380 郵便振替 東京6-59867  
第一勧業銀行 調布仙川支店 普預1075292  
印刷所/(有)岩佐印刷所〒112文京区春日1-6-7

家庭科男女とも必修!

共学の授業づくりにWeが贈る

# 家庭科新時代

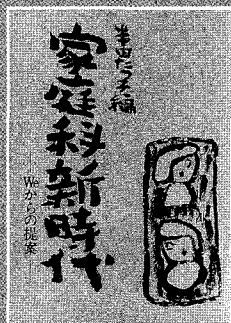
—Weからの提案—

小・中・高・珠玉の実践31編

男女共修の家庭科の授業で、  
生活を大切にするあなたの座右に

半田たつ子編

2060円 千310円



## ●男女で学ぶ新しい家庭科 —京都における歩みと実践—

森 幸枝

1339円 千260円

## ●消費者教育の創造

宮坂広作

2060円 千260円

## ●教室のミニ舞台から 児玉澄子 —こぼれ話20—

1350円 千260円

## ●若いいのちの像 児玉澄子 —私のカウンセリング入門—

1339円 千260円

## ●子どもって不思議 長谷川孝 —学ぶことは生きること—

1339円 千260円

## ●私塾霞国語教室風景 もしかしたらちいさなじゅくはユートピア

武田秀夫

1751円 千260円

## ●人間って不思議 —一つの視角—

半田たつ子

1545円 千310円

## ●木犀の匂う朝に

半田たつ子

1800円 千260円

## ●子ども発、大人へ —いま生まれる新しい関係—

「学習の主人公」と小沢牧子

1339円 千260円

## ●らくだが翔んだ 平井雷太 —教育の常識の非常識—

1236円 千260円

## <羽生楨子詩集>

## ●木、鳥、娘たちとわたし

1030円 千260円

## ●絵 III

1030円 千260円

## ●夢運び屋

1545円 千260円

## ●花・野菜詩集

1648円 千260円

ご注文は最寄りの書店に(地方小扱)。直接お申込みの場合は送料をお添えの上、振替で

# ウイ書房

東京都調布市西つつじヶ丘2の25の14  
電話 3326-1380 振替 東京 6-59867